

南相馬市内遺跡発掘調査報告書13

—平成29・30・令和元年度試掘調査報告—

植松B遺跡	(2次調査)	片草南原遺跡	(3次調査)	北明内遺跡	(3次調査)
桜井D遺跡	(17次調査)	鯖沢遺跡	(1次調査)	大田和広畑遺跡	(8次調査)
八幡林遺跡	(18次調査)	入竜田C遺跡	(1次調査)	巢掛場遺跡	(4次調査)
八郎内遺跡	(8次調査)	玉ノ木平C遺跡	(1次調査)	大悲山遺跡	(1次調査)
大田和広畑遺跡	(6次調査)	上広畑B遺跡	(1次調査)	大井花輪遺跡	(2次調査)
桜井C遺跡	(5次調査)	清信遺跡	(1次調査)	原町区小木迫地区	(1次調査)
八幡林遺跡	(19次調査)	小原遺跡	(1次調査)	原町区石神坂下地区	
池ノ沢遺跡	(2次調査)	宮平遺跡	(2次調査)	小高区上根沢大久保地区	
大田和広畑遺跡	(7次調査)	比丘尼沢B遺跡	(2次調査)	小高区金谷若林地区	
白幡前遺跡	(1次調査)	諏訪原遺跡	(2次調査)	小高城跡	(4次調査)
高見町B遺跡	(6次調査)	御所内遺跡	(1次調査)		
高松C遺跡	(2次調査)	永渡横穴墓群	(1次調査)		

令和元年10月
南相馬市教育委員会

南相馬市内遺跡発掘調査報告書13

—平成29・30・令和元年度試掘調査報告—

植松B遺跡	(2次調査)	片草南原遺跡	(3次調査)	北明内遺跡	(3次調査)
桜井D遺跡	(17次調査)	鯖沢遺跡	(1次調査)	大田和広畑遺跡	(8次調査)
八幡林遺跡	(18次調査)	入竜田C遺跡	(1次調査)	巢掛場遺跡	(4次調査)
八郎内遺跡	(8次調査)	玉ノ木平C遺跡	(1次調査)	大悲山遺跡	(1次調査)
大田和広畑遺跡	(6次調査)	上広畑B遺跡	(1次調査)	大井花輪遺跡	(2次調査)
桜井C遺跡	(5次調査)	清信遺跡	(1次調査)	原町区小木迫地区	(1次調査)
八幡林遺跡	(19次調査)	小原遺跡	(1次調査)	原町区石神坂下地区	
池ノ沢遺跡	(2次調査)	宮平遺跡	(2次調査)	小高区上根沢大久保地区	
大田和広畑遺跡	(7次調査)	比丘尼沢B遺跡	(2次調査)	小高区金谷若林地区	
白幡前遺跡	(1次調査)	諏訪原遺跡	(2次調査)	小高城跡	(4次調査)
高見町B遺跡	(6次調査)	御所内遺跡	(1次調査)		
高松C遺跡	(2次調査)	永渡横穴墓群	(1次調査)		

令和元年10月
南相馬市教育委員会

序 文

文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産です。地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の発展、そして地域のアイデンティティー形成の根幹をなすものです。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができない先人の生活の様子や、文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

南相馬市内では、東日本大震災からの復旧・復興に伴う工事をはじめ、数多くの開発行為が行われており、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財を保護することが必要となっています。このような状況のなか、教育委員会では、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施いたしました。開発に際しては、これらの資料をもとに、地権者の方々及び関係機関と遺跡の保存について協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

また、平成 29・30・令和元年度は国史跡などの重要な価値を持つ遺跡の、新たな知見を得る調査成果がありました。八幡林遺跡の調査では、国史跡の真野古墳群 A 地区の古墳に伴う周溝の一端を把握でき、小高城跡では中世段階の整地層の範囲が確認されるなど、今後の史跡の保存や活用を進めるうえで、貴重な成果を得ることができました。

本書は、平成 29・30・令和元年度に文部科学省の補助金の交付を得て実施した南相馬市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめた報告書です。今後、これら埋蔵文化財の調査の成果が文化財の保護や地域研究ために活用されることを祈念します。

結びに、試掘調査の実施にご協力賜りました多くの関係者の皆様、加えて震災復旧、復興にご支援、ご尽力頂きました皆様に、心から感謝申し上げます。

令和元年 10 月

南相馬市教育委員会
教育長 大和田 博之

例 言

1. 本書に記載した内容は、平成29・30・令和元年度に南相馬市教育委員会が実施した南相馬市内の埋蔵文化財試掘調査、発掘調査の成果報告である。
2. 試掘調査・発掘調査等にかかる経費は、文部科学省補助金の交付を得ている。
3. 発掘調査ならびに報告書刊行は、以下の体制で実施した。

- ・調査期間 平成29年3月13日～令和元年5月31日
- ・整理期間 平成29年3月13日～令和元年10月31日
- ・調査主体 南相馬市教育委員会

事務局 南相馬市教育委員会文化財課

平成30年度

教育長	大和田 博 行	主任文化財主事	佐 川 久
事務局長	木 村 浩 之	主 査	林 紘太郎
文化財課長	堀 耕 平	主任文化財主事	佐 藤 友 之
文化財係長	川 田 強	埋蔵文化財調査員	濱 須 脩 (嘱託)
主 査	荒 淑 人	埋蔵文化財調査員	小 椋 紗貴江 (嘱託)
主任文化財主事	藤 木 海		

平成31年度 (令和元年度)

教育長	大和田 博 行	主任文化財主事	佐 川 久
事務局長	羽 山 時 夫	主任主査	田 中 稔 (震災記録誌担当)
文化財課長	堀 耕 平	主任文化財主事	佐 藤 友 之
課長補佐兼文化財係長	齋 藤 直 之	埋蔵文化財調査員	濱 須 脩 (嘱託)
埋蔵文化財担当係長	川 田 強	埋蔵文化財調査員	小 椋 紗貴江 (嘱託)
主 査	荒 淑 人	市史編纂編集員	茂 木 千恵美 (嘱託)
主任文化財主事	藤 木 海	市史編纂編集員	岡 加奈子 (嘱託)

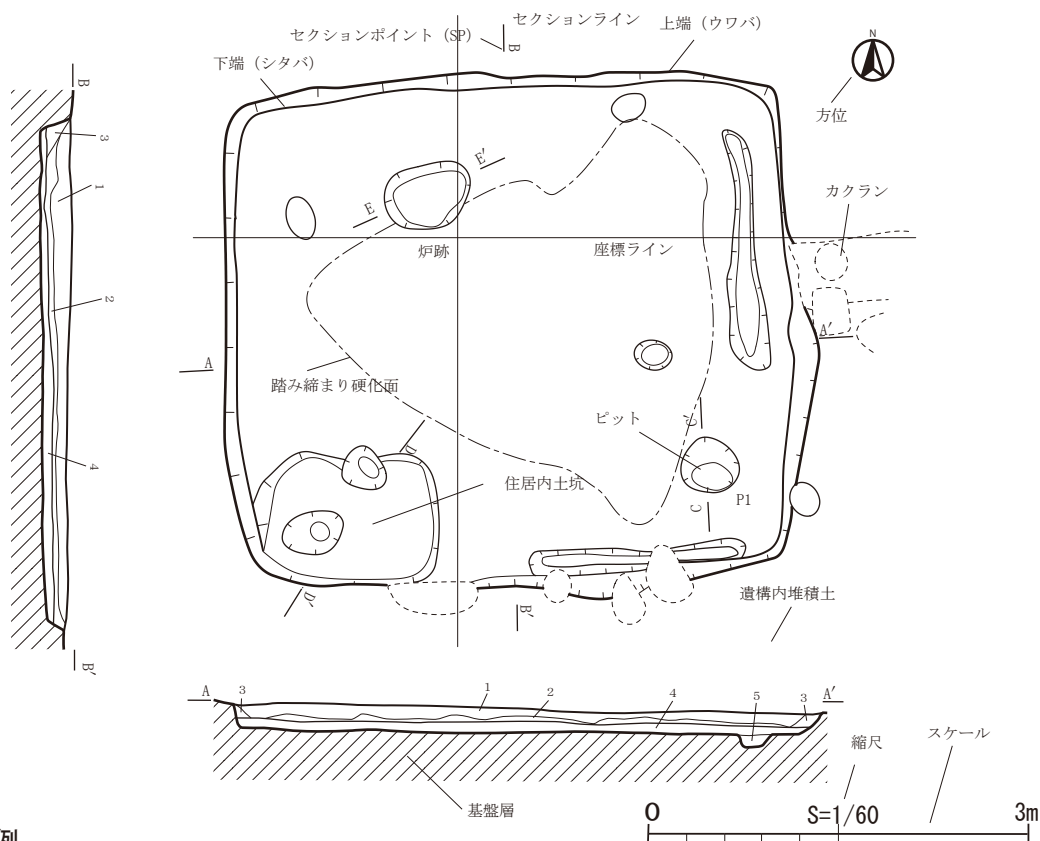
整理補助員 泉田あずさ・岩崎美和子・寺島千尋・山本樹里・渡部定子

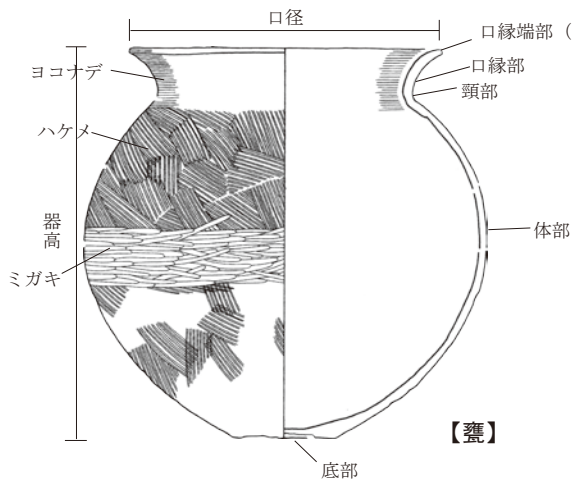
4. 福島県教育委員会からの市町村技術支援により、以下の職員からの支援を受けた。
 - ・平成29年度 高 橋 保 雄 (新潟県支援)
 - 加 藤 学 (新潟県支援)
 - ・平成30年度 藤 田 祐 (青森県支援)
5. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。
南相馬市・相馬小高神社・藤倉ゴム工業株式会社・鈴木克英・伏見美香・今野澄雄・株式会社福島エナジー・中川正俊・佐藤亮太・佐藤めぐみ・株式会社国新・高橋正勝・渡部貴大・渡部聖子・行徳清助・株式会社アンベリアル・昭和運輸株式会社・株式会社富士テクニカルコーポレーション・株式会社東興商事・一般社団法人アミートラスト・末永里美・大亀正樹・石田諭・株式会社GREAT・佐藤建設株式会社 (順不同 敬称略)

6. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。
文化庁文化財部記念物課・福島県教育委員会・公益法人福島県文化振興財団・福島県立博物館
高田昌幸・木村裕之・津田直子・佐藤啓・吉野滋夫・香川慎一・渡部紀・轡田克史・山本友紀
大栗行貴・岡部睦美（福島県教育委員会）、武田寛生（静岡県派遣）、最上法聖・藤田祐（青
森県派遣）、高橋保雄・佐藤友子・加藤学（新潟県派遣）、堀口智彦（埼玉県派遣）、渡瀬健
太（兵庫県派遣）、斉木巖（兵庫県神戸市支援）、鳥居達人（岩手県派遣）、門脇秀典・飯村
均（公益法人福島県文化振興財団）（順不同 敬称略）
7. 本報告書に掲載した文章ならびに挿図・写真図版は荒 淑人、林 紘太郎、小椋 紗貴江、濱須
脩が執筆・作成し、最終的な編集は各担当者と協議して小椋が行った。
8. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

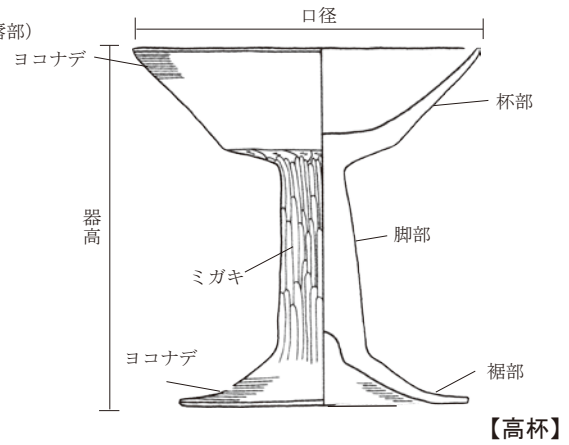
凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水系レベルは海拔高度を示す。
2. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。
T：トレンチ、SI：竪穴住居跡、SB：掘立柱建物跡、SD：溝跡、SK：土坑、SE：井戸、SA：柵
列、P：ピット、SX：性格不明遺構 K：攪乱、L：基本層位、ℓ：遺構内層位
3. 調査区位置図作成に使用した□は調査区を示し、白塗りは遺構未確認調査区、黒塗りは遺構確
認調査区を示す。
4. 遺構図・遺物図の解説に使用した用語は下記に示した図のとおりである。

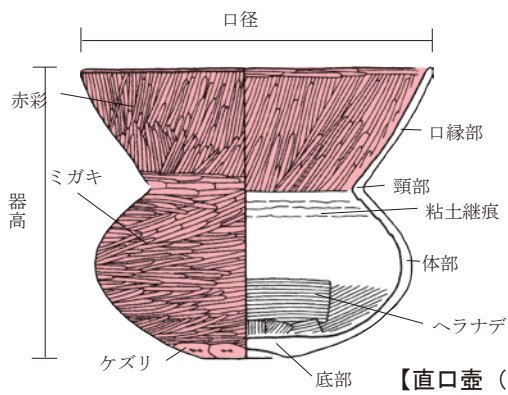




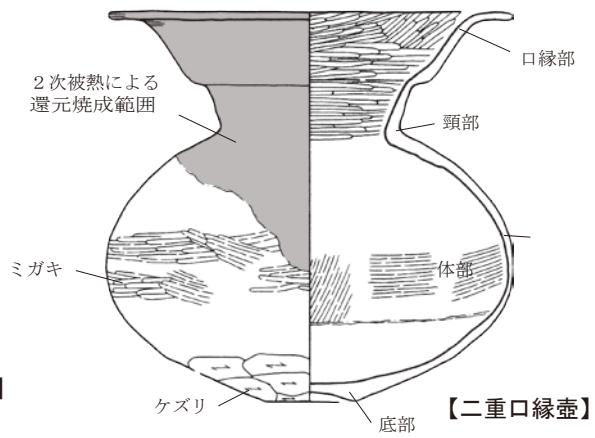
【甕】



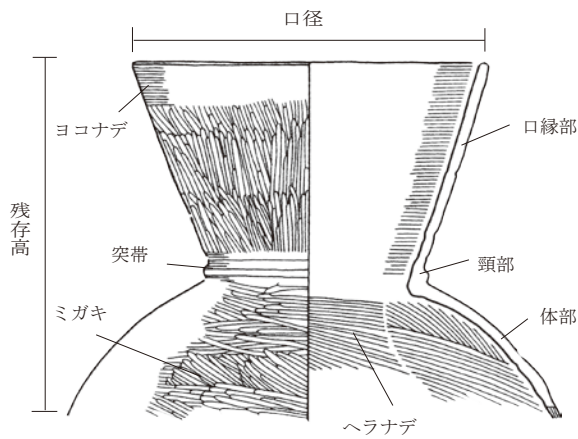
【高杯】



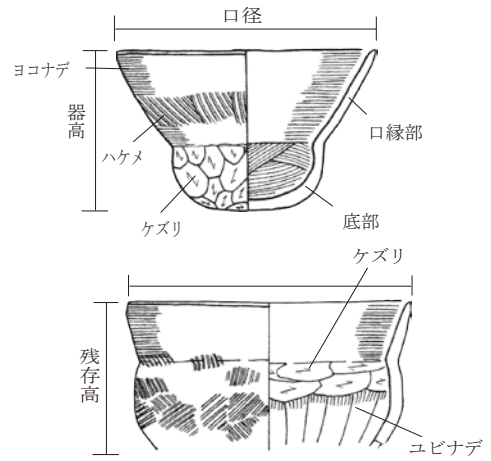
【直口壺 (埴)】



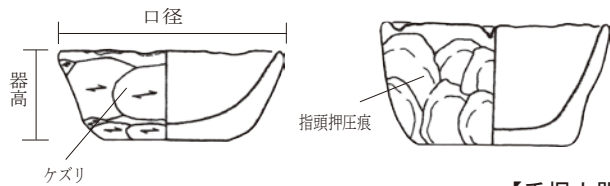
【二重口縁壺】



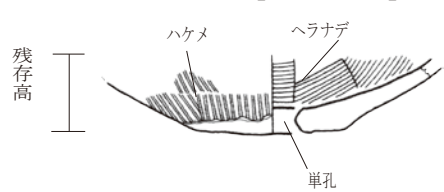
【直口壺】



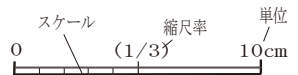
【小型丸底壺】



【手捏土器】



【甑】



遺物凡例

目 次

序 文	i
例 言	iii
凡 例	iv
目 次	vii
挿図目次	ix
写真目次	x
表 目 次	xii

第Ⅰ章 南相馬市を取り巻く環境

第1節 遺跡を取り巻く環境

第1項 地 理 的 環 境	1
第2項 歴 史 的 環 境	1

第Ⅱ章 調査に至る経過

第1節 調 査 に 至 る 経 過

第1項 平成30年度試掘調査の概要	5
-------------------	---

第Ⅲ章 調 査 成 果

第1節 平成30年度試掘調査成果

第1項 植松B遺跡（2次調査）	9
第2項 桜井D遺跡（17次調査）	12
第3項 八幡林遺跡（18次調査）	15
第4項 八郎内遺跡（8次調査）	18
第5項 大田和広畑遺跡（6次調査）	20
第6項 桜井C遺跡（5次調査）	23
第7項 八幡林遺跡（19次調査）	26
第8項 池ノ沢遺跡（2次調査）	44
第9項 大田和広畑遺跡（7次調査）	45
第10項 白幡前遺跡（1次調査）	46
第11項 高見町B遺跡（6次調査）	47
第12項 高松C遺跡（2次調査）	48
第13項 片草南原遺跡（3次調査）	49
第14項 鯖沢遺跡（1次調査）	50
第15項 入竜田C遺跡（1次調査）	51

第16項	玉ノ木平C遺跡（1次調査）	55
第17項	上広畑B遺跡（1次調査）	56
第18項	清信遺跡（1次調査）	57
第19項	小原遺跡（1次調査）	59
第20項	宮平遺跡（2次調査）	60
第21項	比丘尼沢B遺跡（2次調査）	61
第22項	諏訪原遺跡（2次調査）	62
第23項	御所内遺跡（1次調査）	63
第24項	永渡横穴墓群（1次調査）	64
第25項	北明内遺跡（3次調査）	68
第26項	大田和広畑遺跡（8次調査）	74
第27項	巢掛場遺跡（4次調査）	76
第28項	大悲山遺跡（1次調査）	77
第29項	大井花輪遺跡（2次調査）	78
第30項	原町区小木迫地区（1次調査）	81
第31項	原町区石神坂下地区	88
第32項	小高区上根沢大久保地区	89
第33項	小高区金谷若林地区	92

第2節 平成29年度試掘調査成果

第1項	小高城跡（4次調査）	93
-----	------------	----

報告書抄録

奥付

挿 図 目 次

図 1	南相馬市位置図	1	図 56	小原遺跡位置図	59
図 2	主要遺跡位置図	4	図 57	調査区位置図	59
図 3	調査遺跡位置図	7	図 58	宮平遺跡位置図	60
図 4	調査地点位置図	9	図 59	調査区位置図	60
図 5	植松B遺跡2次調査トレンチ配置図	9	図 60	比丘尼沢B遺跡位置図	61
図 6	桜井D遺跡位置図	12	図 61	調査区位置図	61
図 7	遺構配置図	12	図 62	諏訪原遺跡位置図	62
図 8	1 T 平面図・断面図	13	図 63	調査区位置図	62
図 9	八幡林遺跡位置図	15	図 64	御所内遺跡位置図	63
図 10	1 T 平面図	15	図 65	調査区位置図	63
図 11	真野古墳群A地区49号墳全体図	16	図 66	永渡横穴墓群位置図	64
図 12	八郎内遺跡8次調査位置図	18	図 67	調査区位置図	64
図 13	八郎内遺跡8次調査トレンチ配置	18	図 68	北明内遺跡位置図	68
図 14	大田和広畑遺跡位置図	20	図 69	調査区位置図(全体)	68
図 15	大田和広畑遺跡6次調査トレンチ配置図	20	図 70	調査区位置図(A区)	69
図 16	大田和広畑遺跡6次調査1 T 平面図	21	図 71	調査区位置図(B区)	69
図 17	桜井C遺跡位置図	23	図 72	調査区位置図(C区)	70
図 18	桜井C遺跡5次調査トレンチ配置図	23	図 73	調査区位置図(D区)	71
図 19	桜井C遺跡5次調査遺構配置図	24	図 74	大田和広畑遺跡位置図	74
図 20	八幡林遺跡位置図	26	図 75	調査区位置図	74
図 21	調査地点位置図	26	図 76	巢掛場遺跡位置図	76
図 22	八幡林遺跡19次調査遺構配置図	27	図 77	調査区位置図	76
図 23	1号竪穴住居跡平面図・断面図	30	図 78	大悲山遺跡位置図	77
図 24	1号竪穴住居跡出土遺物(1)	31	図 79	調査区位置図	77
図 25	1号竪穴住居跡出土遺物(2)	32	図 80	大井花輪遺跡範囲図	78
図 26	2号竪穴住居跡平面図・断面図	35	図 81	調査区位置図	78
図 27	S X 1 平面図・断面図	36	図 82	トレンチ配置図	79
図 28	池ノ沢遺跡位置図	44	図 83	1 T 平面図・断面図	79
図 29	調査区位置図	44	図 84	小木迫地区遺跡位置図	81
図 30	大田和広畑遺跡位置図	45	図 85	調査区位置図(全体)	81
図 31	調査区位置図	45	図 86	調査区位置図(松ヶ沢B遺跡)	82
図 32	白幡前遺跡位置図	46	図 87	調査区位置図(向畑遺跡)	82
図 33	調査区位置図	46	図 88	調査区位置図(松ヶ沢A遺跡A区)	83
図 34	高見町B遺跡位置図	47	図 89	調査区位置図(松ヶ沢A遺跡B区)	84
図 35	調査区位置図	47	図 90	坂下地区位置図	88
図 36	高松C遺跡位置図	48	図 91	調査区位置図	88
図 37	調査区位置図	48	図 92	大久保地区位置図	89
図 38	片草南原遺跡位置図	49	図 93	調査区位置図	89
図 39	調査区位置図	49	図 94	塚状遺構土層断面図	90
図 40	鯖沢遺跡位置図	50	図 95	金谷若林地区位置図	92
図 41	調査区位置図	50	図 96	調査区位置図	92
図 42	入竜田C遺跡位置図	51	図 97	小高城跡位置図	93
図 43	調査区位置図	51	図 98	調査区位置図	93
図 44	19 T S I 1 平面図	52	図 99	1・2 T 平面図・断面図	95
図 45	23 T S I 3 平面図	52	図 100	4 T 平面図・断面図	95
図 46	24 T S I 2 平面図	52	図 101	6 T 平面図・断面図	97
図 47	31 T S I 4 平面図	52	図 102	7・8・9 T 平面図・断面図	98
図 48	入竜田C遺跡出土遺物	53	図 103	10・11 T 平面図・断面図	100
図 49	玉ノ木平C遺跡位置図	55	図 104	12・13 T 平面図	101
図 50	調査区位置図	55	図 105	14・15 T 平面図	102
図 51	上広畑B遺跡位置図	56	図 106	小高城4次調査出土遺物(1)	108
図 52	調査区位置図	56	図 107	小高城4次調査出土遺物(2)	109
図 53	清信遺跡位置図	57	図 108	小高城4次調査出土遺物(3)	110
図 54	調査区位置図	57	図 109	小高城4次調査出土遺物(4)	111
図 55	1 T・2 T 平面図	58			

写真目次

植松B遺跡2次調査

写真1	調査着手前	11
写真2	重機掘削状況	11
写真3	2 T 調査状況	11
写真4	2 T 土層断面	11
写真5	5 T 調査状況	11
写真6	5 T 土層断面	11

桜井D遺跡17次調査

写真7	調査区近景	13
写真8	人力掘削作業状況	13
写真9	1 T 調査状況	14
写真10	1 T 土層断面	14
写真11	2 T S I 1 東辺の一部	14
写真12	2 T 調査状況	14
写真13	2 T 土層断面	14
写真14	埋め戻し状況	14

八幡林遺跡18次調査

写真15	調査着手前	17
写真16	調査状況	17
写真17	真野古墳群A地区49号墳周溝	17
写真18	土層断面	17
写真19	49号墳と周溝	17
写真20	周溝近景	17

八郎内遺跡8次調査

写真21	調査区近景	18
写真22	1 T 調査状況	19
写真23	1 T 土層断面	19
写真24	2 T 調査状況	19
写真25	2 T 土層断面	19

大田和広畑遺跡6次調査

写真26	調査区近景	21
写真27	調査区近景	21
写真28	重機掘削状況	21
写真29	精査作業風景	21
写真30	1 T 全景	22
写真31	黒色土分布状況	22
写真32	1 T 土層断面	22
写真33	2 T 調査状況	22
写真34	2 T 土層断面	22

桜井C遺跡5次調査

写真35	調査着手前	24
写真36	人力掘削状況	24
写真37	1 T 調査状況	24
写真38	1 T 土層断面	24
写真39	1 T 1号竪穴住居跡	25
写真40	2 T 3号竪穴住居跡	25
写真41	2 T 3号竪穴住居跡	25
写真42	2 T 3・4号竪穴住居跡	25
写真43	3 T 調査状況	25
写真44	3 T 土層断面	25

八幡林遺跡19次調査

写真45	調査着手前	39
写真46	重機掘削状況	39
写真47	遺構検出状況全景	39
写真48	1号竪穴住居跡検出状況	39
写真49	2号竪穴住居跡検出状況	39
写真50	1号性格不明遺構検出状況	39
写真51	1号竪穴住居跡土層断面	40
写真52	1号竪穴住居跡土層断面	40
写真53	1・2号竪穴住居跡調査状況	40
写真54	1号竪穴住居跡調査状況全景	40
写真55	1号竪穴住居跡土器出土状況	40
写真56	1・2号竪穴住居跡全景	40
写真57	1号竪穴住居跡完掘状況	41
写真58	2号竪穴住居跡完掘状況	41
写真59	1号性格不明遺構調査状況	41
写真60	1号性格不明遺構土層断面	41
写真61	1号性格不明遺構調査状況	41
写真62	1号性格不明遺構完掘状況	41
写真63	出土遺物(1)	42
写真64	出土遺物(2)	43

池ノ沢遺跡2次調査

写真65	1 T 調査状況	44
写真66	3 T S K 1 土層断面	44

大田和広畑遺跡7次調査

写真67	1 T 調査状況	45
写真68	2 T 調査状況	45

白幡前遺跡1次調査

写真69	1 T 調査状況	46
写真70	2 T 調査状況	46

高見町B遺跡6次調査

写真71	調査前状況	47
写真72	1 T 調査状況	47

高松C遺跡2次調査

写真73	調査前状況	48
写真74	1 T 調査状況	48

片草南原遺跡3次調査

写真75	調査前状況	49
写真76	1 T 調査状況	49

鯖沢遺跡1次調査

写真77	1 T 調査状況	50
写真78	5 T 調査状況	50

入竜田C遺跡1次調査

写真79	23 T S I 3 出土遺物	53
写真80	16 T 調査状況	54
写真81	19 T S I 1 検出状況	54
写真82	23 T 調査状況	54

写真83	23 T	遺物出土状況	54
写真84	24 T	調査状況	54
写真85	24 T	S I 3 検出状況	54
写真86	31 T	調査状況	54
写真87	31 T	S I 4 検出状況	54
玉ノ木平 C 遺跡 1 次調査			
写真88	3 T	調査状況	55
写真89	3 T	溝跡土層断面	55
上広畑 B 遺跡 1 次調査			
写真90	1 T	調査状況	56
写真91	2 T	調査状況	56
清信遺跡 1 次調査			
写真92	1 T	調査前状況	57
写真93	1 T	S I 1 土層断面	57
写真94	1 T	調査状況	58
写真95	2 T	調査状況	58
写真96	2 T	調査状況	58
小原遺跡 1 次調査			
写真97	1 T	調査状況	59
写真98	4 T	調査状況	59
宮平遺跡 2 次調査			
写真99	1 T	調査状況	60
写真100	2 T	調査状況	60
比丘尼沢 B 遺跡 2 次調査			
写真101	2 T	調査状況	61
写真102	4 T	調査状況	61
諏訪原遺跡 2 次調査			
写真103	1 T	調査状況	62
写真104	2 T	調査状況	62
御所内遺跡 1 次調査			
写真105		調査前状況	63
写真106	1 T	調査状況	63
永渡横穴墓群 1 次調査			
写真107		調査区全景	66
写真108	1 T	調査状況	66
写真109	4 T	調査状況	66
写真110	7 T	調査状況	66
写真111		横穴墓群調査状況	66
写真112		横穴墓群調査状況	66
写真113		横穴墓群調査状況	66
写真114		1号横穴墓検出状況	66
写真115		2号横穴墓調査状況	67
写真116		3号横穴墓調査状況	67
写真117		4号横穴墓調査状況	67
写真118		5号横穴墓調査状況	67
写真119		6号横穴墓調査状況	67
写真120		7号横穴墓調査状況	67
写真121		8号横穴墓調査状況	67
写真122		8号横穴墓玄門検出状況	67

北明内遺跡 3 次調査			
写真123	3 T	調査状況	72
写真124	3 T	木炭焼成土坑検出状況	72
写真125	18 T	調査状況	72
写真126	18 T	1号木炭窯跡検出状況	72
写真127	43 T	調査状況	72
写真128	43 T	1号廃滓場・土坑検出状況	72
写真129	54 T	調査状況	72
写真130	54 T	2号木炭窯跡検出状況	72
写真131	113 T	調査状況	73
写真132	113 T	4号木炭窯跡検出状況	73
写真133	114 T	調査状況	73
写真134	114 T	3・4号木炭窯跡検出状況	73
写真135		3号木炭窯跡検出状況	73
写真136		4号木炭窯跡検出状況	73
写真137	121 T	調査状況	73
写真138	121 T	6号木炭窯跡検出状況	73
大田和広畑遺跡 8 次調査			
写真139		調査前状況	75
写真140		重機作業状況	75
写真141	2 T	調査状況	75
写真142	11 T	調査状況	75
写真143	13 T	調査状況	75
写真144	29 T	調査状況	75
写真145	30 T	調査状況	75
写真146	35 T	調査状況	75
巢掛場遺跡 4 次調査			
写真147	1 T	調査状況	76
写真148	2 T	調査状況	76
大悲山遺跡 1 次調査			
写真149	1 T	調査状況	77
写真150	2 T	土層断面	77
大井花輪遺跡 2 次調査			
写真151		調査着手前	80
写真152		重機掘削状況	80
写真153	1 T	S I 1 全景	80
写真154	1 T	S I 1 確認状況・土層断面	80
写真155		住居立ち上がりと炉跡	80
写真156	2 T	全景	80
写真157	2 T	土層断面	80
写真158		埋め戻し作業終了状況	80
原町区小木迫地区 1 次調査			
写真159	1 T	調査状況	85
写真160	1 T	廃滓場検出状況	85
写真161	3 T	調査状況	85
写真162	3 T	製鉄炉検出状況	85
写真163	7 T	調査状況	85
写真164	7 T	木炭窯跡検出状況	85
写真165	8 T	調査状況	85
写真166	8 T	木炭窯検出状況	85
写真167	47 T	調査状況	86
写真168	47 T	木炭窯跡検出状況	86
写真169	50 T	調査状況	86

写真170	50 T	木炭窯跡検出状況	86		
写真171	51 T	調査状況	86		
写真172	51 T	木炭窯跡検出状況	86		
写真173	52 T	調査状況	86		
写真174	52 T	木炭窯跡検出状況	86		
写真175	74 T	調査状況	87		
写真176	75 T	調査状況	87		
写真177	80 T	調査状況	87		
写真178	81 T	調査状況	87		
写真179	95 T	調査状況	87		
写真180	102 T	調査状況	87		
写真181	104 T	調査状況	87		
写真182	105 T	調査状況	87		
原町区石神坂下地区					
写真183		調査前状況	88		
写真184	1 T	調査状況	88		
小高区上根沢大久保地区					
写真185		塚状遺構 調査前状況	91		
写真186		塚状遺構 人力掘削作業状況	91		
写真187	33 T	調査状況	91		
写真188	34 T	調査状況	91		
写真189		塚状遺構 土層断面	91		
写真190	16 T	調査状況	91		
写真191	21 T	調査状況	91		
写真192	27 T	調査状況	91		
小高区金谷若林地区					
写真193		調査前状況	92		
写真194	4 T	調査状況	92		
小高城跡4次調査					
写真195	1 T	調査状況	105		
写真196	1 T	土層断面詳細	105		
写真197	2 T	調査状況	105		
写真198	3 T	調査状況	105		
写真199	4 T	調査状況	105		
写真200	4 T	土層断面	105		
写真201	5 T	調査状況	105		
写真202	4 T	調査地近景	105		
写真203	6 T	調査状況	106		
写真204	6 T	土塁積土土層断面	106		
写真205	6 T	土塁下遺構検出状況	106		
写真206	6 T	P31礎盤状況	106		
写真207	7 T	調査状況	106		
写真208	8 T	調査状況	106		
写真209	9 T	調査状況	106		
写真210	9 T	P39土層断面	106		
写真211	10 T	調査状況	107		
写真212	10 T	P48土層断面	107		
写真213	11 T	調査状況	107		
写真214	11 T	SK2土層断面	107		
写真215	12 T	調査状況	107		
写真216	13 T	調査状況	107		
写真217	14 T	調査状況	107		
写真218	15 T	調査状況	107		

表 目 次

表 1	南相馬市主要遺跡一覧表	3
表 2	南相馬市埋蔵文化財調査状況一覧	6
表 3	1号竪穴住居跡出土遺物観察表	33
表 4	小高城跡4次調査出土遺物観察表	112

第 I 章 南相馬市を取り巻く環境

第 1 節 遺跡を取り巻く環境

第 1 項 地理的環境

福島県南相馬市は、福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。行政境としては、北側は相馬市、南側は双葉郡浪江町、西側は相馬郡飯館村と接する。

浜通り地方の地質は、阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉断層（岩沼一久之浜構造線）により明瞭に区分される。

市内の地形を見ると、西部域に南北方向に連なる阿武隈高地が縦走り、そこから太平洋

に向かって派生する低丘陵と丘陵間に開析された沖積平野で構成される。阿武隈高地にかかる西側の丘陵の標高は100～150mを測り、海岸部に近い市内中心付近では標高50～60m前後、海岸部では20～30mとなる。



図 1 南相馬市位置図

第 2 項 歴史的環境

南相馬市内に所在する旧石器時代の遺跡としては、大谷地遺跡(1)・畦原A遺跡(2)・畦原C遺跡(3)・熊下遺跡(4)・袖原A遺跡(5)・陣ヶ崎A遺跡(6)・南町遺跡(7)・橋本町A遺跡(8)・橋本町B遺跡(9)・桜井遺跡(10)、荻原遺跡(11)の11遺跡があり、後期旧石器時代のナイフ形石器や彫刻刀型石器が出土している。

縄文時代の遺跡では、宮後A遺跡(12)・宮後B遺跡(13)から大木7a～10式、八幡林遺跡(14)では早期から晩期までの土器が出土する。八重米坂A遺跡(15)・羽山B遺跡(16)・畦原F遺跡(17)では早期から前期の遺構・遺物が確認されており、赤沼遺跡(18)・犬這遺跡(19)でも前期の土器が出土している。中期では阿武隈高地裾部にある前田遺跡(20)や、新田川北岸の台地上にある高松遺跡(21)で大木7b～10式、植松A遺跡(22)で大木10式期の住居跡が調査されている。

太田川流域の上ノ内遺跡(23)・町川原遺跡(24)では後期の綱取式が出土し、片倉の羽山遺跡(25)では晩期の大洞C1～A式、高見町A遺跡(26)では晩期中葉の土器と石囲炉をもつ住居跡が調査されている。宮田貝塚(27)・加賀後貝塚(28)・片草貝塚(29)は内陸部に位置する貝塚を伴う前期前半の集落である。前期後半以降には海岸部にある浦尻貝塚(30)や角部内南台貝塚(31)が代表的な貝塚として知られている。

真野川とその支流の上真野川との合流点に所在する鷺内遺跡(32)では、新地式～大洞A式までの土器が出土するとともに、後期～晩期を中心とした土坑群や編組製品も多く出土している。

弥生時代としては天神沢遺跡(33)や桜井遺跡(34)が著名であるが、近年では桜井古墳(35)

や川内迫B遺跡群F地点(36)で中期中葉の榊形罎式土器が出土し、高見町A遺跡からは終末期の十王台式土器が出土している。

古墳時代では、古墳時代前期に新田川南岸の河岸段丘上に桜井古墳が築造され、周辺の古墳と共に桜井古墳群上渋佐支群(37)・同高見町支群(38)を構成する。真野川流域の柚原古墳群(39)では周溝内から塩釜式土器が出土し、高見町A遺跡・桜井B遺跡(40)・東広畑B遺跡(41)でも塩釜式土器が出土している。前方後円墳である上ノ内前田古墳(42)は中期の可能性があり、真野古墳群(43)・横手古墳群(44)は円筒埴輪を伴うことから、その造営開始は中期末まで遡る可能性がある。この時期の集落は前屋敷遺跡(45)で南小泉式土器を出土する竪穴住居跡が調査されている。後期になると桜井古墳群高見町支群・真野古墳群・横手古墳群などで本格的に古墳群の造営が開始される。真野古墳群は100基を超える東北地方を代表する後期群集墳である。

後期の集落としては大六天遺跡(46)・迎畑遺跡(47)・地藏堂B遺跡(48)、片草古墳群一里段支群(49)・中村平遺跡(50)で後期から終末期の土器が出土する。終末期の横穴墓のうち大窪横穴墓群(51)・羽山横穴墓群(52)、浪岩横穴墓群(53)は玄室内部に装飾壁画が見られ、真野川流域の中谷地横穴墓群は(54)複室構造の玄室を採用している。

奈良・平安時代の遺跡では行方郡家とされる泉官衙遺跡(泉廃寺跡)(55)があり、郡庁院・正倉院・館院などが確認されている。横手廃寺跡(56)・真野古城跡(57)・植松廃寺跡(58)・入道迫瓦窯跡(59)、京塚沢瓦窯跡(60)・犬這瓦窯跡(61)などは瓦を出土する遺跡であり、寺院や瓦を焼成した遺跡と考えられる。市内の低丘陵では製鉄に関連した遺跡が多数確認されており、金沢製鉄遺跡群(62)、蛭沢遺跡(63)・川内迫B遺跡群・出口遺跡(64)・大塚遺跡(65)・横大道遺跡・館越遺跡などで調査が進展している。集落遺跡では広畑遺跡(66)を始めとして市内各地で確認されているが、集落の具体的な構造を知るまでには至っていない。広畑遺跡からは「寺」「厨」などの墨書土器とともに灰釉陶器が出土し、隣接する泉官衙遺跡との関連が示唆される。大六天遺跡から出土した「小穀殿千之」と刻書された須恵器は、行方軍団との関わりが想定される。町川原遺跡でも墨書土器が出土しているが、広畑遺跡のような公的機関の施設名を記したものは見られず、異なった性格をもつ集落と考えられる。

主な中世の遺跡としては城館跡が挙げられ、下総国から下向した相馬氏の最初の居城となる別所館跡(67 現相馬太田神社)や牛越城跡(68)は、相馬氏下向以前の城館跡として良く知られている。小高城跡(69 現相馬小高神社)は相馬氏の居城として機能した中世城館である。本城跡は嘉暦元年から慶長十六年に相馬利胤が中村城を築城するまでの約290年間重要な役割を占めた。その他では泉平館跡(70)・泉館跡(71)・下北高平館跡(72)で調査が行われている。

近世の遺構は、寛文六年以降に築かれた野馬土手と、その出入口となる木戸跡や相馬氏の居城として再整備された牛越城跡がある。野馬土手は、雲雀ヶ原扇状地を囲む、東西約10km×南北約2.6kmの範囲に築かれており、土手内外の出入り口となった羽山岳の木戸跡(73)は南相馬市指定史跡に指定され、良好な形で保存されている。近世後半から近代にかけては中村藩の大規模なたたらである馬場鉄山(74)や正福寺跡(75)、法幢寺跡(76)で近世墓域の調査が行われている。

No.	遺跡名	種別	時代
1	大谷地遺跡	散布地	旧石器・縄文
2	畦原A遺跡	散布地	旧石器
3	畦原C遺跡	散布地	旧石器
4	熊下遺跡	散布地	旧石器
5	袖原A遺跡	散布地	旧石器
6	陣ヶ崎A遺跡	散布地	旧石器
7	南町遺跡	散布地	旧石器
8	橋本町A遺跡	散布地	旧石器
9	橋本町B遺跡	散布地	旧石器
10	桜井遺跡	散布地・集落	旧石器・縄文・弥生 古墳・奈良・平安
11	荻原遺跡	散布地・製鉄跡	旧石器・奈良・平安
12	宮後A遺跡	集落・散布地	縄文
13	宮後B遺跡	集落・散布地	縄文
14	八幡林遺跡	散布地	旧石器・縄文
15	八重米坂A遺跡	集落・散布地	縄文
16	羽山B遺跡	集落・散布地	縄文
17	畦原F遺跡	住落・散布地	縄文
18	赤沼遺跡	集落・散布地	縄文
19	犬這遺跡	散布地	縄文
20	前田遺跡	散布地	縄文
21	高松遺跡	散布地	縄文
22	植松A遺跡	集落・散布地	縄文
23	上ノ内遺跡	散布地	縄文
24	町川原遺跡	集落・散布地	縄文
25	羽山遺跡	集落・散布地	縄文
26	高見町A遺跡	集落・散布地	縄文～平安
27	宮田貝塚	貝塚・散布地	縄文
28	加賀後貝塚	貝塚・散布地	縄文
29	片草貝塚	貝塚・散布地	縄文
30	浦尻貝塚	貝塚・散布地	縄文・平安
31	角部内南台貝塚	貝塚・散布地	縄文
32	鷺内遺跡	散布地・集落	縄文
33	天神沢遺跡	散布地	弥生
34	桜井遺跡	散布地・集落	旧石器・縄文・弥生・ 古墳・奈良・平安
35	桜井古墳	古墳	古墳
36	川内埴B遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安
37	桜井古墳群 上渋佐支群	古墳・集落	縄文～古墳
38	桜井古墳群 高見町支群	古墳・集落	縄文～古墳
39	袖原古墳群	古墳	古墳
40	桜井B遺跡	集落・散布地	弥生・平安
41	東広畑遺跡	集落・散布地	弥生～平安
42	上ノ内前田古墳	古墳	古墳
43	真野古墳群	古墳	古墳
44	横手古墳群	古墳	古墳
45	前屋敷遺跡	集落・散布地	縄文～古墳
46	大六天遺跡	集落・散布地	古墳～平安
47	迎畑遺跡	集落・散布地	古墳
48	地藏堂B遺跡	集落・散布地	古墳
49	片草古墳群 一里段支群	集落・散布地	古墳
50	中村平遺跡	集落・散布地	古墳
51	大窪横穴墓群	横穴墓	古墳
52	羽山横穴墓群	横穴墓	古墳
53	浪岩横穴墓群	横穴墓	古墳
54	中谷地横穴墓群	横穴墓	古墳
55	泉官衙遺跡	官衙	奈良・平安
56	横手廃寺跡	寺院	平安
57	真野古城跡	城館	不明
58	植松廃寺跡	寺院	奈良・平安
59	入道埴瓦窯跡	窯跡	奈良・平安
60	京塚沢瓦窯跡	窯跡・製鉄	奈良・平安
61	金沢製鉄遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安
62	蛭沢遺跡	製鉄	奈良・平安
63	川内埴B遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安
64	出口遺跡	製鉄	平安
65	大塚遺跡	製鉄	平安
66	広畑遺跡	集落・散布地	奈良・平安
67	別所館跡	城館	中世
68	牛越城跡	城館	中世
69	小高城跡	城館	中世
70	泉平館跡	城館・散布地	中世
71	泉館跡	城館	中世
72	下北高平館跡	城館	中世
73	羽山岳の木戸跡	その他	近世
74	馬場鉄山	製鉄	近世
75	正福寺跡	寺院	近世
76	法幢寺跡	寺院・集落	奈良・平安・近世

表 1 南相馬市主要遺跡一覧表

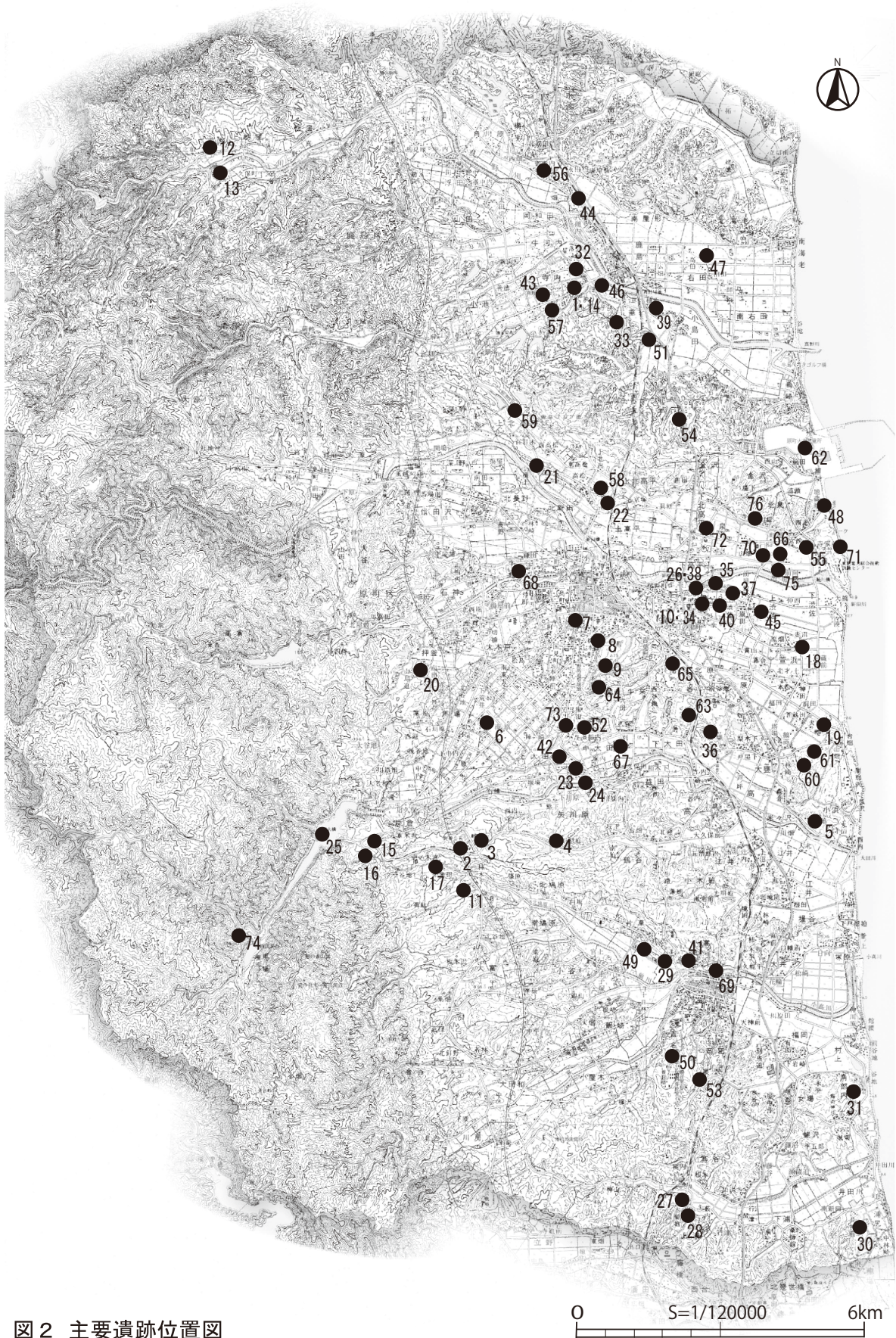


图2 主要遺跡位置图

第Ⅱ章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

第1項 平成29・30・令和元年度調査の概要

平成29年度に実施した調査のうち、本書に記載する小高城跡（4次調査）の調査に至る経緯について述べる。本調査は、県指定史跡である小高城跡に位置する相馬小高神社境内にて行われた調査であり、社務所の老朽化等に伴う改築予定されていることから試掘調査を実施した。調査では、県指定の遺跡を保護する方法を検討する必要があるため、遺跡内における埋蔵文化財の分布範囲の確認調査が実施された。本書では、調査内容と共に出土した遺物について記載している。

平成30年度・令和元年度に市内遺跡発掘調査で実施した調査は、市内における各種開発計画に対する保存協議の資料を得るために行った。また、永渡横穴墓群の1次調査は、平成31年の2月に調査を行ったが、より詳細な調査が必要と判断されたため、追加調査として令和元年度の5月に追加調査を行った。継続しての調査であることから平成30年度調査と合わせて本書への記載となった。

平成30年度の最終的な実績では、周知の埋蔵文化財包蔵地における試掘調査が30件、周知の埋蔵文化財包蔵地外の地点で実施した試掘調査が3件、合計33件の開発計画に対して調査を行った。試掘調査を開発目的別に見ると、個人住宅建設関連が7件、集合住宅建設関連が3件、土砂採取事業関連が7件、太陽光発電施設建設が10件、倉庫・車庫建設関連が2件、その他の民間事業関連が3件、公共事業関連が1件を数える。

試掘調査後の遺跡の取り扱いについては、慎重工事が18件、工事立会が11件、要本発掘調査が4件を数える。個人住宅建設関連では、慎重工事が2件、工事立会が5件である。集合住宅建設では、慎重工事が1件、工事立会が2件である。土砂採取事業では、慎重工事が4件、工事立会が1件、要本発掘調査が2件である。太陽光発電施設建設事業では、慎重工事が6件、工事立会が3件、要本発掘調査が1件である。倉庫・車庫建設では、慎重工事が2件である。民間事業では、慎重工事が2件、工事立会が1件である。公共事業では、要本発掘調査が1件である。

第1項 平成29年度試掘調査の概要

No.	遺跡名	所在地	調査目的	立地	調査期間	対象面積 (開発面積) (㎡)	調査面積 (㎡)	取扱い	備考
1	小高城跡 4次調査	南相馬市小高区 小高字古城	開発 (社務所改築)	段丘	H29. 3. 13 ～5. 30	9491. 0	68. 0	本発掘 調査要	県指定史跡 H29年度調査
2	植松B遺跡 2次調査	南相馬市原町区 上北高平字植松	開発 (工場建設)	低位 丘陵	H30. 4. 10 ～4. 13	3844. 0	240. 0	慎重工事	
3	桜井D遺跡 17次調査	南相馬市原町区 上洪佐字原田	開発 (個人住宅建設)	河岸 段丘	H30. 4. 16 ～4. 22	468. 49	40. 0	立会	
4	八幡林遺跡 18次調査	南相馬市鹿島区 寺内字八幡林	開発 (個人住宅建設)	河岸 段丘	H30. 4. 26	205. 61	39. 0	立会	
5	八郎内遺跡 8次調査	南相馬市鹿島区 西町三丁目	開発 (集合住宅建設)	河岸 段丘	H30. 4. 27	1031. 0	40. 0	慎重工事	
6	大田和広畑遺跡 6次調査	南相馬市小高区 金谷字北原	開発 (太陽光発電施設建設)	河岸 段丘	H30. 5. 1 ～5. 2	1106. 68	50. 0	慎重工事	
7	桜井C遺跡 5次調査	南相馬市原町区 上洪佐字原田	開発 (集合住宅建設)	河岸 段丘	H30. 5. 7 ～5. 11	1057. 0	60. 0	立会	
8	八幡林遺跡 19次調査	南相馬市鹿島区 寺内字八幡林	開発 (個人住宅建設)	河岸 段丘	H30. 5. 15 ～6. 5	358. 15	100. 0	工事立会	記録保存済み
9	池ノ沢遺跡 2次調査	南相馬市小高区 神山字池ノ沢	開発 (土砂採取事業)	丘陵 低地	H30. 6. 19 ～6. 22	9797. 45	150. 0	立会	
10	大田和広畑遺跡 7次調査	南相馬市小高区 大田和字広畑	開発 (太陽光発電施設建設)	河岸 段丘	H30. 6. 21	1390. 0	10. 0	慎重工事	
11	白幡前遺跡 1次調査	南相馬市小高区 大井字上山畑	開発 (太陽光発電施設建設)	段丘	H30. 6. 21	478. 0	4. 0	立会	
12	高見町B遺跡 6次調査	南相馬市原町区 高見町一丁目	開発 (集合住宅建設)	河岸 段丘	H30. 7. 10	990. 0	40. 0	立会	
13	高松C遺跡 2次調査	南相馬市原町区 上北高平字高松	開発 (個人住宅建設)	段丘	H30. 7. 19	283. 0	12. 0	慎重工事	
14	片草南原遺跡 3次調査	南相馬市小高区 片草字北原	開発 (個人住宅建設)	河岸 段丘	H30. 8. 10	976. 48	2. 0	立会	
15	鱈沢遺跡 1次調査	南相馬市小高区 神山字鱈沢	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H30. 8. 30 ～9. 4	9962. 0	31. 0	慎重工事	
16	入竜田C遺跡 1次調査	南相馬市原町区 深野字入竜田	開発 (土砂採取事業)	低位 丘陵	H30. 9. 11 ～10. 16	102309. 0	199. 5	本発掘 調査要	
17	玉ノ木平C遺跡 1次調査	南相馬市小高区 吉名字白旗平	開発 (太陽光発電施設建設)	河岸 段丘	H30. 9. 28	1390. 0	126. 0	慎重工事	
18	上広畑B遺跡 1次調査	南相馬市小高区 小高字上広畑	開発 (太陽光発電施設建設)	段丘	H30. 10. 2	702. 0	40. 0	慎重工事	
19	清信遺跡 1次調査	南相馬市小高区 大井字清信	開発 (太陽光発電施設建設)	河岸 段丘	H30. 10. 3	1591. 0	60. 0	立会	
20	小原遺跡 1次調査	南相馬市原町区 下太田字小原	開発 (車庫・倉庫建設)	低位 丘陵	H30. 10. 18	4501. 0	23. 6	慎重工事	
21	宮平遺跡 2次調査	南相馬市原町区 深野字宮平	開発 (太陽光発電施設建設)	河岸 段丘	H30. 11. 8	978. 0	40. 0	慎重工事	
22	比丘尼沢B遺跡 2次調査	南相馬市原町区 上北高平字比丘尼沢	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H30. 12. 14	570. 0	12. 0	慎重工事	
23	諏訪原遺跡 2次調査	南相馬市小高区 塚原字沼ノ上	開発 (個人住宅建設)	段丘	H30. 12. 17	996. 11	38. 6	立会	
24	御所内遺跡 1次調査	南相馬市鹿島区 横手字御所内	開発 (個人住宅建設)	段丘	H31. 2. 7 ～2. 8	419. 0	16. 0	慎重工事	
25	永渡横穴墓群 1次調査	南相馬市鹿島区 南柚木字八久々沢	開発 (市道改良工事)	丘陵	H31. 2. 13～2. 25 R1. 5. 15～5. 31	913. 0	53. 1	本発掘 調査要	
26	北明内遺跡 3次調査	南相馬市原町区 石神字北明内	開発 (土砂採取事業)	低位 丘陵	H31. 3. 1 ～R1. 5. 7	65487. 0	491. 7	本発掘 調査要	
27	大田和広畑遺跡 8次調査	南相馬市小高区 大田和字広畑	開発 (園芸団地造成)	河岸 段丘	H31. 3. 4 ～3. 15	38431. 9	700. 0	慎重工事	
28	巢掛場遺跡 4次調査	南相馬市原町区 萱浜字巢掛場	開発 (事務所建設)	河岸 段丘	H31. 3. 20 ～3. 22	4479. 0	80. 0	慎重工事	
29	大悲山遺跡 1次調査	南相馬市小高区 泉沢字後屋	開発 (農業倉庫・車庫建設)	丘陵 低地	H31. 3. 18 ～3. 19	72. 62	4. 0	慎重工事	
30	大井花輪遺跡 2次調査	南相馬市小高区 大井字花輪	開発 (太陽光発電施設建設)	河岸 段丘	H31. 3. 22	410. 0	20. 0	立会	
31	小木迫地区 1次調査	南相馬市原町区 小木迫字松ヶ沢	開発 (太陽光発電施設建設)	低位 丘陵	H30. 10. 30 ～12. 18	176872. 10	332. 4	本発掘 調査要	
32	原町区石神 坂下地区	南相馬市原町区 石神字坂下	開発 (太陽光発電施設建設)	河岸 段丘	H30. 7. 24	1206. 0	10. 0	慎重工事	
33	小高区上根沢 大久保地区	南相馬市小高区 上根沢字大久保	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H30. 10. 5 ～10. 25	14039. 0	56. 0	慎重工事	
34	小高区金谷 若林地区	南相馬市小高区 金谷字若林	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H30. 10. 25	243. 0	4. 0	慎重工事	
目的			件数	調査対象面積 (開発面積) (㎡)	調査面積 (㎡)	備考			
開発	個人住宅建設	7	3706. 84	247. 6					
	集合住宅建設	3	3078. 0	140. 0					
	土砂採取事業	7	202407. 45	944. 2					
	太陽光発電施設建設	10	186123. 78	692. 4					
	倉庫・車庫建設	2	4573. 62	27. 6					
	民間事業	4	56245. 9	1088. 0	H29年度 小高城跡(4次調査: 9491. 0㎡、68. 0㎡)				
公共事業	1	913. 0	21. 1						
合計			34	457048. 59	3160. 9				

表2 南相馬市埋蔵文化財調査状況一覧

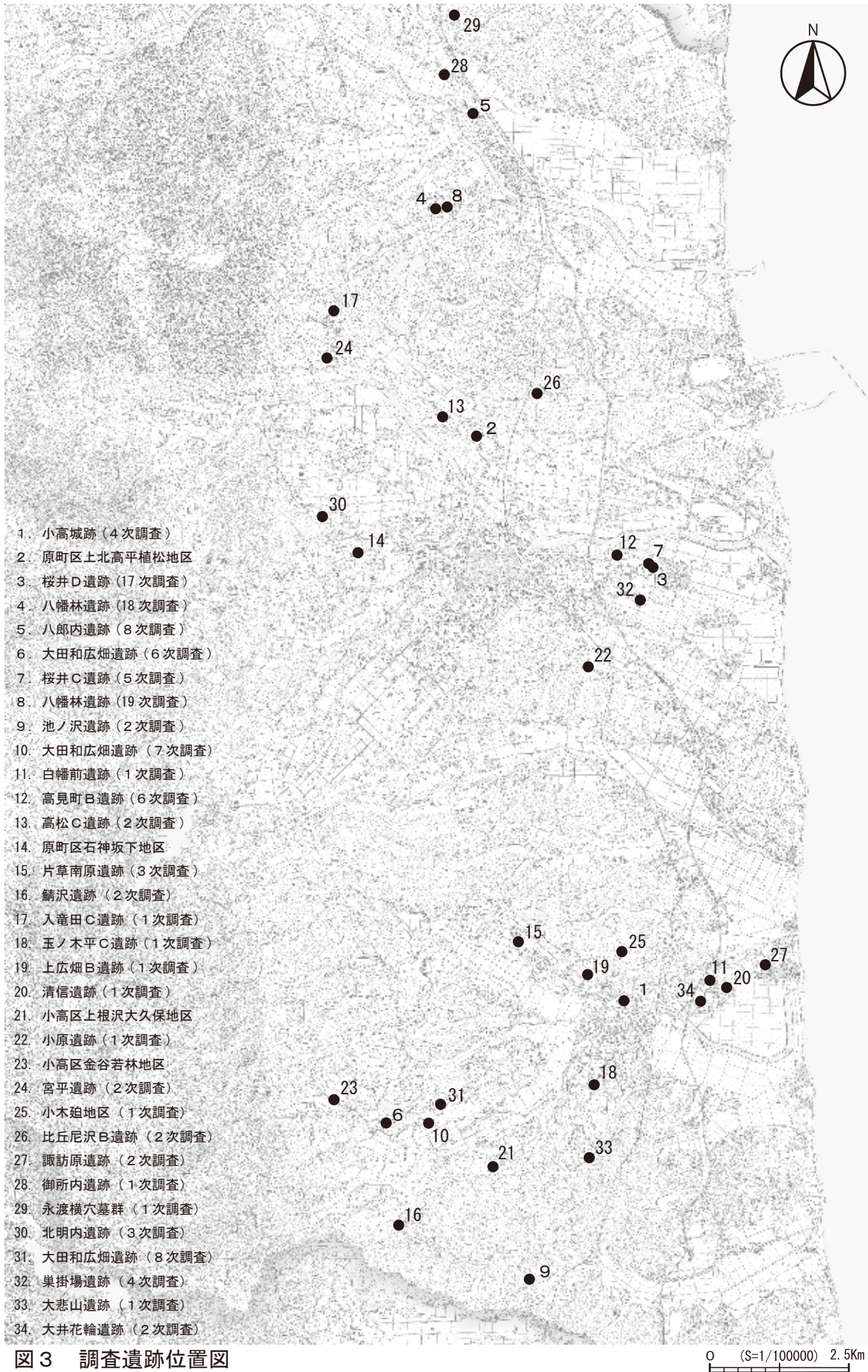


図3 調査遺跡位置図

第Ⅲ章 調査成果

第1節 平成30・令和元年度試掘調査成果

第1項 植松B遺跡（2次調査）

1. 調査内容 工場拡張増設
2. 調査地点 南相馬市原町区字上北高平字植松地内
3. 調査期間 平成30年5月7日～5月11日
4. 調査対象面積 3,844㎡
5. 調査面積 240㎡
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 今回の試掘調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地である植松B遺跡の西側隣接地で計画された工場拡張増設計画に伴い実施した。

試掘調査は、幅1m×長さ40mの細長いトレンチを6箇所を設定して、埋蔵文化財の有無を確認する作業を行った。

試掘調査で確認された基本層序は、LⅠは碎石を含む現在の表土、LⅡは碎石敷以前の黒褐色土による表土、LⅢは暗褐色土に黄色ロームブロックを含む旧畑地耕作土で、LⅣが基盤層となる黄褐色ソフトローム層である。基盤層到達までの深さは、最も浅い1Tで約30cm、最も深い6Tでは約1.1mを計測した。

基盤層を確認するまで過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

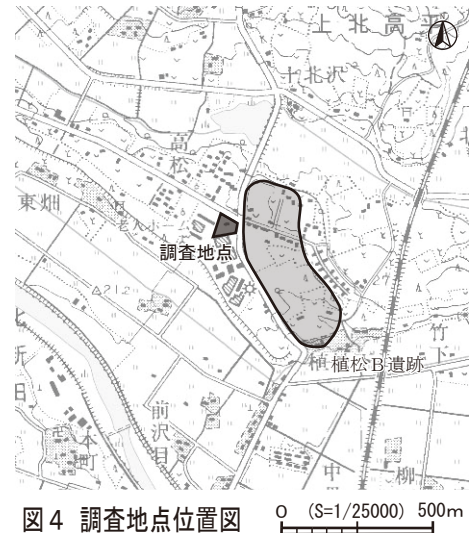


図4 調査地点位置図

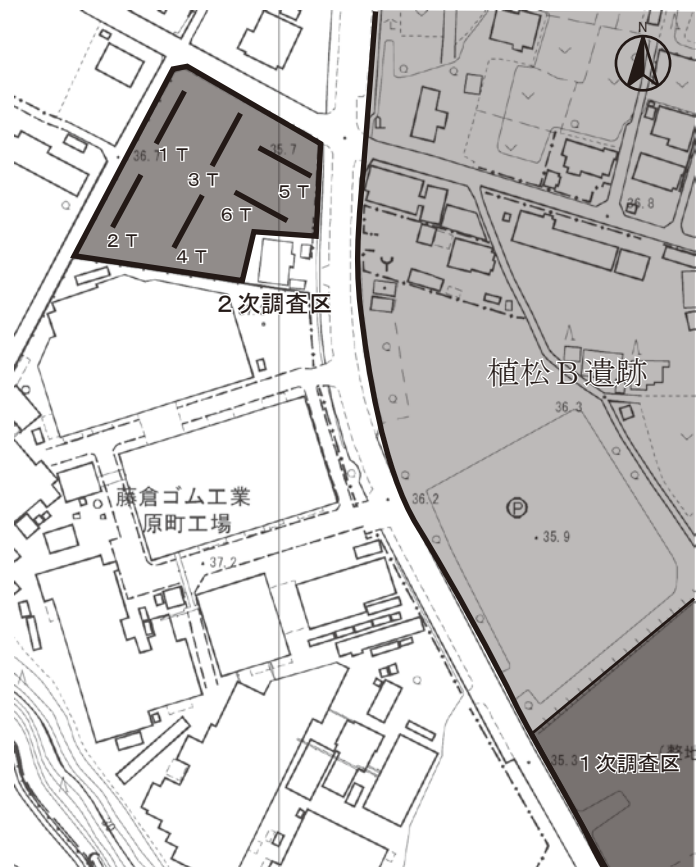


図5 植松B遺跡2次調査トレンチ配置図

7. 調査所見 今回の試掘調査では、東側に隣接する植松B遺跡に関する遺構が展開する可能性が示唆されたことから、調査区を設定して遺構・遺物の広がりを確認するための試掘調査を実施したが、結果的には改めて保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかった。

従って、今回の開発計画地には植松B遺跡に関連する遺構・遺物等が広がることは無いことが明らかとなった。

以上のような試掘調査の成果から、今回の工場拡張増設計画に際しては、埋蔵文化財に対する保護措置等は不要と判断される。



写真1 調査着手前



写真2 重機掘削状況



写真3 2T調査状況



写真4 2T土層断面



写真5 5T調査状況



写真6 5T土層断面

第2項 桜井D遺跡 (17次調査)

1. 調査原因 戸建住宅建設
2. 調査地点 南相馬市原町区
上渋佐字原田地内
3. 調査期間 平成30年4月16日～4月22日
4. 調査対象面積 468㎡
5. 調査面積 40㎡
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 17次調査区は、桜井D遺跡

北辺のほぼ中央に位置する調査区である。

今回の試掘調査は、賃貸戸建住宅4棟の建設計画に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認するために実施した。

試掘調査は、事業計画地内に幅2m×長さ10mの調査区を2箇所に入れて、人力作業で遺構・遺物の確認作業を行った。

試掘調査の結果、1Tから2Tにかけての範囲で竪穴住居跡1軒を確認した。竪穴住居跡は現地表面から約50cmの深さで確認した基盤層となる黄色ソフトローム上面で確認した。1Tでは竪穴住居跡の西辺と調査区南端で溝跡1条が確認され、2Tでは北東コーナーの一部と1Tから続く溝跡を検出した。

竪穴住居跡の規模は未調査の部分もあり推定値とはなるが東西約6.7m、南北約6.6、深さ約70cmを計測し、遺構の遺存状況は極めて良好である。部分的に立ち割りを実施し、竪穴住居跡の底面と堆積状況の確認を行った。L Iは現在の表土、L IIはL I以前の耕作土、L IIIは碎石を含む盛土、L IVが基盤層となる。

竪穴住居跡の堆積土は4層に細分され、01は褐色土、02は黄褐色の初期流入土である。

試掘調査では、土師器・須恵器等の遺物が出土したが、いずれの土器片も基本土層内からの出土であり、1号竪穴住居跡に伴うものは出土しなかった。

溝跡は1T～2Tにかけての約9mを超える規模の直線溝である。溝の南辺は調査区外に展開しており、溝の規模・性格は不明である。溝内からは遺物の出土は認められなかった。

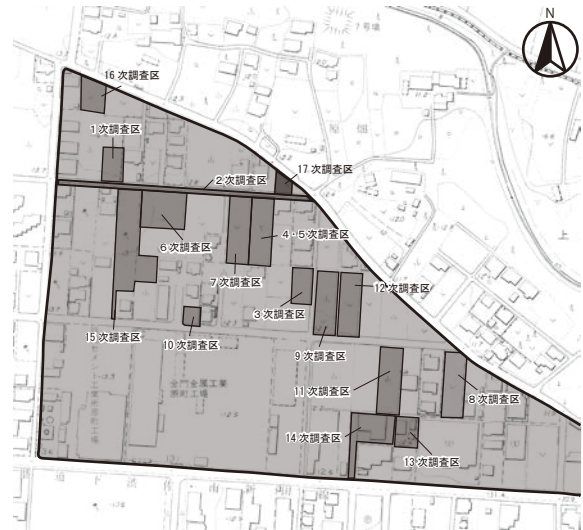


図6 桜井D遺跡位置図

0 (S=1/5000) 100m

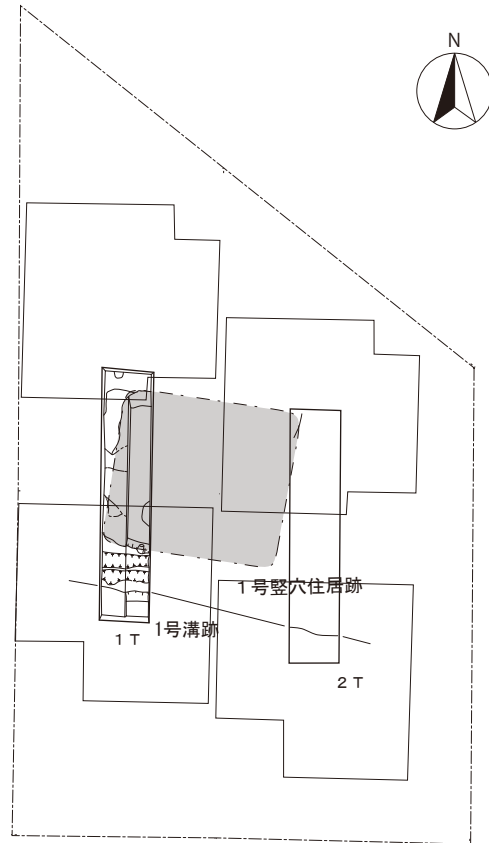


図7 遺構配置図

0 (S=1/300) 5m

8. 調査所見 今回実施した桜井D遺跡17次調査区では、
 竪穴住居跡1軒と溝跡1条を確認した。竪穴住居跡・
 溝跡は基盤層の黄色ソフトロームを
 検出し、現地表面から約50cmの深さ
 に位置する。竪穴住居跡は1辺約6.5
 mを計測し、桜井D遺跡内では比較

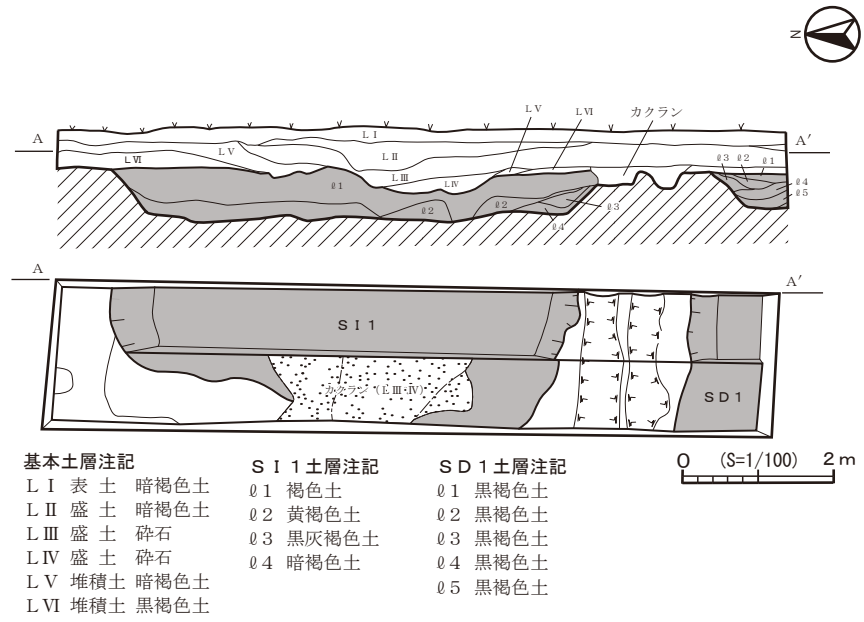


図8 1 T平面図・断面図

的大型の規模を有している。また、竪穴住居跡の底面までの深さも約50cmが遺存している
 ことから、遺構の残りは極めて良好と推測される。

試掘調査では部分的に竪穴住居跡の一部を立ち割り、下層の状況の確認に努めたが、竪
 穴住居跡の年代を示す土器類の資料は得られなかった。しかし、これまでに周辺地区で実
 施された調査成果を踏まえると、おそらくは8世紀後半から9世紀前半頃の、表杉ノ入式
 期の竪穴住居跡の可能性が極めて高いと考えている。

溝跡は竪穴住居跡の主軸方位に直交するように開削されており、竪穴住居跡との関連性
 がうかがえ、集落圍繞などの性格を有していた可能性が示唆される。

以上の調査成果から、遺構確認面に達する造成が行われる場合には、埋蔵文化財に対す
 る保存協議を要するが、今回の賃貸戸建建設では、建物基礎は遺構確認面までは達せず、
 また柱状改良の一部が遺構と重複するものの、遺構への影響は最小限にとどめられると判
 断されることから、今回の工事施工に際しては工事中の立会いの下で施工されることが求
 められる。



写真7 調査区近景



写真8 人力掘削作業状況



写真9 1T調査状況

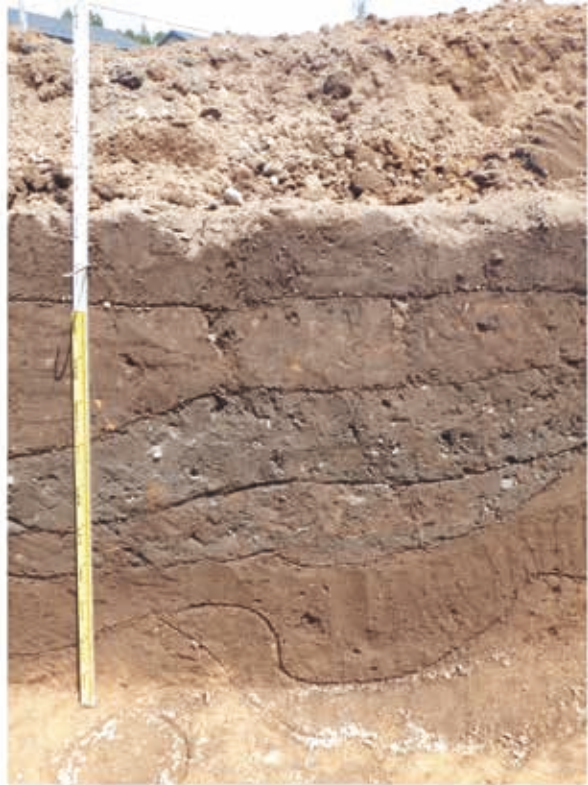


写真10 1T土層断面



写真11 2T SI 1 東辺の一部



写真12 2T調査状況



写真13 2T土層断面



写真14 埋め戻し状況

第3項 八幡林遺跡 (18次調査)

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 南相馬市鹿島区寺内字八幡林地内
3. 調査期間 平成30年4月26日
4. 調査対象面積 205m²
5. 調査面積 42m²
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 八幡林遺跡は上真野川南岸に

発達した河岸段丘上に立地する縄文時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。また、八幡林遺跡は、古墳時代後期の群集墳である真野古墳群A地区が重複する状態で展開しており、真野古墳群A地区の一部は国史跡に指定されている。

八幡林遺跡18次調査地点は、上記の国史跡真野古墳群A地区49号墳の東側隣接地における個人住宅建て替え計画に先立ち、遺構・遺物を確認するために行った。

試掘調査は、建物が建設される予定範囲内に幅3m×長さ14mの調査区を1箇所を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。

調査の結果、基盤層は現地表面から約1.0mの深さで確認した黄褐色ソフトロームである。基盤層の上位層は以下の4層に細分された。山砂層(LⅠ)、碎石の混じる盛土層(LⅡ)、暗褐色土(LⅢ)である。遺構は基盤層であるLⅣの上面で確認した。

確認された遺構は、調査区の西辺部で円弧状に巡る周溝の外周ラインである。内周ラインは調査区外に展開していることから、遺構の全体像は不明であるが、遺構の形状・位置からみて49号墳周溝の東側部分と考えて問題ない。

8. 調査所見 真野古墳群については、昭和20年代に開拓営団による農地開発が進み、多くの古墳が失われる事態となった。このような状況を憂いた地域住民は、昭和22年に慶応義塾大学に学術調査を依頼し、墳丘の分布図作成と大規模な発掘調査が行われることとなった。

真野古墳群A地区49号墳は、この時の慶応義塾大学による学術調査の際に、墳丘測量図の作成と埋葬施設の発掘調査が行われている。古墳の分布図・測量図からは、真野古墳群

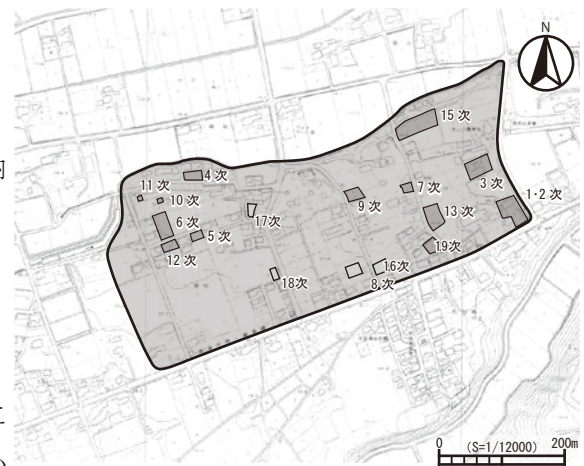


図9 八幡林遺跡位置図

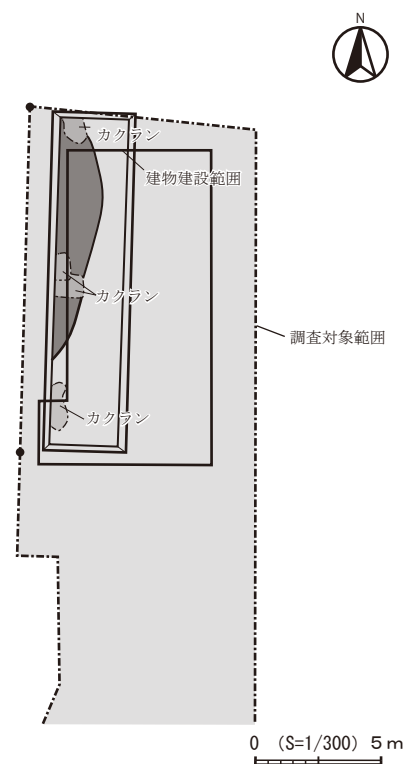


図10 1T 平面図

のなかでも最大規模を誇る20m前後の円墳であったことがうかがえる。埋葬施設は墳丘中央に東西方向に主軸をもつ竪穴式の墓坑を築き、墓坑の内部に川原石を充填した礫槨であったことが記録されている。また、礫槨の西側付近からは滑石製の刀子形・鎌形・槽形・鏡形・斧形の石製模造品が出土し、5世紀後半の築造年代が想定され、真野古墳群の中でも古相の様相が強い古墳である。

昭和50年頃には、49号墳の墳丘の大半が削平を受け、かろうじて墳丘北側の一部がわずかに残存しているにすぎなかったが、昭和54年には49号墳を含む古墳群の一部が国史跡指定を受けることとなった。史跡指定を受けた2年後の昭和56年からは、史跡真野古墳群環境整備事業で史跡真野古墳群の整備事業が行われることとなった。この事業では、境界柵の設置や標柱の設置とともに、真野古墳群A地区27・49・74号墳、真野古墳群B地区18・19号墳の範囲確認調査が実施された。A地区49号墳では、史跡範囲周辺の7ヵ所に調査区が設定され、古墳復元の基礎資料が得られた。この時の調査では、49号墳は周溝の範囲から直径21mの墳丘に、幅約4mの周溝が伴うことが確認された。

今回の個人宅地建て替えに伴う試掘調査で確認された周溝は、49号墳の東側周溝の外周ラインに相当し、昭和56年に実施された範囲確認調査の結果と矛盾するものではなく、真野古墳群A地区49号墳は、直径21mの墳丘に墳丘を全周する周溝を伴う円墳であることが、改めて裏付けられる結果となった。

今回の建物建設では、柱状改良の一部が49号墳の周溝と重複するものの、遺構への影響は最小限に留められることから、工事施工に際しては立会で実施されることが望ましい。

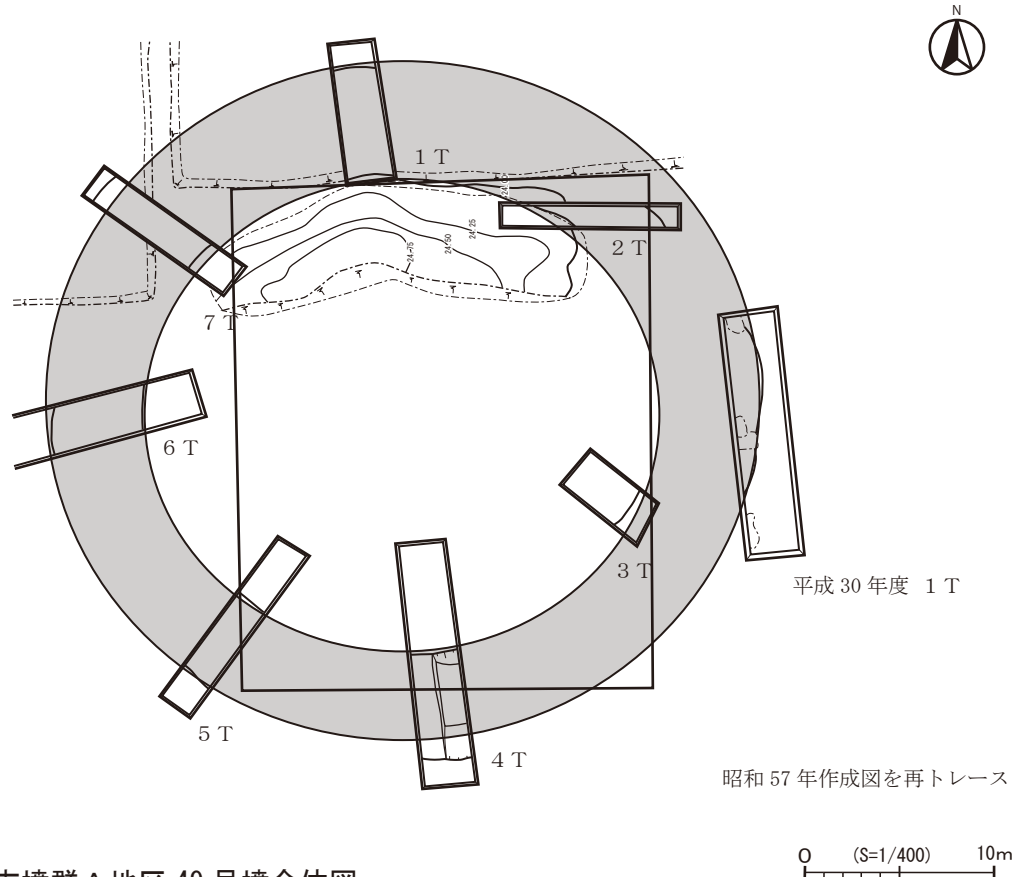


図11 真野古墳群A地区49号墳全体図



写真 15 調査着手前



写真 16 調査状況



写真 17 真野古墳群A地区 49号墳周溝



写真 18 土層断面



写真 19 49号墳と周溝



写真 20 周溝近景

第4項 八郎内遺跡（8次調査）

1. 調査原因 集合住宅建設
2. 調査地点 南相馬市鹿島区西町三丁目地内
3. 調査期間 平成30年4月27日
4. 調査対象面積 1,031m²
5. 調査面積 40m²
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 これまでに、八郎内遺跡で実施した試掘調査は7次調査を数える。過去の調査では、明確な遺構・遺物は確認されておらず、遺跡の詳細については、全く分かっていない。

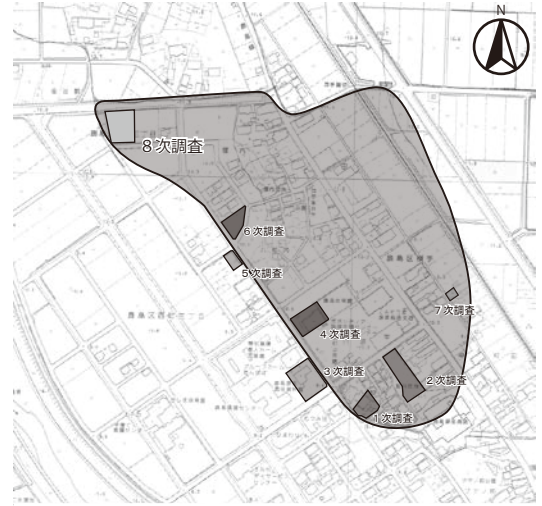


図12 八郎内遺跡8次調査位置図 (S=1/10000) 200m

今回、実施した8次調査は遺跡北西端部における集合住宅建設に先立つ試掘調査である。試掘調査は、開発予定地区内の2箇所に幅2m×長さ10mの調査区を設定し、埋蔵文化財の有無を確認する作業を行った。

試掘調査では、現地表面にはLⅠとした山砂の盛土があり、LⅡは現表土以前の畑地耕作土である。LⅡの下層には厚さ約60cm前後の厚いLⅢとなる山砂層が入り、LⅣは1mを超える厚さの碎石盛土である。基盤層はLⅣの下層で見られた河床面と考えられる礫層となっている。基盤層となる河床面を確認する過程の中では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8. 調査所見 今回の試掘調査地点は、現代の人為的な盛土の下層から、河床面と見られる礫層が確認されたことから、阿武隈高地から太平洋に向かって東流する真野川の旧河道上に位置するものと考えられる。このような試掘調査の知見から、今回の集合住宅建設計画に際しては、改めた埋蔵文化財に対する保護措置は必要とせず、慎重工事により対応することが望ましいと判断される。

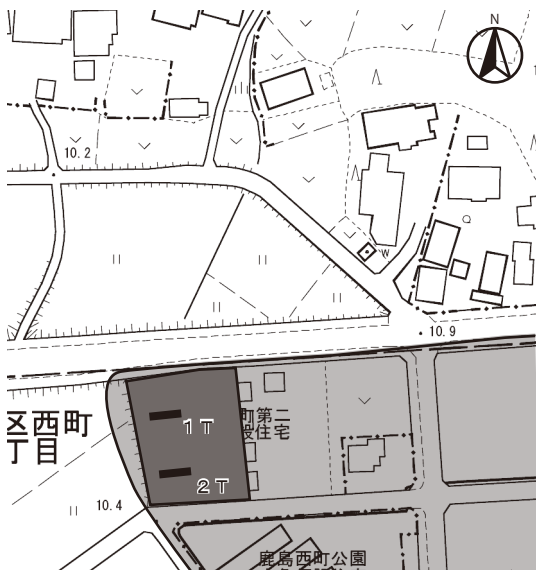


図13 八郎内遺跡8次調査トレンチ配置図 (S=1/2500) 50m



写真21 調査区近景



写真 22 1 T 調査状況

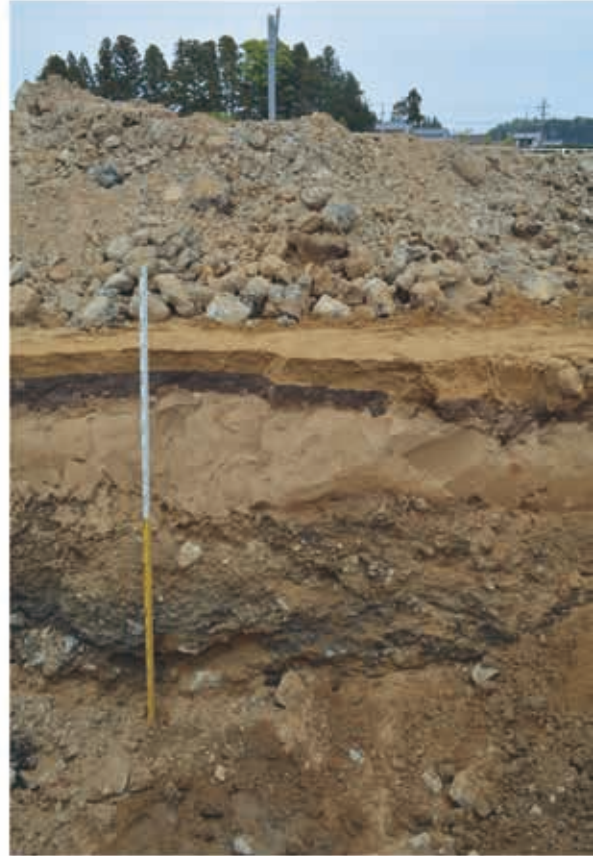


写真 23 1 T 土層断面



写真 24 2 T 調査状況

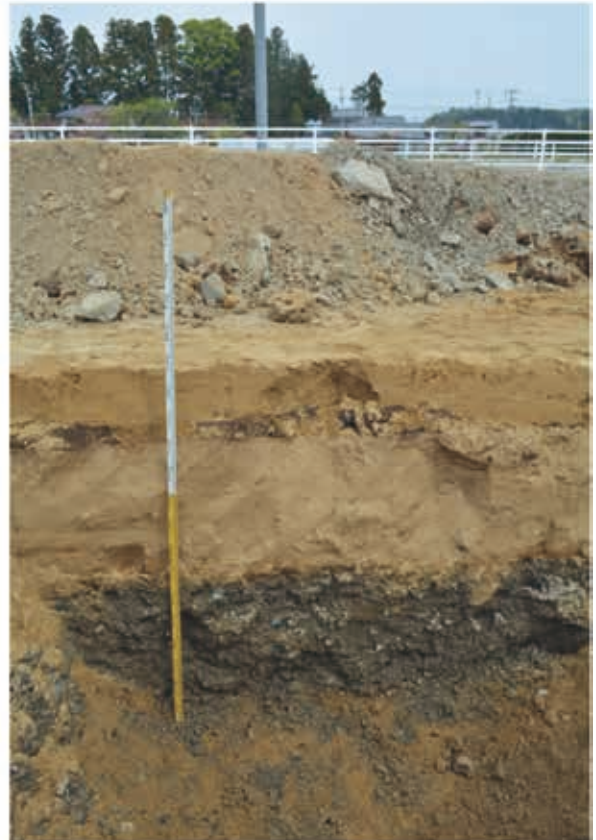


写真 25 2 T 土層断面

第5項 大田和広畑遺跡（6次調査）

1. 調査原因 太陽光発電施設建設
2. 調査地点 南相馬市小高区金谷字北原地内
3. 調査期間 平成30年5月1・2日
4. 調査対象面積 1,106m²
5. 調査面積 50m²
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 今回、大田和広畑遺跡

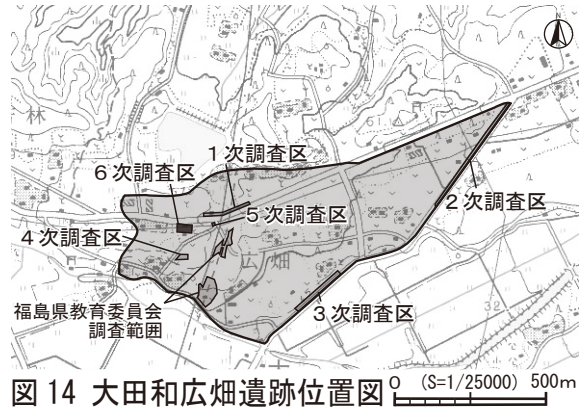


図14 大田和広畑遺跡位置図

遺跡で実施した試掘調査は、当該遺跡内で計画された太陽光発電施設建設に先立ち、区域内の埋蔵文化財の有無を確認するために行った。

試掘調査では、現地表面にはL Iとした碎石敷きの表土があり、L IIは碎石表土以前の堆積土である。L IIの下層からは黄色ソフトロームの基盤層が検出されL IIIとした。現地表面から基盤層までの深さは約30cmである。

1 Tでは、検出した基盤層上面には後世のカクランを受けており、遺存状況は良くはなかったが、調査区の中央で、東西3mの範囲で黒褐色土の分布を確認したため、北側に拡張して、黒色土の範囲ならびに性格の把握に努めた。

拡張の結果、黒色土の分布は東西約3m、南北約2mの隅丸方形であることが確認できた。黒色土の分布範囲の中央には、新たにサブトレンチを設定して黒色土の一部の掘り下げを行ったが、断面形は浅い皿状を呈し、竪穴住居跡のような形状は示さないことが明らかとなった。また、堆積土中からは、遺物等の出土は認められなかったことから、遺構と断定することはできず、くぼみ状の自然地形と判断した。

8. 調査所見 今回の試掘調査地点では、改めて保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、当該地区内における埋蔵文化財の保護措置は必要とせず、慎重工事で対応することが望ましいと判断される。

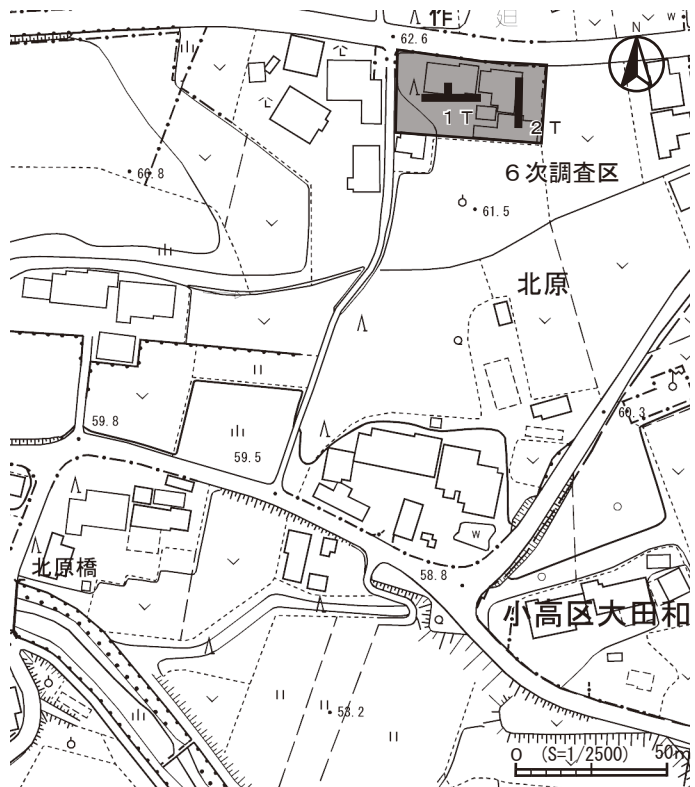


図15 大田和広畑遺跡6次調査トレンチ配置図

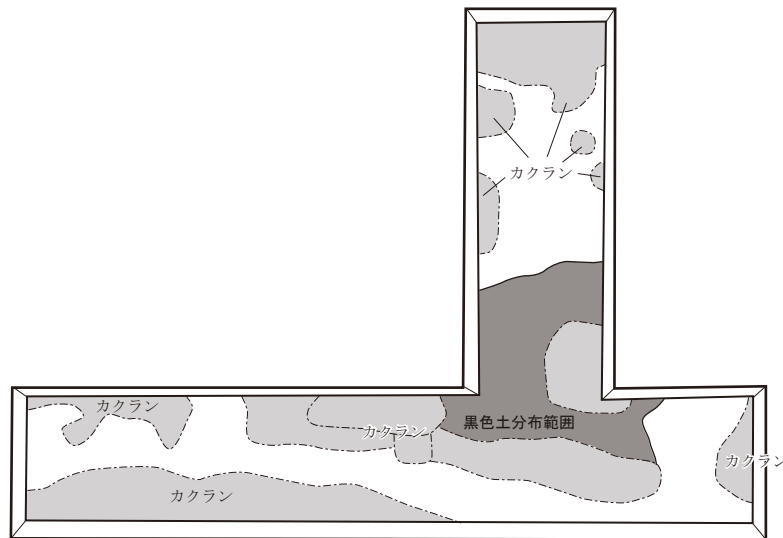


図 16 大田和広畑遺跡 6次調査 1 T 平面図

0 (S=1/100) 2m



写真 26 調査区近景



写真 27 調査区近景



写真 28 重機掘削状況



写真 29 精査作業風景



写真 30 1 T 全景



写真 31 黒色土分布状況



写真 32 1 T 土層断面



写真 33 2 T 調査状況



写真 34 2 T 土層断面

第6項 桜井C遺跡（5次調査）

1. 調査原因 集合住宅建設
2. 調査地点 南相馬市原町区字上渋佐字原田地内
3. 調査期間 平成30年5月7日～5月11日
4. 調査対象面積 1,057m²
5. 調査面積 60m²
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 今回の試掘調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地である桜井C遺跡内で計画された集合住宅建設に伴い実施した。調査は開発予定地内に20m²のトレンチを3箇所にて行った。

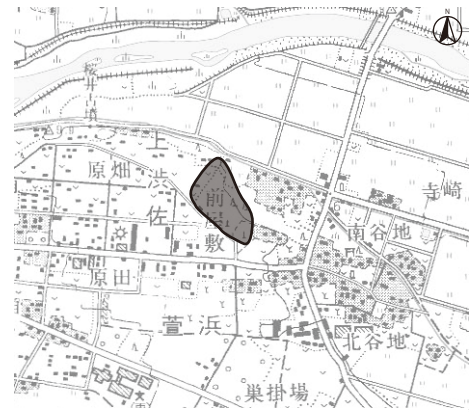


図17 桜井C遺跡位置図

試掘調査は、幅2m×長さ10mのトレンチを3箇所にて設定して、埋蔵文化財の有無を確認する作業を行った。試掘調査で確認された基本層序は、L Iは現表土、L II・IIIは畑地耕作土の黒褐色土で、L IVが基盤層となる黄褐色ソフトローム層である。基盤層到達までの深さは、最も浅い3 Tで約65cm、最も深い1 Tでは約70cmを計測した。

基盤層には重機等の掘削痕が見られ、近現代頃にある程度の土地の造成が行われていたと思われるが、2・3 Tで竪穴住居跡4軒が確認された。いずれの竪穴住居跡も、プランの大部分が調査区外に広がっているため詳細な規模は不明であるが、2号竪穴住居跡は南北5mを計測し北壁にはカマドを備えていることを確認した。

基盤層を確認する過程のなかでは、弥生土器片・土師器片が少量出土したが、図示するまでには至らない小破片であった。

8. 調査所見 今回の調査では、竪穴住居跡4軒と少量の遺物が出土したが、集合住宅の建設設計では、建物基礎は柱状改良が採用され遺構等の損壊は最小限にとどめられることから、改めた発掘調査の必要はなく、工事中の立会により対応することが望ましいと判断される。

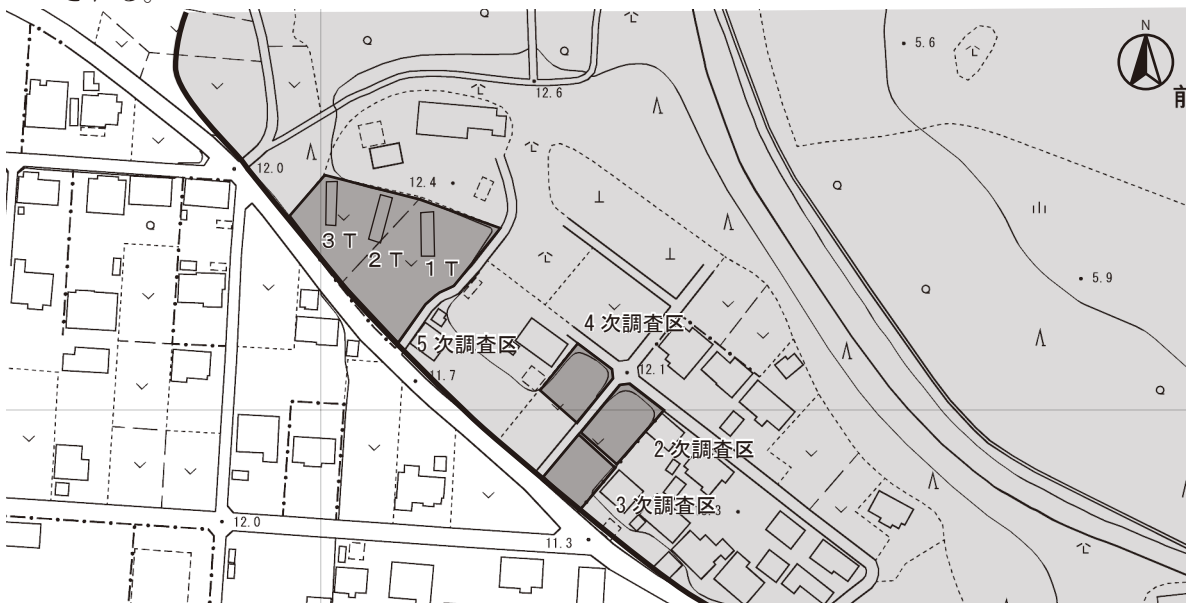


図18 桜井C遺跡5次調査トレンチ配置図

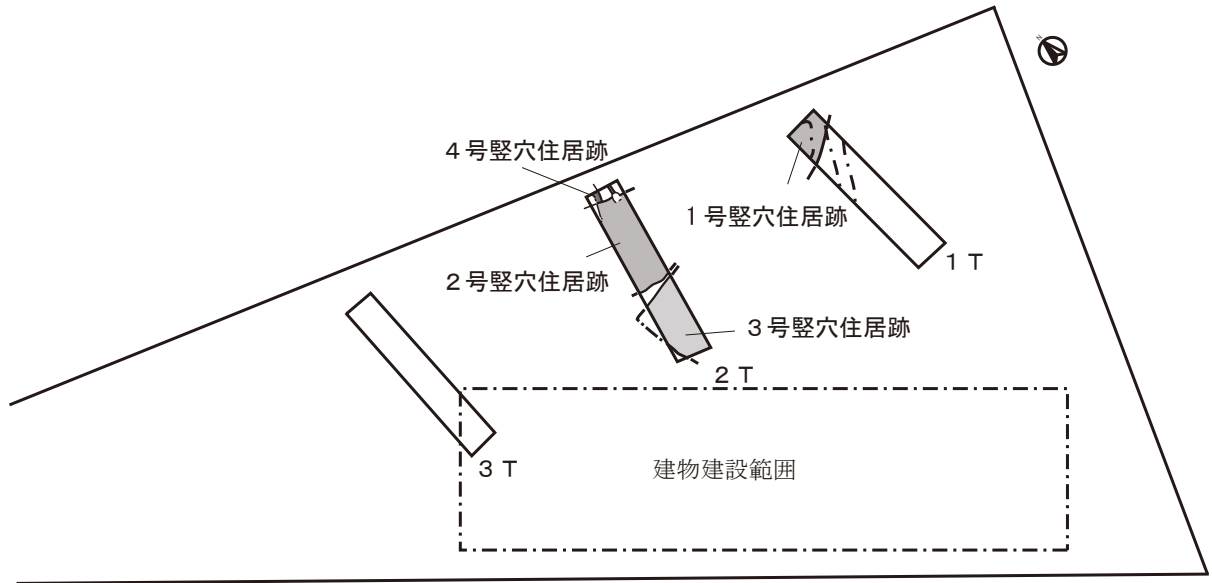


図19 桜井C遺跡5次調査遺構配置図

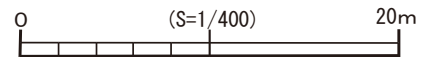


写真 35 調査着手前



写真 36 人力掘削状況



写真 37 1 T 調査状況



写真 38 1 T 土層断面



写真 39 1 T 1号竪穴住居跡



写真 40 2 T 3号竪穴住居跡



写真 41 2 T 3号竪穴住居跡



写真 42 2 T 3・4号竪穴住居跡



写真 43 3 T 調査状況



写真 44 3 T 土層断面

第7項 八幡林遺跡 (19次調査)

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 南相馬市鹿島区寺内字八幡林地内
3. 調査期間 平成30年5月15日～6月2日
4. 調査対象面積 358㎡
5. 調査面積 100㎡
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 今回、実施した発掘調査は個人住宅建設に伴うものである。調査着手以前の現地確認では、住宅建設予定地内の広い範囲に多くの土器の散布が認められたことから、トレンチを用いた試掘調査は行わずに、宅地建設により掘削を受ける範囲全面を調査対象として、記録保存のための発掘調査を開始した。

表土除去ならびに遺構検出面確認までの堆積土の除去は重機を用い、表土除去作業以降の諸作業は人力作業により行った。

記録作成は、デジタルカメラを用いて写真記録を作成した。平面図は株式会社CUBIC社製の遺構実測システムを用いて作図し、断面図は水準線を設定して作成した。

なお、調査では公共座標に基づく基準点の設定ができなかったことから、現地に任意座標を設定して、記録の作成を行っている。

表土を除去して遺構検出作業を行った結果、調査区の中央と北辺の2箇所で竪穴住居跡を確認し、調査区南辺付近で石組された性格不明遺構1基を検出した。

遺構検出面は表土上面から約40cmの深さの、黄褐色ソフトロームからなる基盤層の上面である。基盤層を確認するまでの層位はL Iが現表土で暗褐色土が約20cmの厚さであることを確認した。L IIは畑地耕作土で、約20cmの厚さで堆積した黒褐色土に黄褐色ロームブロックを不規則に含む層である。

【1号竪穴住居跡】 1号竪穴住居跡は調査区中央に位置する竪穴住居跡であり、竪穴住居跡の全体を確認することができた。

調査の結果、1号竪穴住居跡は東西6.3m、南北5.95mのやや東西方向に長い方形を有する。遺構検出面から竪穴住居跡底面までの深さは約30cmを計測し、竪穴住居跡内の堆積土は最終的に5層に細分された。土層観察では、1号竪穴住居跡は新旧2時期が存在して

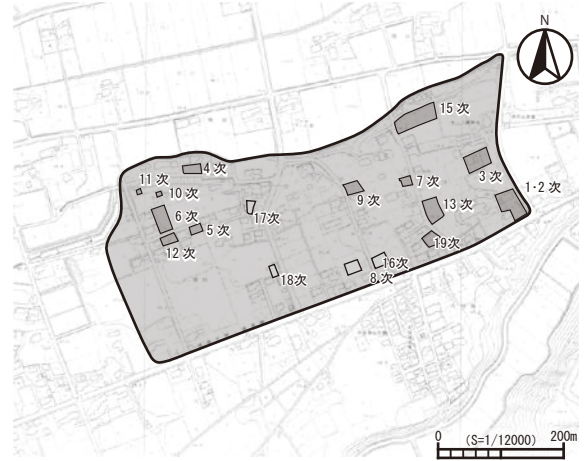


図20 八幡林遺跡位置図

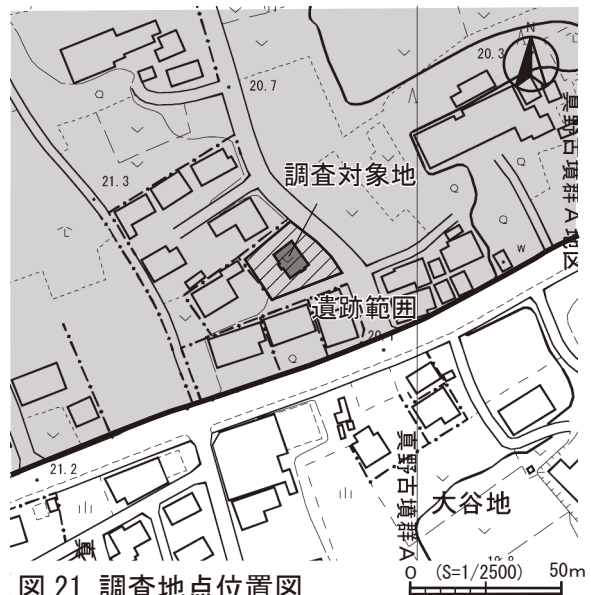


図21 調査地点位置図

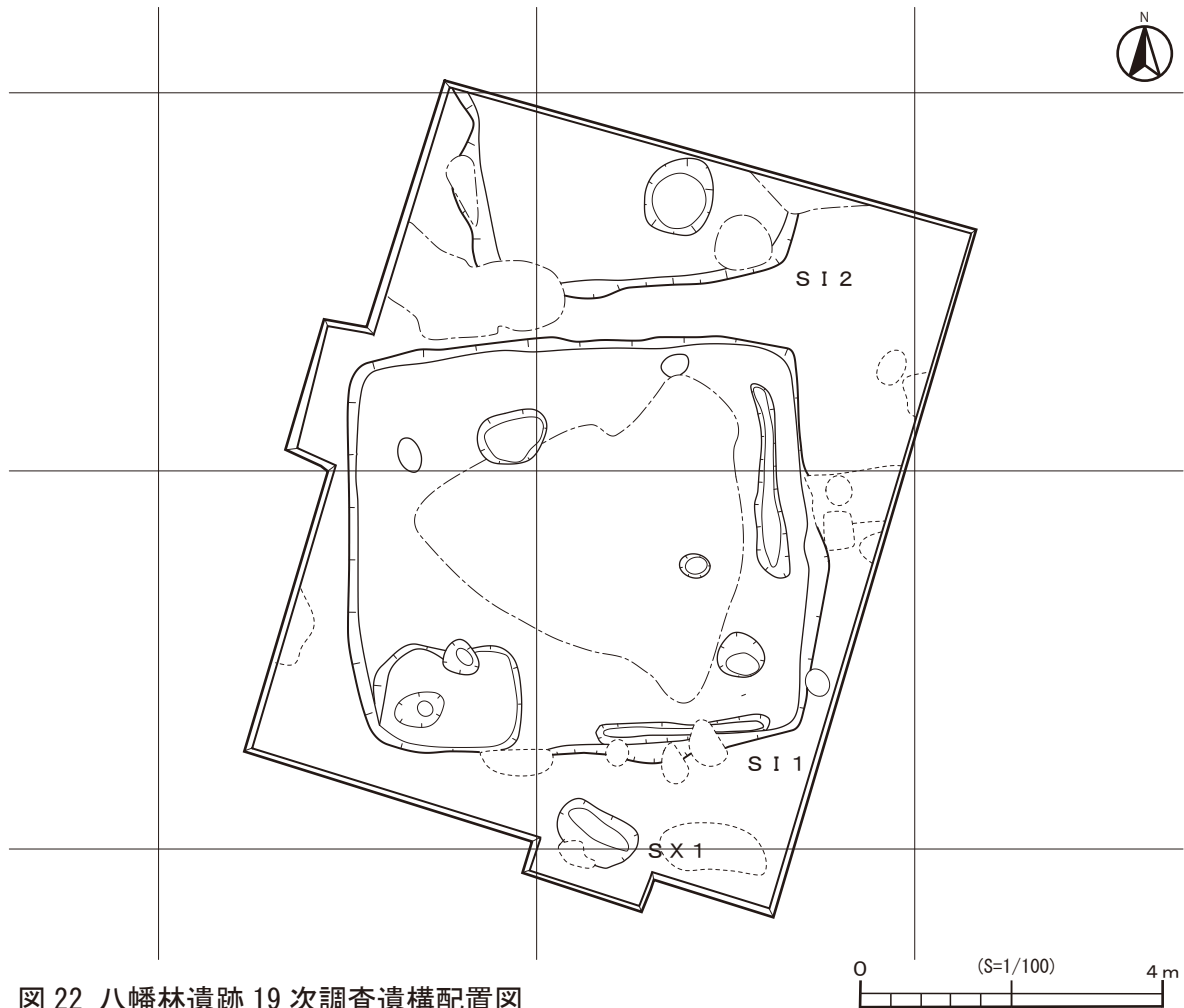


図 22 八幡林遺跡 19 次調査遺構配置図

いることが判明している。01～3は新しい時期の竪穴住居跡が廃絶した後の自然堆積土で、04は新しい時期の竪穴住居跡の貼床面である。05は壁溝の堆積土で新しい時期の貼床を除去して検出されたことから、古い時期の竪穴住居跡に伴うものと考えられる。

新しい時期の貼床面では、竪穴住居跡の中央から東側付近にかけた範囲が硬化している状況が観察されており、この貼床の硬化面は踏み締まりによるものと推測される。

1号竪穴住居跡の北辺付近では、浅い掘方に被熱による赤色硬化した炉跡が確認されている。炉跡の断面は浅い皿状を呈し東西約1m、南北約60cmを計測する。炉跡内の堆積土は2層に細分され、01は被熱した炉床面、02は炉跡の施設土である。

新しい時期の貼床面ならびに古い時期の床面の精査では、竪穴住居跡の支柱穴と思われる柱穴を確認することはできなかった。

図24・25には1号竪穴住居跡のうち、新しい時期の堆積土及び床面から出土した土器を図示した。古い時期の竪穴住居跡からは遺物は出土していない。出土した土器には須恵器等は含まれず、土師器の甕・壺・高杯・器台・直口壺(埴を含む)・小型丸底壺・甑・手捏土器が確認される。

このうち図化に至った資料は25点で、以下図示した資料の概要について述べる。

図24- 1～7には、土師器の甕を図示した。1は、底面の一部が剥離しているものの、口縁部から底部までのほとんどが残存している資料である。口径17.9cm、器高22.2、体部最大径22.9cmの法量を有する。底面は剥離のため定かではないが、おそらくは平底と思われる。体部はやや横長な球形を呈し、口縁部は強く外反しておさまる。外面の口縁部には明瞭なヨコナデが施され、体部上段には密なハケメで調整が行われて、体部中段にはハケメ後に横位のミガキが施され、ハケメが消され平滑となっている。体部下段には粗いハケメが所々に観察される。内面は口縁部は外面と同様に明瞭なヨコナデで調整が行われているが、体部から底部にかけての範囲はナデで調整されている。

2は底部付近を失った甕である。口径16cm、残存高20cmを計測する。底部は失っており形状は不明であるが、体部はほぼ球形を呈し、口縁部は外方に向かって強く外反して口縁端部に達する。口縁部の内外面には明瞭なヨコナデが施されている。体部外面の上半には緻密なハケメが施され、体部下半には砂粒の移動による線状痕が観察されることから、ヘラケズリにより整えられているものと思われる。体部内面には明瞭なヘラナデによる調整が加えられている。

3は底部を欠く甕である。口径21cm、残存高22.3cmを計測する。口縁部の内外面には明瞭なヨコナデが施され、体部外面には緻密なハケメによる調整が加えられている。体部の内面には頸部下端付近と体部下半にはヘラナデが施されるており、体部上半には横位のヘラケズリが施されている。なお外面の下半の広い範囲には2次的な被熱による火ハネにより器面の調整は失われている。

4は体部下半を欠いた甕である。口径14cm、残存高10cmを計測する。口縁部の外面はヨコナデによる調整が施され、体部には粗いハケメが見られる。内面には口縁部に粗いハケメが重なり合うように施され、体部はユビナデにより整えられている。

5 a・5 bは直接的な接合関係にはないが、同一個体と判断して間違いのない資料である。いずれも口径は15cmを計測し、体部上半から下部が失われており、残存高は5cmを計測する。外面の調整は口縁部付近にはヨコナデが見られ、頸部から体部にかけての範囲には不明瞭ながらハケメとケズリが観察される。おそらくはハケメ後にケズリが施されたものと思われる。内面の調整を見ると体部はナデによる調整が施され、口縁部には粗いハケメが施される部分とヨコナデが施される部分がある。おそらくはヨコナデ後にハケメが施されたものと考えている。

6は体部下半から底部までを欠いた資料である。口径17.7cm、残存高18.9cmを計測する。体部はやや縦長の形状を示し、口縁部は直線的に外傾して口縁端部に達する。外面の調整を見ると口縁部には明瞭なヨコナデが施され、体部には不明瞭ながらも砂粒が移動した線状痕が観察されることからケズリによる調整と判断した。内面には頸部付近にはユビナデ、体部には全面的にヘラナデが施されている。

7は口縁部から体部上半を失っている資料である。底径6cm、残存高14.6が残存する。底部は中央が微妙に凹んでいるが、おおむね平底と判断して問題ない。体部は球形に近い形状で上方に向かって立ち上がる。外面には細かなハケメが施され、内面にもハケメが観

察される。

図25には甕以外の土器を示した。8は壺と判断した資料である。口径11.5cm、器高18cmを計測し、中央が微妙に凹む平底を呈し、球形に近い形状の体部が上方に向かって立ち上がり頸部に達する。頸部から立ち上がる口縁部は短く直線的に外傾して収まる。口縁部から体部上半にかけての範囲は摩滅により調整の痕跡を観察することはできなかったものの、底部付近にはミガキとケズリが観察される。内面には縦位のヘラナデが施されている。9・10は口縁部を中心とした破片資料である。いずれも口縁端部を折り返した形状を示す。9は内外面ともに緻密なハケメによる調整が加えられ、口径13cm、残存高5.8cmを測る。10は口径15cm、残存高4.2cmを計測する資料で、外面の頸部には縦位のハケメを施し、口縁部を折り返したのちに横位のミガキを丁寧に施している。内面は全体的に横位のミガキが施されおり、非常に平滑に仕上げられている。

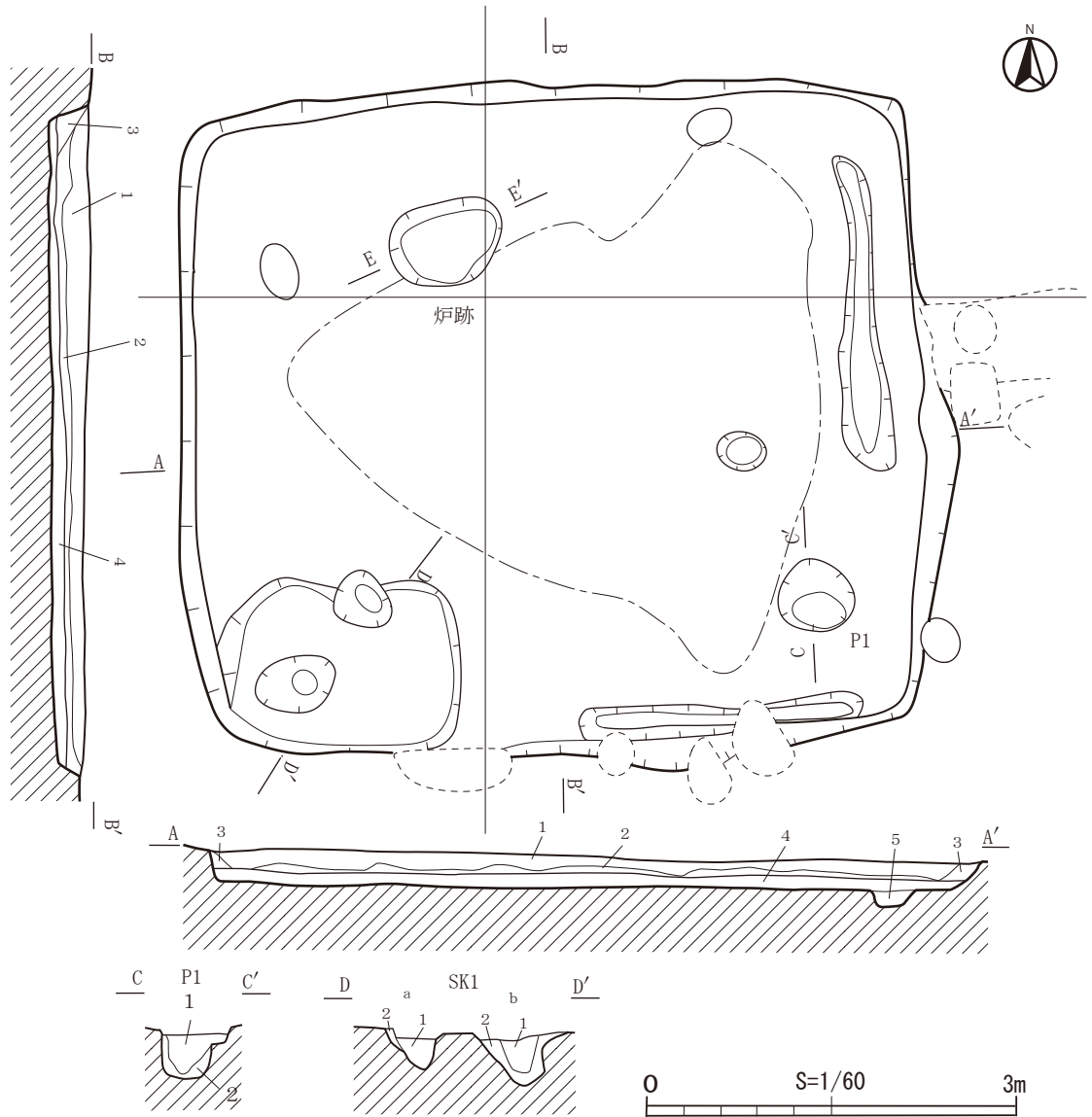
11は壺と判断した資料であるが、大型の直口壺の可能性もある資料である。口縁部付近のみを残す資料であるため、器形の詳細は不明である。頸部からわずかに残る体部は大きく広がる傾向を示し、口縁部は微妙に外反して直線的に立ち上がる。口縁部の外面にはヨコナデ後に縦位のミガキが施され、内面はヨコナデによる調整で終了している。法量は口径14.5cm、残存高6.8cmを計測する。12は甕の底部資料である。底部以外は失っており詳細は不明であるが、底面の中央がくぼむ形状を示す輪台技法が用いられていることから図示した。底径は7.8cmを計測する。

13は埴である。外面の前面と大きく開いた口縁部の内面に非常に緻密なミガキと赤彩を加えた、いわゆる精製土器と見て良い。口径14.4cm、器高11.7cm、体部の最大径は12.9cmを計測する。底部は中央がくぼむ形状を示し、体部の最大径は体部中央にあり、口縁部は弱く内湾しながら直線的に大きく外傾して収まる。内面には底部付近にはヘラナデ、頸部下端には粘土継痕を残す。

14は大型の直口壺の上半を中心とした資料である。全体的に焼きがやや甘い点が特徴的である。体部は肩が張らない卵形を呈し、頸部には断面が三角形の弱い突帯が巡る。口縁部は長く、直線的に外形して収まる。調整は不明瞭ながらも外面には突帯以外はミガキ、口縁端部にはヨコナデが見られ、内面には口縁部全体にヨコナデ、体部にはヘラナデが観察される。残存する法量は口径15.2cm、残存高5.3cmである。

15は小型の鉢である。底部を失っており詳細な形状は不明であるが、半球形の体部に弱く外傾する口縁部が見られる。外面には部分的にハケメが残り、口縁部にはヨコナデが施されている。内面は底部付近からユビナデが施され、頸部近くにはケズリ、口縁部はヨコナデによって整えられている。口径10.2cm、残存高5.3cmである。

16は小型丸底鉢である。非常に小さな体部に大きく開く口縁部が特徴的な資料である。口径9.5cm、器高5.7cm、底径2cmを計測する。体部はやや潰れた形状の半球形を呈し、頸部から弱く内湾した大きな口縁部が外傾して立ち上がる。体部の外面にはヘラケズリ、口縁部にはハケメ後ヨコナデ、内面に施された調整は体部にはヘラナデ、口縁部はヨコナデが加えられている。17・18・19は直口壺もしくは埴と思われる資料を図示した。17は口縁



A-A'・B-B' 土層注記

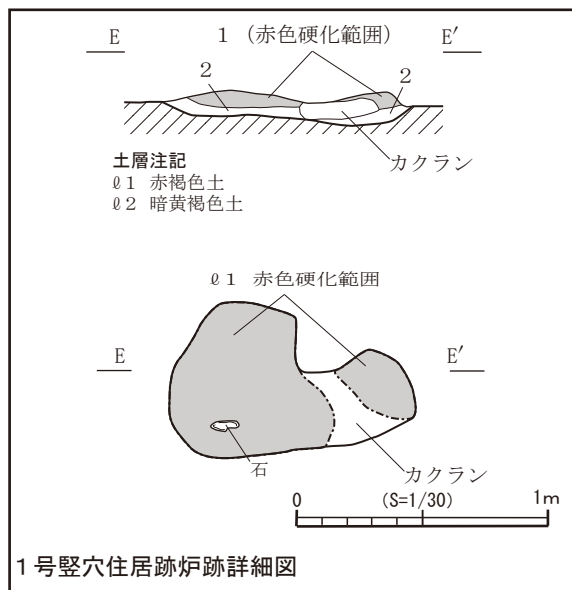
- 01 暗褐色土 ローム粒・炭化物を含む。
- 02 暗黄褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- 03 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 04 暗黄褐色土 褐色土ブロックを含む。

C-C' 土層注記

- 01 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 02 暗褐色土 ロームブロックを含む。

D-D'

- a
- 01 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 02 黄褐色土 褐色土粒を含む。
- b
- 01 褐色土 ローム粒を含む。
- 02 暗黄褐色土 ローム粒を含む。



1号竪穴住居跡炉跡詳細図

図23 1号竪穴住居跡平面図・断面図

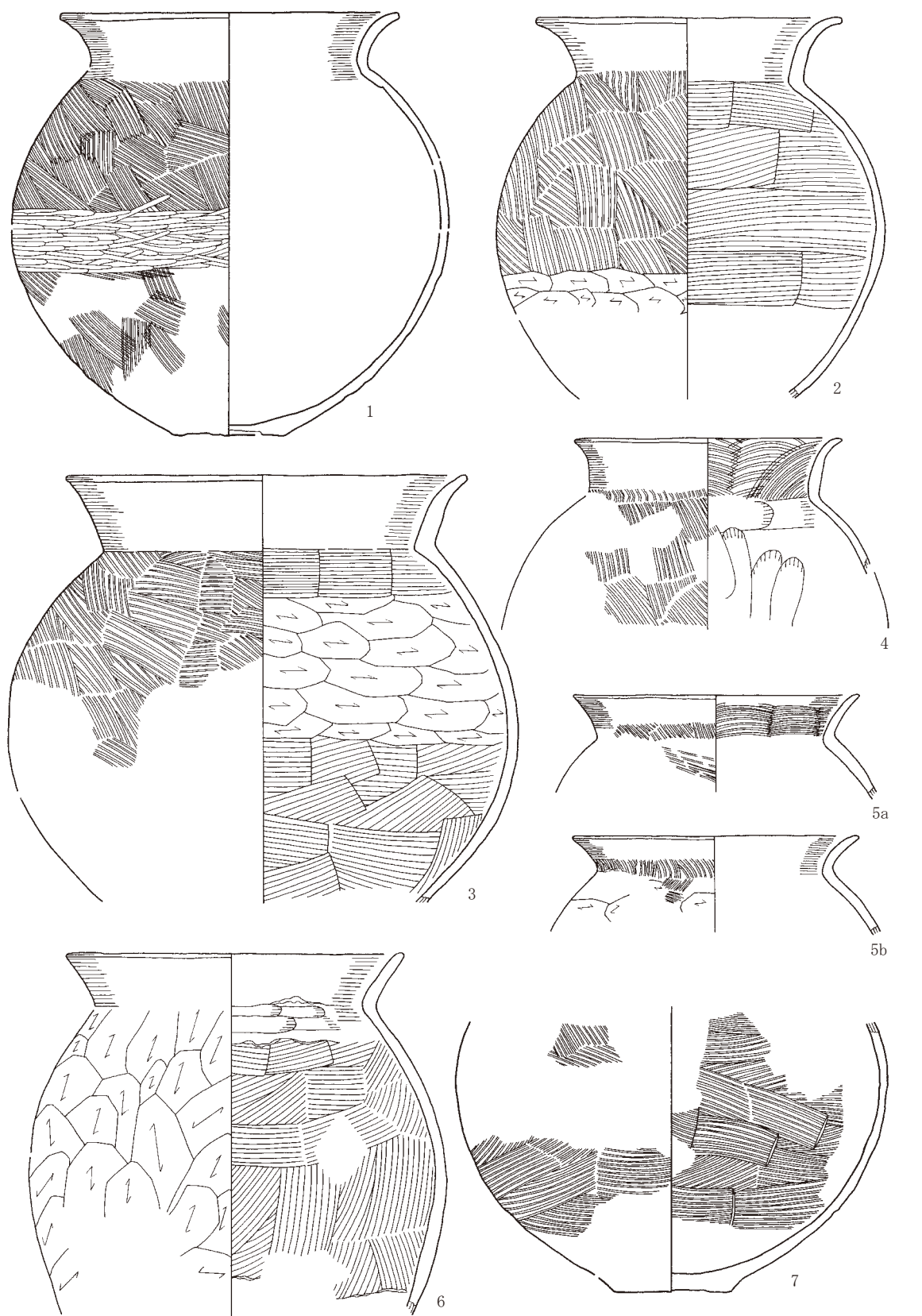


图24 1号竖穴住居跡出土遺物（1）

0 (1/3) 10cm

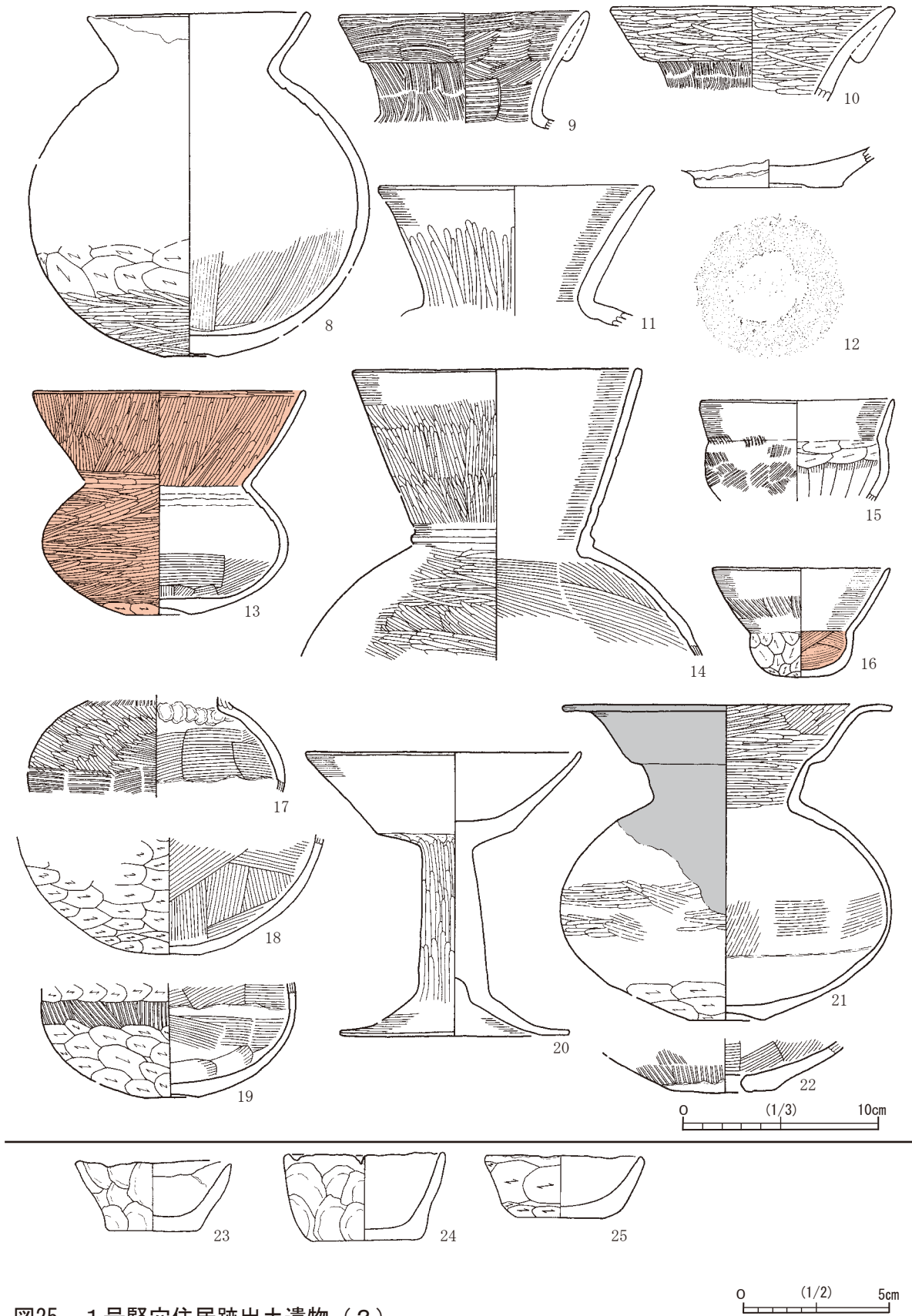


図25 1号竪穴住居跡出土遺物(2)

部と体部下半から底部を失った資料で、18・19は体部上半から口縁部までの範囲を欠いた資料である。

17は体部上半の資料で、口縁部と体部下半を失っているため、形状の詳細は不明であるが、球形もしくはやや上下に潰れた算盤玉形を呈する。外面にはハケメと丁寧なミガキが観察され、内面には頸部には口縁部を接合した際の指頭押圧痕が残り、体部には横位のヘラナデが見られる。

18は口縁部から体部上半を失った資料である。底部はやくぼんだ形状を示した直径の小さなもので、球形に近い形状で口縁部に向かって立ち上がるものと思われる。体部外面には不明瞭であるがヘラケズリが施され、内面にはヘラナデが施されていると判断した。

19も口縁部から体部上半までを欠いている資料である。18と同様に底部は微妙に窪んだ形状を示す直径の小さなもので、やや上下に潰れたような器形で上方に向かって立ち上がっている。外面の調整にはハケメ後にヘラケズリが施され、内面調整は底面付近にはユビナデ、体部付近にはヘラナデが施されている。

20は高杯である。杯部から脚部までの全体が残存し、杯部の口径14.6cm、器高15cmを計測する。杯部は直線的に上方に向かってハの字に開く形態を示し、杯部底部には明瞭な稜線が形成されている。脚部は柱実棒状脚で、脚部上方から下方に向かって大きな変化を見せずに、微妙にハの字に広がって裾部に達する。裾部はあまり広がらない。器面の劣化が著しく調整の判別は困難であるが、口縁部付近にはヨコナデ、杯部にはミガキ、脚部周縁にはヨコナデが観察される。

21は二重口縁壺である。口径17.4cm、器高16.1cm、底径4cmを計測する。底部は中央がくぼんだ形状を示し、体部は最大径が体部中央に位置する。体部高の割に体部直径の割合が大きく、全体的には算盤玉状の器形を有する。体部上端からは頸部が約2cmほど立ち上がり、その地点から一端水平方向へ屈曲した後、緩やかに外反する口縁部がのび、口唇部

挿図No.	種別	器種	部位	層位	外面調整	内面調整	図版No.
図24-1	土師器	甕	口縁部～底部	床直	口：ヨコナデ・体：ハケメ ミガキ	口：ヨコナデ・体：ナデ	写真63-1
図24-2	土師器	甕	口縁部～体部下半	02	口：ヨコナデ・体：ハケメ ケズリ	口：ヨコナデ・体：ヘラナデ	写真63-2
図24-3	土師器	甕	口縁部～体部下半	02	口：ヨコナデ・体：ハケメ	口：ヨコナデ・体：ヘラナデ ケズリ	写真63-3
図24-4	土師器	甕	口縁部から体部上半	01	口：ヨコナデ・体：ハケメ	口：ヨコナデ・体：ユビナデ	写真63-4
図24-5a	土師器	甕	口縁部から体部上半	01	口：ヨコナデ・体：ハケメ	口：ハケメ・体：ナデ	写真63-5
図24-5b	土師器	甕	口縁部から体部上半	01	口：ヨコナデ・体：ハケメ	口：ヨコナデ・体：ナデ	写真63-6
図24-6	土師器	甕	口縁部から体部下半	02	口：ヨコナデ・体：ケズリ	口：ヨコナデ・体：ユビナデ ヘラナデ	写真63-7
図24-7	土師器	甕	底部から体部中段	02	体：ハケメ	体：ハケメ	写真64-8
図25-8	土師器	壺	口縁部から底部	床直	口：マメツ・体：ケズリ ミガキ	口：不明 体：ヘラナデ	写真64-9
図25-9	土師器	壺	口縁部から頸部	02	口：ハケメ・頸：ハケメ	口：ハケメ 頸：ハケメ	写真64-10
図25-10	土師器	壺	口縁部から頸部	02	口：ミガキ・頸：ハケメ	口：ミガキ 頸：ミガキ	写真64-11
図25-11	土師器	壺	口縁部	L1	口：ヨコナデ ミガキ	口：ヨコナデ	写真64-12
図25-12	土師器	甕	底部	02	—	—	写真64-13
図25-13	土師器	直口壺	口縁部から底部	02	口：ミガキ・体：ミガキ 赤彩	口：ミガキ 底：ヘラナデ	写真64-14
図25-14	土師器	直口壺	口縁部から体部上半	床直	口：ミガキ・体：ミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	写真64-15
図25-15	土師器	鉢	口縁部から体部下半	01	口：ヨコナデ・体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：ケズリ ユビナデ	写真64-16
図25-16	土師器	鉢	口縁部から底部	01	口：ハケメ・体：ケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	写真64-17
図25-17	土師器	壺	体部上半	02	体：ミガキ ハケメ	体：ヘラナデ 指頭押圧痕	写真64-18
図25-18	土師器	壺	底部から体部中段	02	体：ケズリ・底：ケズリ	体：ヘラナデ	写真64-19
図25-19	土師器	壺	底部から体部中段	01	底：ヘラケズリ・体：ハケメ	底：ユビナデ 体：ヘラナデ	写真64-20
図25-20	土師器	高杯	杯部から脚部	L1	杯：ヨコナデ・脚：ミガキ	裾：ヨコナデ	写真64-21
図25-21	土師器	壺	口縁部から底部	02	口：不明・体ミガキカ	口：ミガキ・体：ヘラナデカ	写真64-22
図25-22	土師器	甕	底部	床直	底：ハケメ	底：ヘラナデ	写真64-23
図25-23	土師器	手捏土器	口縁部から底部	01	体：指頭押圧痕	体：ナデ	写真64-24
図25-24	土師器	手捏土器	口縁部から底部	01	体：指頭押圧痕	体：ナデ	写真64-25
図25-25	土師器	手捏土器	口縁部から底部	01	体：ケズリ	体：ナデ	写真64-26

表3 1号竪穴住居跡出土遺物観察表

はほぼ水平となっておさまる。

本資料は器面の遺存状況が不良なため、調整の詳細を観察することはできないが、底部外面周辺はケズリ、体部外面はハケメであろうか。内面は体部周辺にはハケメ、口縁部から頸部にかけての範囲には緻密なミガキが施されている。なお、本資料では底部から約3.5cmの地点で、焼成の際に酸化還元した胎土が明らかに異なった発色をしており、おそらくはこの発色の異なる部分で分割して製作されたものと思われる。また、図にアミで示した範囲は2次的な被熱により灰褐色に変色するとともに、須恵器のように硬質に変化している点が特徴的である。

22は甗である。破片資料のため器形の全体像は不明であるが、大きく上方に向かって開く体部と、底部の中央には直径2cmの孔が1カ所に穿たれている。23から25は手捏土器である。いずれも平底の底部から、直線的に外傾する体部がのびて口縁端部に達している。内面の調整はいずれもナデが施され、外面調整では23と24は指頭押圧痕を残すが、25は細かなケズリが施されている。

【2号竪穴住居跡】 2号竪穴住居跡は、1号竪穴住居跡の北側約60cmの地点で確認した竪穴住居跡である。2号竪穴住居跡の北半の大部分は調査区外に広がっているため、竪穴住居跡全体の規模・構造は不明である。竪穴住居跡の南側はカクランを受けている部分もあるが、東西4.3m、南北2.5m以上を計測し、1号竪穴住居跡よりも一回り小規模な竪穴住居跡と考えられる。

竪穴住居跡内の堆積土は最終的に4層に細分したが、いずれの層も竪穴住居跡外辺から中央に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積により埋没したものと考えられる。

2号竪穴住居跡の調査では土師器片が出土したが、いずれの土器片も碎片であることから、図示できるものはなく土器群の詳細は不明であるが、おおむね古墳時代前期に位置づけられる土器群と考えられる。

【1号性格不明遺構】 1号性格不明遺構としたものは調査区の南辺で検出した石組遺構である。基本土層LⅡを除去した時点で石組が露出した。

検出した時点の石組は、長軸を東西に向けた掘方内の南辺と西辺に川原石を立てた状態で据え、その上部に扁平で不整形な川原石が散在するような状況であった。石組の周囲には、掘方と思われるプランが確認でき、掘方は東西約1m南北約60cmを計測した。

石組の北辺と東辺にあたる位置には、縦に据えられた石組は見当たらないことから、後世の耕作により失われたものと考えられる。石組の上部に散在した石材を除去し堆積状況を観察すると、石組内部の土層は黒灰褐色土のしまりの弱い土が堆積し、石組の外側にはしまりの強い暗灰褐色土が堆積していた。石組外側の堆積土は人為的な裏込めの可能性が高いと判断している。検出面から掘方底面までの深さは16cmである。

8. 調査所見

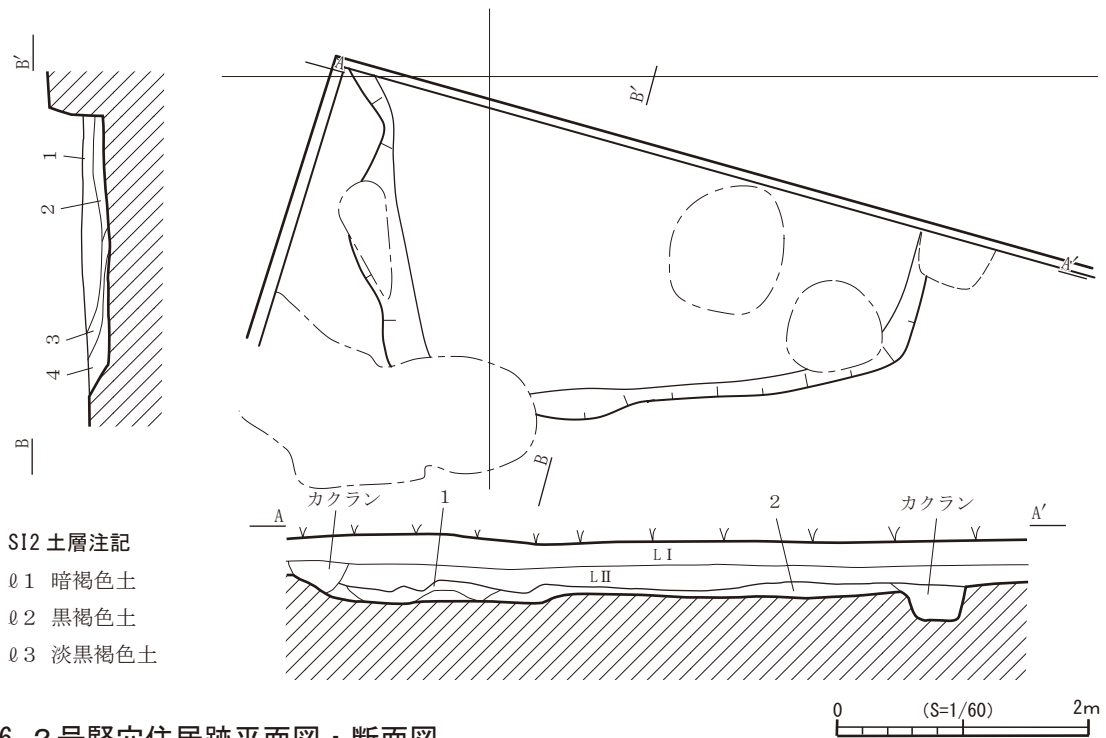


図 26 2号竪穴住居跡平面図・断面図

八幡林遺跡19次調査として実施した今回の発掘調査は、個人宅地建設に伴って実施した。発掘調査面積は約100㎡と狭小な調査区であったものの、調査区内では竪穴住居跡全体が検出できたものが1軒、竪穴住居跡の一部が確認されたものが1軒、石組遺構1基が確認・調査された。八幡林遺跡では、これまで竪穴住居跡や古墳が相次いで確認されており、遺構番号の整理がなされていない。

今後は調査西暦と遺構番号を組み合わせることで遺構、番号を整理していくこととする。従って、今回調査された竪穴住居跡はS I 1801とS I 1802の2軒とS K1801と表記する。

S I 1801の堆積状況を整理すると、S I 1801内の堆積土は最終的に5層に細分された。01は最も上層に位置する自然堆積で02・03は竪穴住居跡廃絶後間もなくの初期堆積土である。04は竪穴住居跡機能時の貼床面、05は貼床除去後に確認された古い時期の竪穴住居跡の壁周溝堆積土である。遺物が出土した層位は01と02、貼床の04直上の3地点である。

調査地点は最近まで畑地として利用されており、現地表面から約40cmの深さまでは畑地耕作を受けており当時の状況は失われていると考えて良い。このような状況から竪穴住居跡の上部の大部分はすでに失われており、検出された竪穴住居跡内に堆積した土層の大部分は、竪穴住居跡が廃絶した後、大きな時間を空けることなく竪穴住居跡内に流入した自然堆積土と考えられ、これらの土層に包含された土器群は極めて同時性の高い土器群と考えられる。

以下、出土した土器群については極めて近い時間幅の中で用いられたものと位置づけて検討を加えていきたい。

【遺物について】

今回の19次調査では、S I 1801からまとまった量の土師器が出土したが、S I 1802からはほとんど遺物は出土しなかった。従って、ここではS I 1801から出土した土師器群について検討する。S I 1801からは $\varnothing 1 \cdot \varnothing 2$ ・貼床直上から土器が出土した。出土した土器の器種を大別すると、図示した甕・壺・直口壺・小型丸底鉢・高杯・二重口縁壺・手捏土器に加えて、器台の出土も認められる。これらの土器群は精製品と粗製品もしくは日常品に大別が可能である。図25-13のいわゆる坩と呼ばれる直口壺は外面の前面と口縁部の内面に非常に緻密なミガキを施し、また赤彩を加える点で他の土器群とは明らかに異なった印象を受ける資料である。また図25-16は決して精製品とは言い難い資料であるが、内面に部分的に赤彩が残っており、一般的な土器群とは区別して扱うべきであろう。その他では図25-21は二重口縁形を呈する壺型土器で、一般的な日常品として扱うことは難しい。

このように見ると、一般的な煮沸具である甕が最も出土量が多く、口縁部が「くの字」に外反し、外面にはハケメが多様される点で、非常に斉性の高い土器群と評価される。壺は折り返し口縁を持つもののほかに、直口壺の割合が多い点の特徴

の一つにあげられる。また、高杯と器台の出土割合も少ない点にも注目しておく必要がある。高杯は柱実棒状脚を有するものの、杯部の底面と口縁部の境には明瞭な稜線が形成されており、比較的新しい要素が見られる。図示できなかった器台は、器面に丁寧なミガキを施し、外面には赤彩を加えており、非常に精製されている。おそらくは、図25-13や図25-16等とセットを有する可能性が高い。これらの器台はハの字に広がる裾部に円窓を空け、受部の中央には貫通孔が穿たれていることから、極端に古い要素は見られない。甑は破片資料のため詳細は不明ながらも、直径2cm前後の単孔の甑が採用されている。

このような出土土器の全体的な特徴を概観すると、出土した土器群は東北地方南部における古墳時代前期に位置づけられる塩釜式土器の範疇に含まれるものと考えて間違いのない。特に、土器の器種組成には、甕・壺・甑・器台・高杯・小型丸底鉢・小型鉢・直口壺、手捏土器等の古墳時代前期の基本的な器種組成を有していることに加えて、高杯は柱実棒状脚に明瞭な稜線を形成する杯部をのせることや、器台の出土割合が少ないことなど、塩

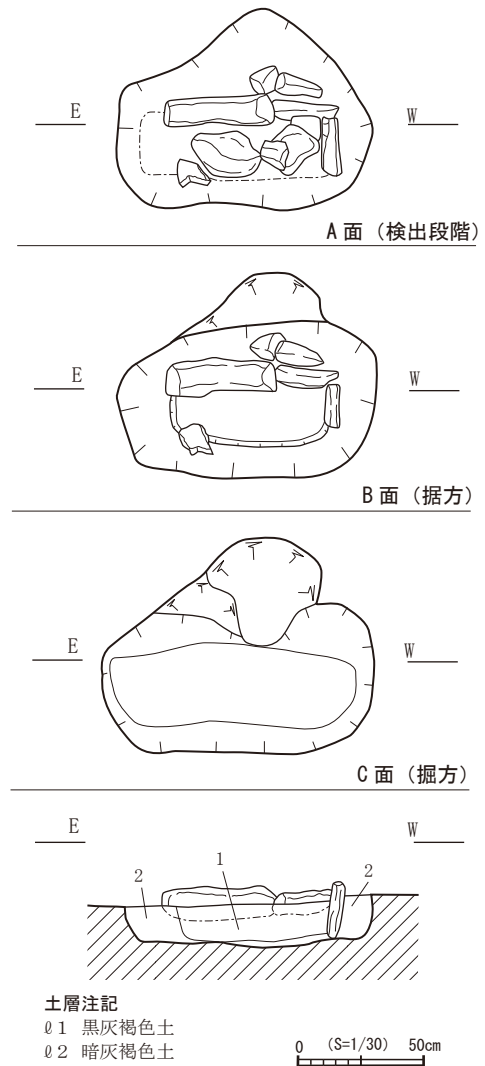


図 27 SX1 平面図・断面図

釜式土器の中でも古い様相は認められず、古く見ても辻編年のⅢ－3期とし、その中心はⅢ－4期と見るのが妥当であろう。

【遺構について】

今回の発掘調査で記録が作成されたS I 1801は住居内から出土した土器群から塩釜式土器の末期頃の年代に位置づけられた。堅穴住居跡自体の構造を見ると、堅穴住居跡は南北5.95m×東西6.3mを計測する、やや東西に長い主軸を持つ長方形の堅穴住居跡であることが確認された。堅穴住居跡は基盤層となる黄色ロームを掘り込む形で構築されており、床面には04とした明瞭な貼床を伴い、貼床上面は非常に硬化した状況であった。堅穴住居跡の床面となる貼床面及び貼床を除去して堅穴住居跡の掘方を確認した時点でも、本堅穴住居跡の支柱穴と見られる柱穴は確認することはできなかった。堅穴住居跡の南西角には不整形な土坑が位置し、貯蔵穴の可能性も考慮して調査を進めたが、この土坑の性格を把握する知見は得られなかった。住居跡の周囲にも本住居跡に付帯する明確な施設は存在せず、S I 1801自体の具体的な構造を把握することはできなかった。

ただし、床面の中央からやや北西部には、赤色硬化した土層が分布しており、おそらくはこの範囲が炉跡と考えた。また住居跡の東辺ほぼ中央付近の床面には、意図的に細かく破碎された土器の小片が多量に出土し(図24-7)、何らかの祭祀行為が行われた可能性が極めて高い。

いずれにしても、S I 1801は古墳時代前期における典型的で斉一性の高い住居構造は保持していないことから、古墳時代前期の伝統的な住居構造が衰退に向かっている時期の所産かもしれない。一方で、S I 1801は住居の4辺にはカマドを構築した痕跡は認められず、この点で南小泉式前半以前の年代であることは確実で、良好な塩釜式の土器資料を伴うことから、今後この時期の堅穴住居跡の資料の増加と、出土する土器を加えた比較・検討が必要と考えている。

最後に、調査区南側で検出した石組遺構(S K 1801)について述べておく。S K 1801は基盤層である黄色ロームを長軸1.4×短軸50cmの長方形に掘り込んで構築されている状況を確認した。この時点で基盤層から複数の川原石が検出されていることから、本来の構築面は表土除去作業で除去してしまった可能性もある。確認できた時点では、地山の掘方(図27-C面)の外周に板状の川原石をL字形に配置して据えている。基盤層と川原石の間には裏込め土と思われる人為的な埋土が充填され川原石を固定している。図27-Bと断面図を見ると短軸の西側の川原石は掘方底面に接するように配置されているが、側辺を構成する2個の川原石は掘方底面には達せず、裏込土の上部に据え置かれた状態で固定されている。これらの川原石による区画の上部には方形や不整形の拳大の川原石が散在している。この石組の内部には自然堆積土と思われる黒灰褐色土が堆積し、明らかに周囲の土層とは異なった堆積状況を示している。石組遺構については出土遺物がなく、その機能・性格・年代等の情報を得ることができなかったため、性格不明遺構と位置づけざるを得なかった。

しかし、敢えて予察を述べれば、今回の19次調査地点を含む八幡林遺跡は、古墳時代後期の真野古墳群A地区と重複する複合遺跡である。真野古墳群A地区ではこれまでに数十

基を超える数の古墳が確認されており、古墳の存在が知られていない地点でも平成29年度の13次調査（S X1601）で周溝の一部が確認されるといったように、これまでに把握されていない古墳が存在していたことは間違いない。古墳時代後期の群集墳は、古墳時代前期や中期のような首長墓から、氏族集団の家族墓的な位置づけとなったと理解されている。その中でも氏族集団の長たる人物は小規模ながらも、伝統的な前方後円墳に埋葬されたものと考えられる。真野古墳群A地区においても、A地区20号墳・24号墳は主軸長約30m以下の小規模な前方後円墳であったことが伝えられており、特に20号墳は横穴式石室を模した礫槨、24号墳は片袖式の川原石を用いた横穴式石室であったと報告されている。なお筆者は本埋葬施設は横穴式木芯粘土室の可能性が高いと考えているが、いずれにしても他の小規模な円墳とは一線を画するような埋葬施設と、20号墳では金銅製双魚佩金具を副葬するというように、真野古墳群に築かれた2基の前方後円墳は明らかに首長墓としての格式を備えている。

一方で、その他の小規模な円墳群では箱式石棺や、木棺直葬、組合式木棺、木炭槨などが確認されており、首長墓的な埋葬施設や副葬品を持つものはない。このように小規模な円墳は、氏族集団の一般層の墓域としての利用がなされていたと考えられ、今回確認した性格不明の石組遺構のような小規模で簡易な施設は、氏族集団内において幼くしてなくなった乳児や幼児等が埋葬された可能性を考えておきたい。

【まとめ】

今回の発掘調査が行われたS I 1801の出土遺物は塩釜式土器のなかでも南小泉式土器に近い、辻編年Ⅲ-3～4期に位置づけられるものと考えた。これまでの八幡林遺跡の調査では、平成25年度に実施した7次調査で確認された1号竪穴住居跡（S I 1501とする）では、塩釜式土器の小型丸底鉢に供伴して、北関東を中心の展開する弥生時代終末期の十王台式土器の系統の特徴を有する土器片が出土しており、八幡林遺跡には古墳時代初頭の集落が展開していることが明らかとなっている。

このような状況を見てみると、八幡林遺跡では古墳時代前期初頭から末まで継続した集落が展開していた可能性が高くなったが、いずれの調査区も狭小で、調査区の分布もまばらであることから、現段階では集落全体の構造や変遷を明らかにすることは難しく、今後の調査の積み重ねが重要である。

また、今回のS I 1801では明確な住居に伴う付帯施設を確認することはできなかったことは、この時期の特徴のひとつであるのか、S I 1801に限られた状況であるのか、周辺の調査成果を踏まえて慎重に検討すべきことがらであると指摘して、調査のまとめとする。



写真 45 調査着手前



写真 46 重機掘削状況



写真 47 遺構検出状況全景



写真 48 1号竪穴住居跡検出状況



写真 49 2号竪穴住居跡検出状況



写真 50 1号性格不明遺構検出状況



写真 51 1号竪穴住居跡土層断面



写真 52 1号竪穴住居跡土層断面



写真 53 1・2号竪穴住居跡調査状況



写真 54 1号竪穴住居跡調査状況全景



写真 55 1号竪穴住居跡土器出土状況



写真 56 1・2号竪穴住居跡全景



写真57 1号竖穴住居跡完掘状況



写真58 2号竖穴住居跡完掘状況



写真59 1号性格不明遺構調査状況



写真60 1号性格不明遺構土層断面



写真61 1号性格不明項調査状況



写真62 1号性格不明遺構完掘状況

第7項 八幡林遺跡 (19次調査)

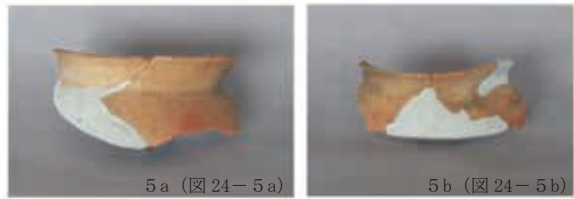


写真 63 出土遺物 (1)



写真 64 出土遺物 (2)

第8項 池ノ沢遺跡（2次調査）

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 南相馬市小高区神山字池ノ沢
3. 調査期間 平成30年6月19日～6月22日
4. 調査対象面積 9797.45m²
5. 調査面積 150m²
6. 調査担当主 査林 紘太郎
7. 調査成果 調査では、開発予定地内に調査区を5箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約40cm～60cmの深さで、黄褐色土の基盤層（遺構確認面）を確認した。遺構は、3Tから炭を生産したと考えられるSK1（木炭焼成土坑）1基を検出した。SK1は、長軸107cm、短軸7cmを測る隅丸長形状を呈する。深さは約20cmを測る。遺構内堆積土は、上層に浅黄橙色、下層に黒色の2層に分かれ、土坑の底部から壁面にかけて焼土が確認できる。

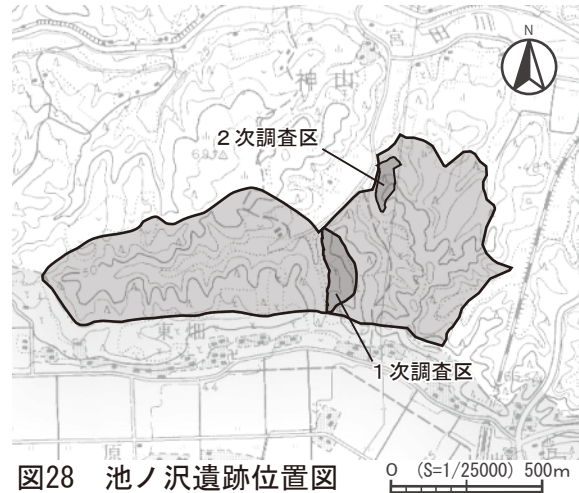


図28 池ノ沢遺跡位置図

無の確認を行った。調査の結果、現地表面

から約40cm～60cmの深さで、黄褐色土の基盤層（遺構確認面）を確認した。遺構は、3Tから炭を生産したと考えられるSK1（木炭焼成土坑）1基を検出した。SK1は、長軸107cm、短軸7cmを測る隅丸長形状を呈する。深さは約20cmを測る。遺構内堆積土は、上層に浅黄橙色、下層に黒色の2層に分かれ、土坑の底部から壁面にかけて焼土が確認できる。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において木炭焼成土坑が1基確認されたが、記録保存は完了しているため、改めて保存協議を行う必要はない。ただし、埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから立会による対応とする。

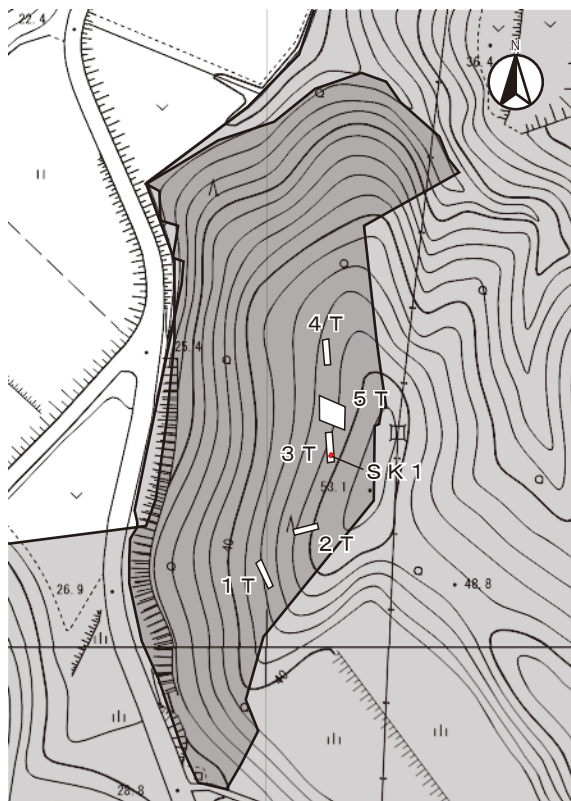


図29 調査区位置図



写真65 3T調査状況



写真66 3T SK1土層断面

第9項 大田和広畑遺跡（7次調査）

1. 調査原因 太陽光発電施設建設
2. 調査地点 南相馬市小高区大田和字広畑
3. 調査期間 平成30年6月21日
4. 調査対象面積 1,390㎡
5. 調査面積 10㎡
6. 調査担当 主査 林 紘太郎
7. 調査成果 調査では、開発予定地内に

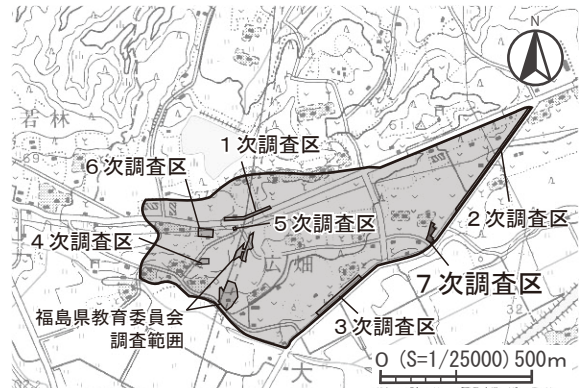


図30 大田和広畑遺跡位置図

調査区を3箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約50cm～70cmの深さで基盤層である黄褐色土層に到達した。過去に行われた3次調査にて、縄文時代の集落跡が確認されていることから集落跡の広がりが見込まれたが、調査区内から埋蔵文化財は確認されなかった。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は所在していないことが明らかとなったため、改めた保存協議の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから、慎重工事による対応とする。

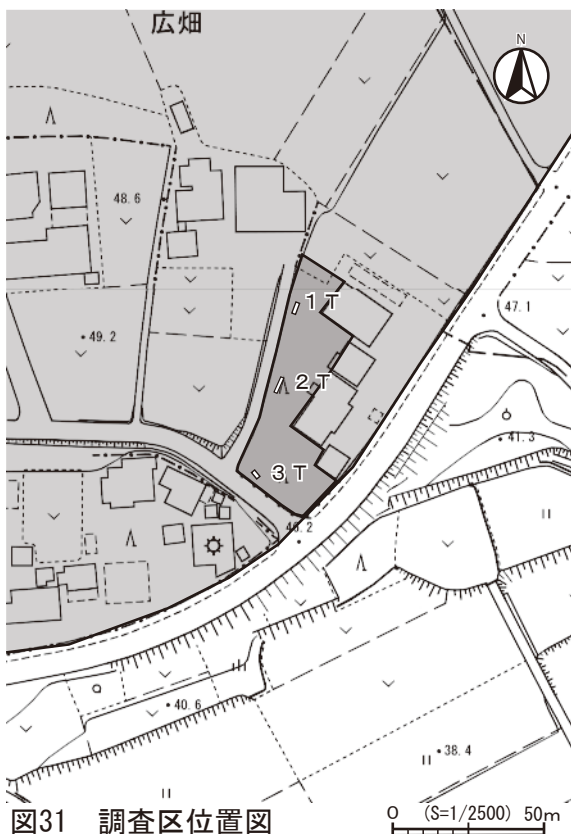


図31 調査区位置図



写真 67 1 T 調査状況



写真 68 2 T 調査状況

第10項 白幡前遺跡（1次調査）

1. 調査原因 太陽光発電施設建設
2. 調査地点 南相馬市小高区大井字上山畑
3. 調査期間 平成30年6月21日
4. 調査対象面積 478m²
5. 調査面積 4m²
6. 調査担当 主査 林 紘太郎
7. 調査成果 調査では、開発予定地内に

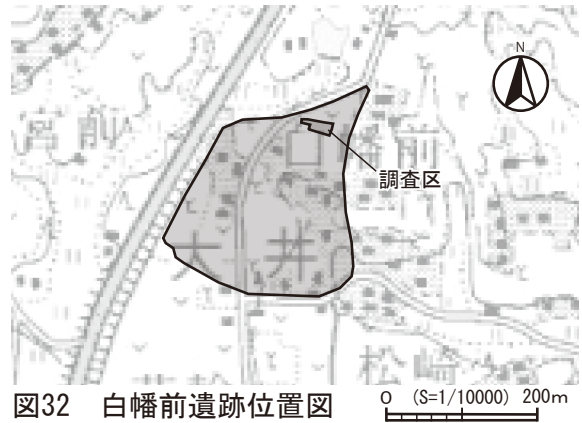


図32 白幡前遺跡位置図

調査区を3箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約20cm～30cmの深さで、黄褐色土の基盤層を確認した。遺構は、2 Tより焼土、炭化物を含む土坑を1基確認したが、遺物は確認されなかった。そのほかの調査区からは、遺構及び遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において土坑1基が確認された。しかし、今回の調査において確認された埋蔵文化財周辺では、遺構検出面まで掘削が及ばないことから、本調査は要しない。当開発では、狭小範囲において基盤層以下までの掘削を伴う計画掘削を行う箇所があること、埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから立会による対応とする。



図33 調査区位置図



写真 69 1 T調査状況



写真 70 2 T調査状況

第11項 高見町B遺跡（6次調査）

1. 調査原因 集合住宅建設
2. 調査地点 南相馬市原町区高見町
3. 調査期間 平成30年7月10日
4. 調査対象面積 990㎡
5. 調査面積 40㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 調査では、開発予定地内に2m×20mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約1.2mの深さで、黄褐色土の基盤層を確認した。基盤層である黄褐色土層より上層は造成による盛土であり、造成の段階で基盤層上の本来の堆積土は削平されたと考えられる。遺構は確認されなかったが、盛土中から土師器片が少量出土している。
8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、土師器片が出土したが、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかった。このことから改めて保存協議を行う必要はない。しかしながら、埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから立会による対応とする。

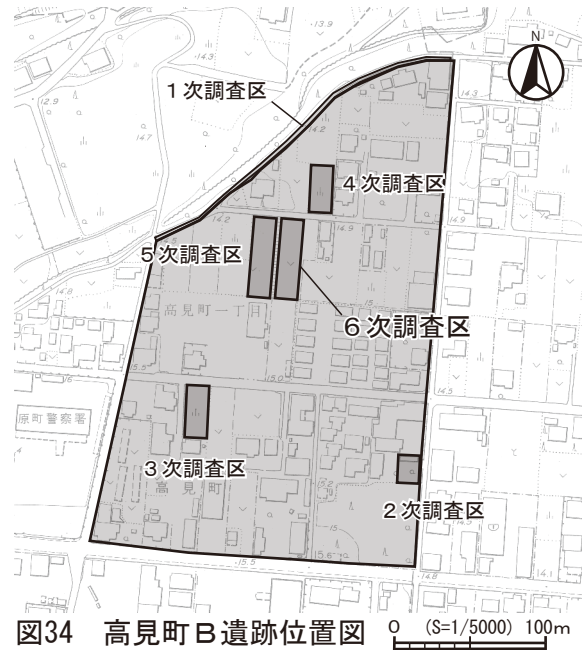


図34 高見町B遺跡位置図 0 (S=1/5000) 100m

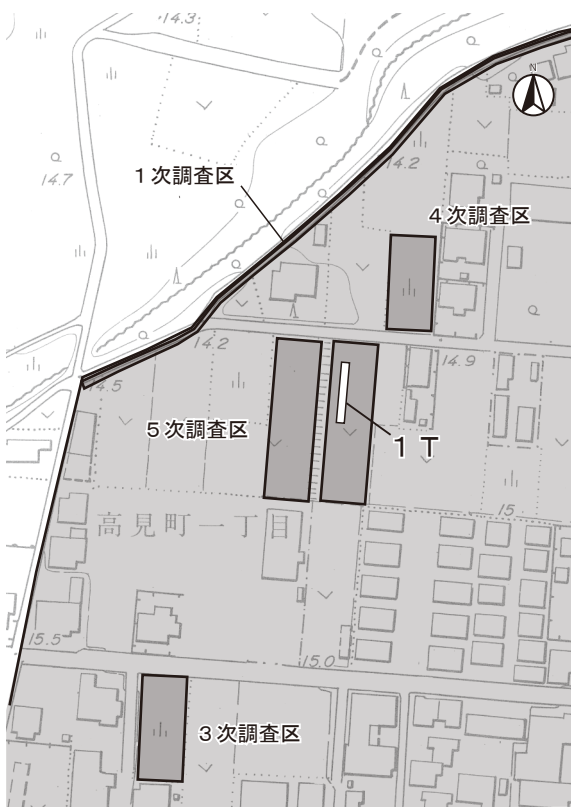


図35 調査区配置図 0 (S=1/1500) 30m



写真71 調査前状況



写真72 1 T調査状況

第12項 高松C遺跡（2次調査）

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 南相馬市原町区
上北高平字高松
3. 調査期間 平成30年7月19日
4. 調査対象面積 283㎡
5. 調査面積 12㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩

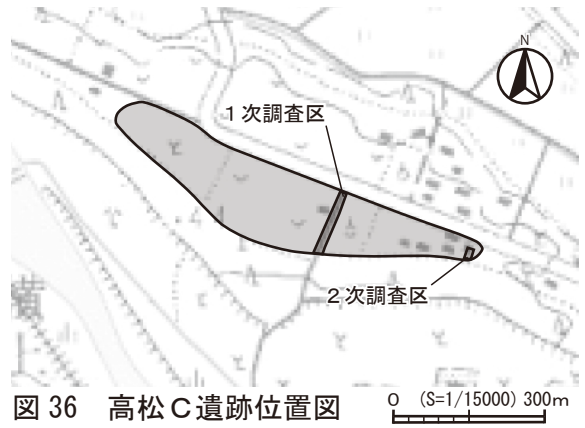


図36 高松C遺跡位置図

7. 調査成果 調査では、開発予定地内に2m×6mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約30cmの深さで、褐色土の基盤層を確認した。調査区の周辺では、1次調査で複数の古代の竪穴住居跡と土師器・須恵器など集落の一部が確認されていることから、同様に竪穴住居跡の検出が想定されたが、調査区内からは遺構及び遺物は確認されなかった。
8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかった。このことから改めて保存協議を行う必要はない。しかしながら、埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応とする。

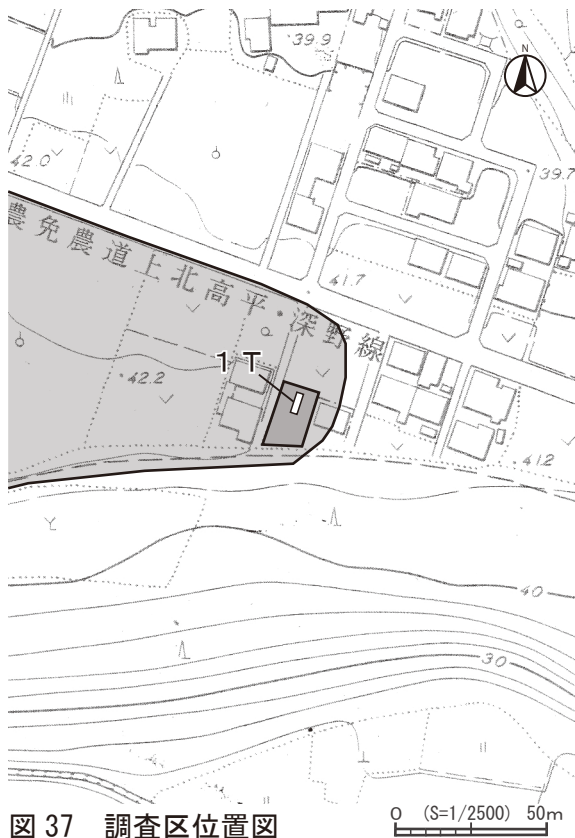


図37 調査区位置図



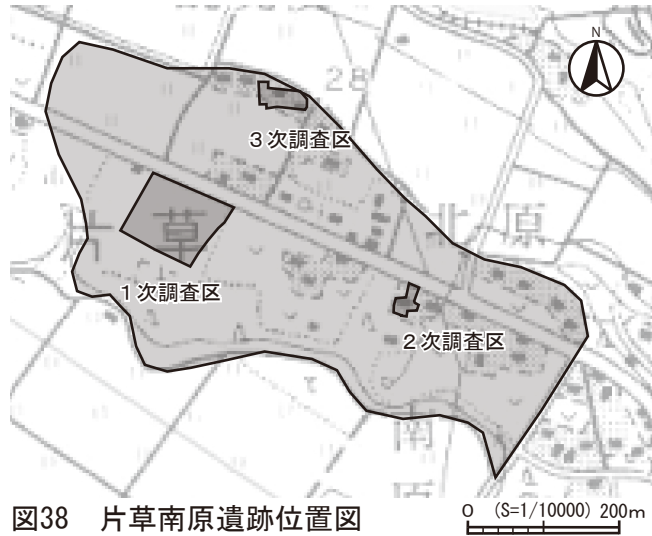
写真73 調査前状況



写真74 1-T調査状況

第13項 片草南原遺跡(3次調査)

- 1. 調査原因 個人住宅建設
- 2. 調査地点 南相馬市小高区
片草字北原
- 3. 調査期間 平成30年8月10日
- 4. 調査対象面積 976.48m²
- 5. 調査面積 2m²
- 6. 調査担当 埋蔵文化財調査員
濱須 脩



- 7. 調査成果 調査では、合併浄化槽設置箇所に1m×2mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約30cmの深さで、褐色土の基盤層を確認した。調査区内からは遺構・遺物は確認されなかった。
- 8. 調査所見 調査の結果、調査区内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかった。しかし、今回の調査では、建物建設位置ではなく、合併浄化槽設置位置でのみ調査を行っていることから、建物建設位置には遺構が存在する可能性がある。そのため工事立会による対応が望ましい。



第14項 鯖沢遺跡(1次調査)

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 南相馬市小高区神山字鯖沢
3. 調査期間 平成30年8月30日～9月4日
4. 調査対象面積 9,962m²
5. 調査面積 31m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 調査では、開発予定地内の北側、製鉄関連遺構が所在する可能性がある緩斜面に幅1mの調査区を5箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。なお、尾根の頂部及び南向き斜面については、表面調査にて範囲内の確認をした際に、遺構が所在するような地形ではなかったことから、調査区を設定しなかった。調査の結果、現地表面から約30cmの深さで、黄褐色土の基盤層を確認した。製鉄に関連した木炭窯跡等の検出を想定していたが、調査区内からは遺構・遺物は確認されなかった。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応とする。

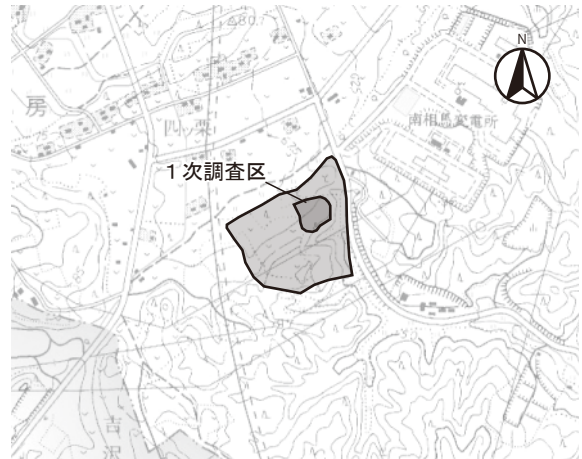


図40 鯖沢遺跡位置図

0 (S=1/25000) 500m



図41 調査区位置図

0 (S=1/2500) 50m



写真77 1 T調査状況



写真78 5 T調査状況

第15項 入竜田C遺跡(1次調査)

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 南相馬市原町区深野字入竜田
3. 調査期間 平成30年9月11日～10月16日
4. 調査対象面積 102,309m²
5. 調査面積 199.5m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 今回の調査では、調査範囲

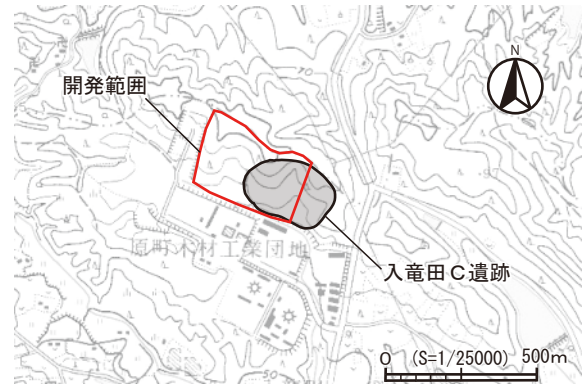


図42 入竜田C遺跡位置図

内に調査区を39箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。また、調査範囲より西側の開発範囲については、過去に行われた表面調査により遺構が確認されなかったことから土砂採取可能範囲となっている。そのため、調査区の設定を行わなかった。調査の結果、現地表面から約30cm～90cmの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層を検出した。16Tでは、長軸約2.8m、短軸約2mの木炭焼成土坑を検出した。遺構内には、黒褐色土と黒色土が混在し、多量の炭化物と焼土ブロックが含まれる。32Tでは、約1.8m角の隅丸形状を呈する木炭焼成土坑が検出された。焼けた壁面の一部と底部の堆積土が残存した状態で

大半が流失している。2基の木炭焼成土坑の周辺から遺物は出土せず、年代は不明であるが古代の焼成土坑に比べ規模が大きいため、中世以降の木炭焼成土坑の可能性が考えられる。

19、23、24、31Tでは、竪穴住居跡が検出した。いずれも竪穴住居跡の一部のみであるが、今回の調査は遺構の確認が目的であるため、検出のみに留めた。

19Tでは、調査区内にて竪穴住居跡(S I 1)の南東の一部が検出した。堆積土は、暗褐色土と黒色土が混在して堆積しており、人為的な埋戻しの可能性が考えられる。周辺から遺物は確認されなかった。

23Tでは竪穴住居跡(S I 3)の南西辺の一部を検出した。堆

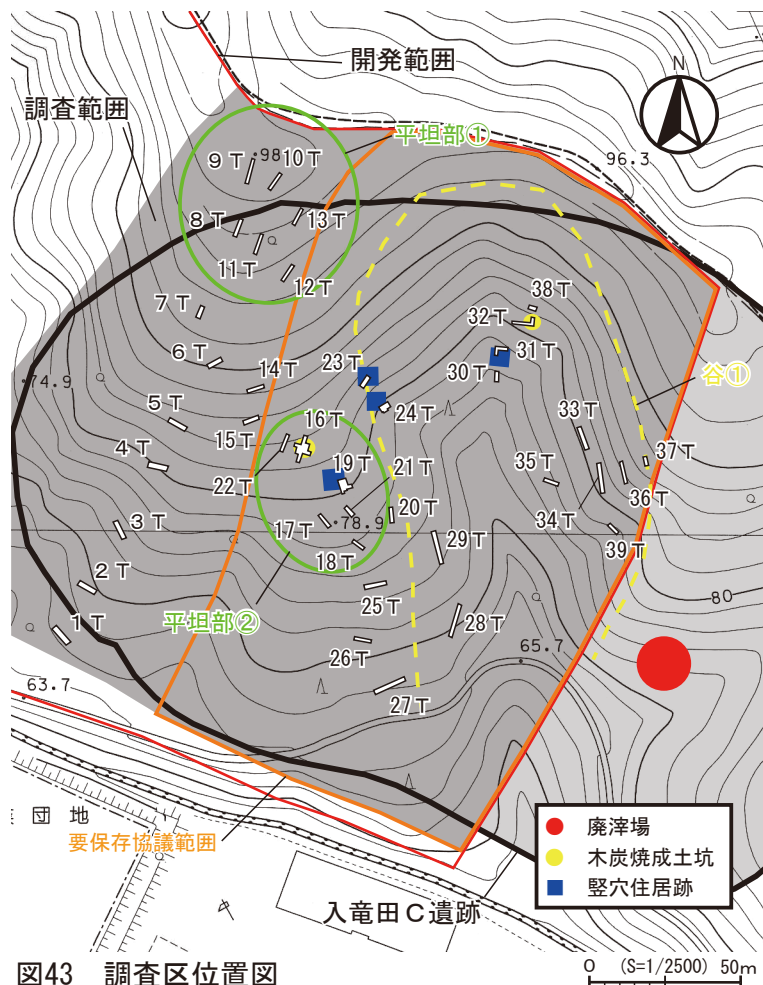


図43 調査区位置図

積土は、南西辺付近に暗褐色土、中央に黒色土が確認でき、暗褐色土が初期堆積した後に黒色土が堆積したと考えられる。遺物は、南西辺付近から土師器一個体が出土している。

図48は、S I 3の南西辺付近で出土した甕形土器である。僅かに輪積みの痕跡が見られ、器形は、口縁部が外側に強く屈曲し、胴部が丸みを帯び、底部は平底である。口縁部の調整は外面にヨコナデ、内面は横位のミガキが見られ、黒色処理が施されているが剥落が激しい。胴部は内外面ともに摩滅により調整痕が確認できないが、凹凸が少ないことからナデによる調整が考えられる。時期は、9世紀初頭頃と考えられる。

24Tでは、竪穴住居跡(S I 2)の南東の一部と東辺からカマドと真東に約40cm伸びる煙道を検出した。竪穴住居跡の大部分は調査区外であるため、全体の規模は不明であるが、東辺で確認されたカマドが東辺の中央に位置すると仮定した場合、竪穴住居跡の南東角とカマドの距離が約1.6mを計測することから、竪穴住居跡の1辺は約3.2m前後の規模を有すると想定される。竪穴住居跡内の堆積土は、黒褐色土を呈し、炭化物・焼土粒が多く含まれる。調査区から遺物は確認されなかった。

31Tでは、竪穴住居跡(S I 4)の北辺を検出した。堆積土は、黒褐色土と黒色土が混在している。堆積土中に大量の炭化物が含まれていることから、木炭窯跡の作業場の可能性も考えられる。

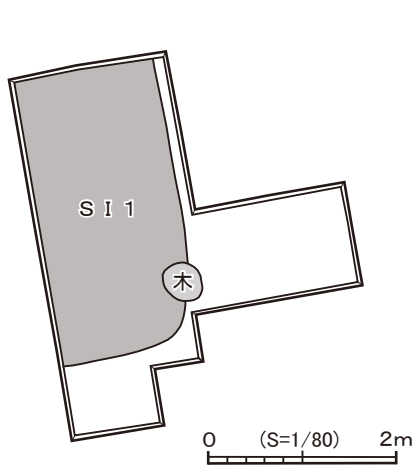


図44 19T S I 1 平面図

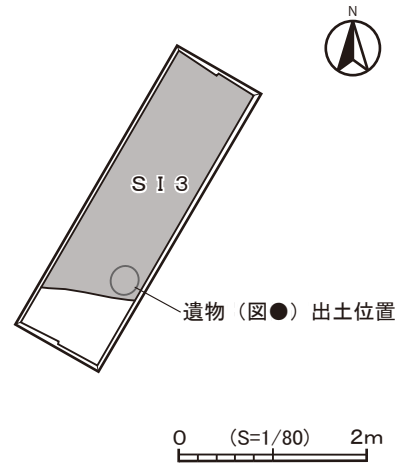


図45 23T S I 3 平面図

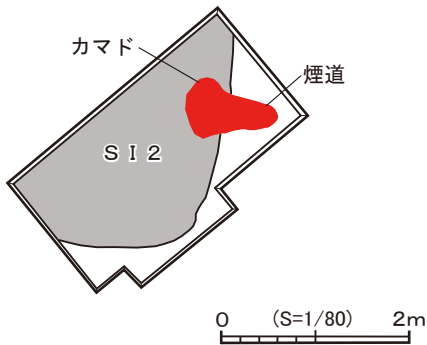


図46 24T S I 2 平面図

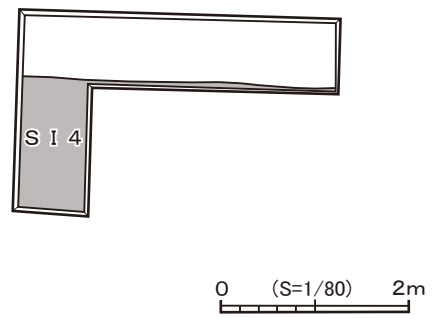


図47 31T S I 4 平面図

8. 調査所見 調査の結果、調査範囲内において平安時代の集落跡が確認された。本調査区の周辺では、古代の製鉄に関連した廃滓場が確認されていることから、今回確認された集落跡は製鉄に関連する可能性が考えられる。また、今回の調査によって遺跡内における遺構の分布状況を明らかにすることができた。

今回の調査では、開発範囲内において埋蔵文化財が確認されたため、確認された箇所において開発行為を行う場合には、事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には記録保存のための発掘調査が必要である。

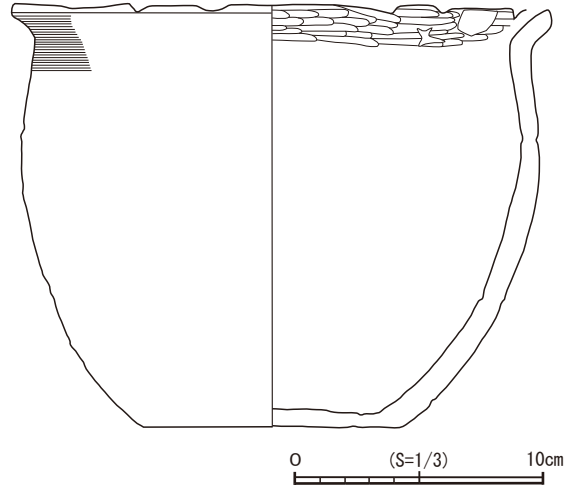


図48 入竜田C遺跡出土遺物



写真79 23 T S I 3 出土遺物



写真 80 16 T 調査状況



写真 81 19 T S I 1 検出状況



写真 82 23 T 調査状況



写真 83 23 T 遺物出土状況



写真 84 24 T 調査状況



写真 85 24 T S I 3 検出状況



写真 86 31 T 調査状況



写真 87 31 T S I 4 検出状況

第16項 玉ノ木平C遺跡（1次調査）

1. 調査原因 太陽光発電設備設置
2. 調査地点 南相馬市小高区吉名字白旗平地内
3. 調査期間 平成30年9月28日
4. 調査対象面積 2,927m²
5. 調査面積 126m²
6. 調査担当主査 林 紘太郎
7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発



図 49 玉ノ木平C遺跡位置図 (S=1/25000) 500m

予定地内に、幅2m×長さ15mの調査区を4箇所を設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。各調査区ともに現地表面から20cm～30cmの深さで、黄褐色土の基盤層が確認された。調査区のうち、3T・4Tから幅約60cmの溝跡が確認された。溝跡は南北方向に延びており、両調査区において確認された溝跡は一連のものと考えられる。サブトレンチを入れて溝跡の断面を確認したところ深さは20cmを計り、断面はU字状を呈している。調査区全体を含め、基盤層に達するまでの堆積土や、溝跡の堆積土からは遺物は出土しなかったため、この溝跡の年代及び性格は不明である。

8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲において年代及び性格不明の溝跡を1条確認したが、その他の保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかった。したがって、改めた保存協議は要せず、慎重工事による対応とする。

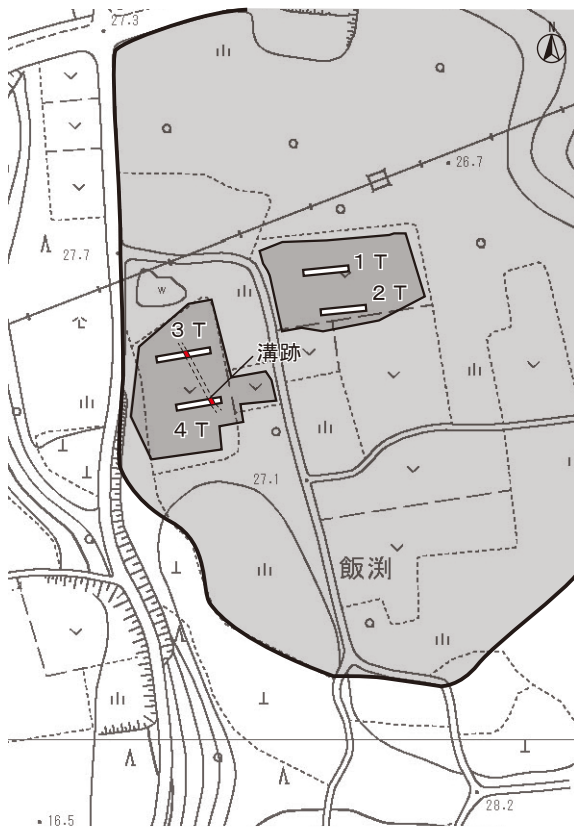


図 50 調査区位置図 (S=1/2500) 50m



写真 88 3 T 調査状況

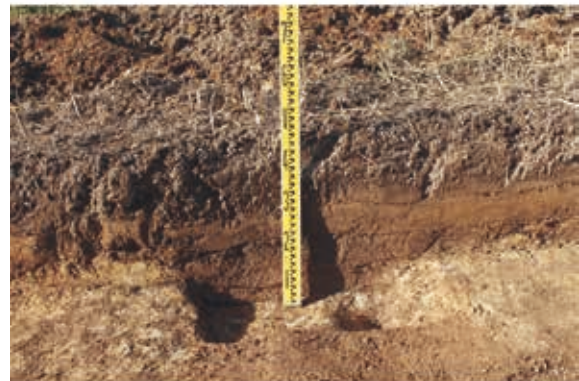


写真 89 3 T 溝跡土層断面

第17項 上広畑B遺跡（1次調査）

1. 調査原因 太陽光発電設備設置
2. 調査地点 南相馬市小高区小高字上広畑地内
3. 調査期間 平成30年10月2日
4. 調査対象面積 702m²
5. 調査面積 40m²
6. 調査担当 主査 林 紘太郎
7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発

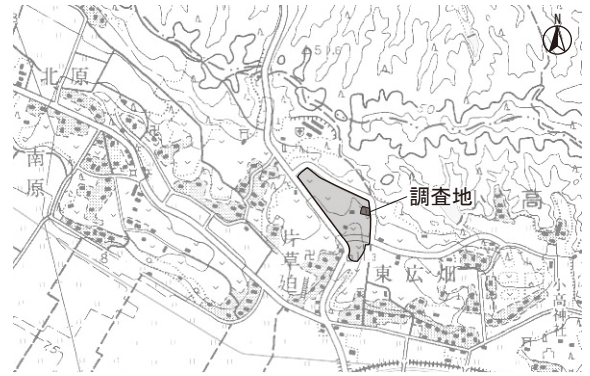


図 51 上広畑B遺跡位置図 0 (S=1/25000) 500m

予定地内に、幅2m×長さ10mの調査区を2箇所を設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。各調査区ともに現地表面から20cm～25cmの深さで黄褐色土の基盤層に達した。基盤層を確認するまでの堆積土からは遺構、遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しない。したがって、改めて保存協議を行う必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。

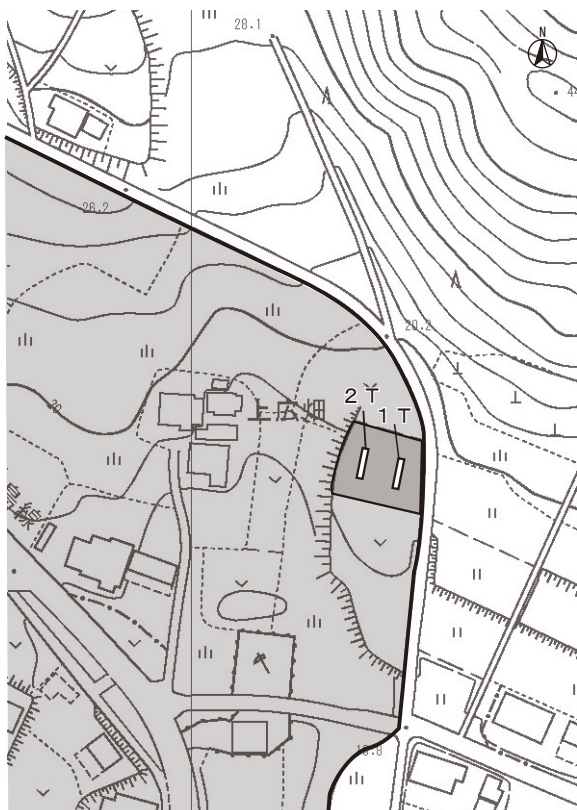


図 52 調査区位置図

0 (S=1/2500) 50m



写真 90 1 T 調査状況



写真 91 2 T 調査状況

第18項 清信遺跡（1次調査）

1. 調査原因 太陽光発電設備設置
2. 調査地点 南相馬市小高区大井字清信地内
3. 調査期間 平成30年10月3日
4. 調査対象面積 1,591㎡
5. 調査面積 60㎡
6. 調査担当 主査 林 紘太郎

7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発予定地内に、幅2m×長さ15mの調査区を2箇所を設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。各調査区ともに現地表面から40cmの深さで黄褐色土の基盤層が確認された。この層の上面において精査したところ、1 Tでは竪穴住居跡（S I 1）と東西方向に延びる溝跡（S D 1）が確認された。S I 1の覆土からは土師器片が出土していることから、古墳時代から平安時代の住居であると考えられる。S D 1は、覆土から遺物は確認されず時期及び性格は不明であるが、同トレンチのS I 1の覆土と特徴が類似していることから、S D 1はS I 1と同時代の遺構である可能性が高い。2 Tでは、東西方向に延びる溝跡が2条（S D 2・S D 3）、井戸跡（S E 1）、柵列跡（S A 1）、性格不明遺構（S X 1）が基盤層上面で確認された。各遺構の時期は不明だが柵列の小穴の堆積土は、上層の耕作土に類似していることから、現代のものと考えられる。

8. 調査所見 今回の試掘調査により、1 Tで竪穴住居跡1軒が存在することが確認された。当開発の太陽光発電設備に伴い使用する支柱は8cm未満のものであり、当開発によって埋蔵文化財の損失する部分は最小限に留まることから、改めて保存協議、発掘調査等の必要はない。ただし、当開発区域は周知の埋蔵文化財包蔵地であることから工事立会による対応とする。

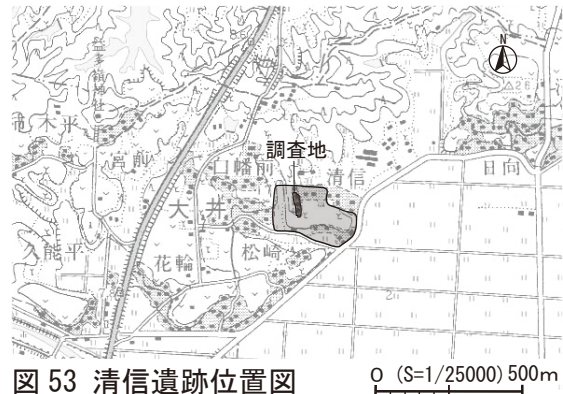


図 53 清信遺跡位置図



図 54 調査区位置図



写真 92 1 T 調査前状況

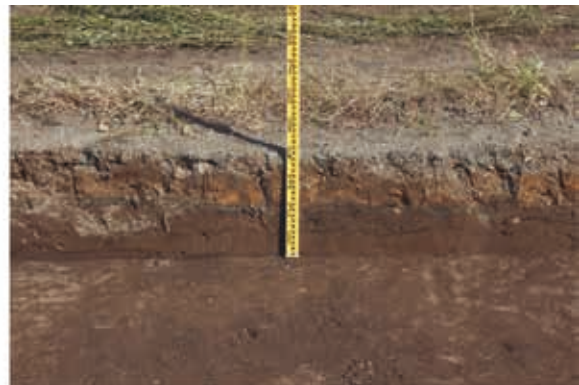


写真 93 1 T S I 1 土層断面

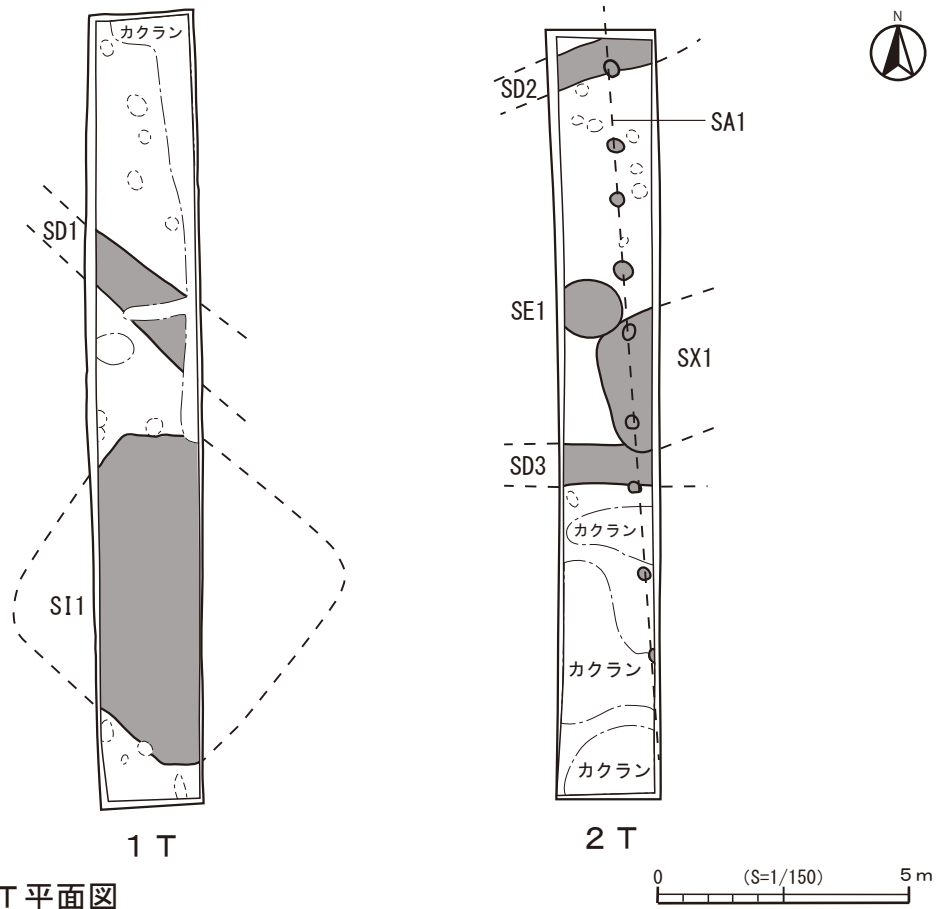


図 55 1 T・2 T 平面図



写真 94 1 T 調査状況



写真 95 2 T 調査状況



写真 96 2 T 調査状況

第19項 小原遺跡(1次調査)

1. 調査原因 倉庫・車庫建設
2. 調査地点 南相馬市原町区下太田字小原
3. 調査期間 平成30年10月18日
4. 調査対象面積 4,463㎡
5. 調査面積 23.6㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 調査では、開発予定地内に幅1mの調査区を4箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現



図56 小原遺跡位置図

地表面から約1.5m～2.8mの深さで青灰褐色土層を確認した。青灰褐色土層より上層は、約1.5m～2.2mの盛土であり、調査区周辺の地形から青灰褐色土が谷の堆積土層と考えられることから、谷を埋める形で盛土を行っていると考えられる。調査区内からは遺構・遺物は確認されなかった。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応とする。



図57 調査区位置図



写真97 1T調査状況



写真98 4T調査状況

第20項 宮平遺跡（2次調査）

1. 調査原因 太陽光発電設備設置
2. 調査地点 南相馬市原町区
深野字宮平地内
3. 調査期間 平成30年11月8日
4. 調査対象面積 978m²
5. 調査面積 40m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江

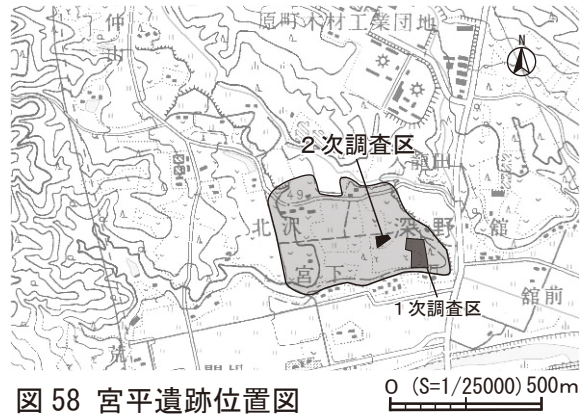


図 58 宮平遺跡位置図

7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発予定地内に、幅2m×長さ10mの調査区を2箇所を設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。各調査区ともに現地表面から60cm～70cmの深さで、黄褐色土の基盤層が確認された。基盤層に達するまでの堆積土から遺構、遺物は確認されなかった。
8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しないと考える。このことから改めて保存協議を行う必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。



図 59 調査区位置図



写真 99 1 T 調査状況



写真 100 2 T 調査状況

第21項 比丘尼沢B遺跡(2次調査)

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 南相馬市原町区
上北高平字比丘尼沢
3. 調査期間 平成30年12月14日
4. 調査対象面積 570m²
5. 調査面積 12m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 今回調査区を設定した箇所

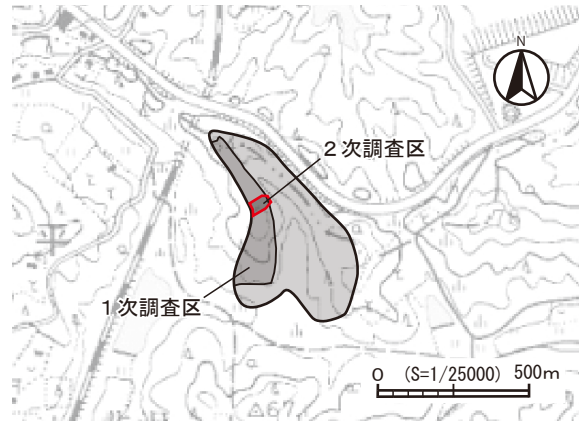


図60 比丘尼沢B遺跡位置図

は、1次調査を行った範囲内であるが、土砂採取のための通路を通す計画により、詳細な調査が必要なため、1m×2mの調査区を6箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約70cmの深さで褐色土の基盤層を確認した。1次調査を行った東向き斜面の北部では、木炭窯跡が確認されていることから、同様に木炭窯跡の検出が想定されたが調査区内からは遺構・遺物は確認されなかった。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応とする。

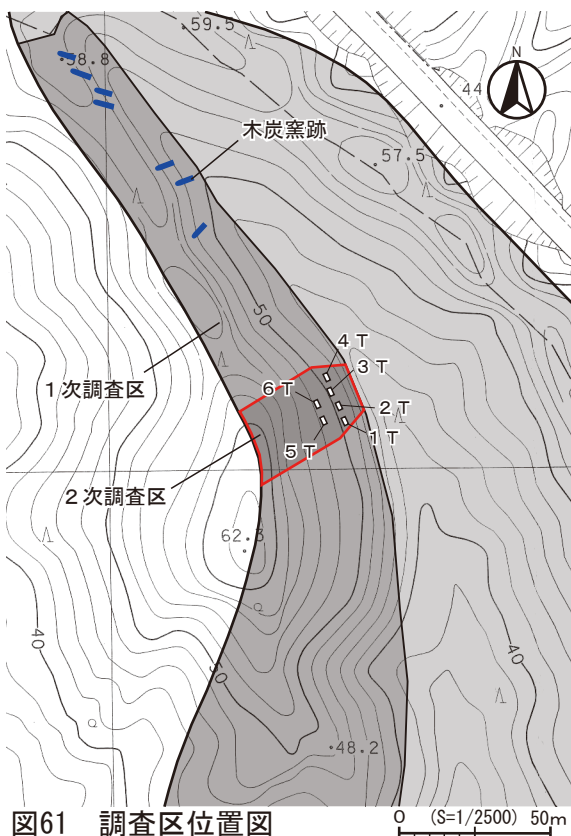


図61 調査区位置図



写真 101 2 T 調査状況



写真 102 4 T 調査状況

第22項 諏訪原遺跡(2次調査)

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 南相馬市小高区塚原字沼ノ上
3. 調査期間 平成30年12月17日
4. 調査対象面積 996.11m²
5. 調査面積 38.6m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 林 紘太郎
7. 調査成果 調査では、開発予定地内に

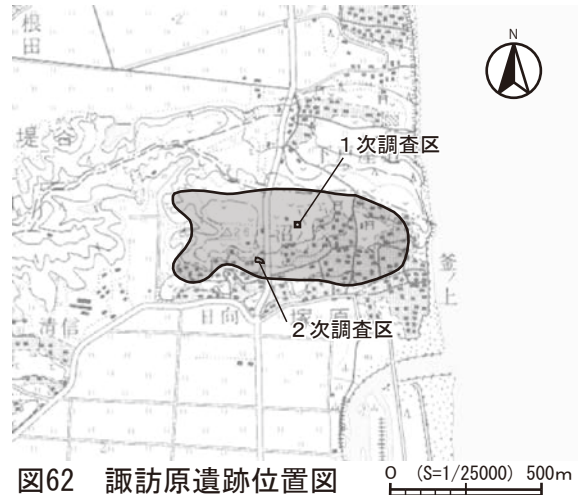


図62 諏訪原遺跡位置図

幅2mの調査区を2箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、1

Tでは、現地表面から約60cm、2Tでは、約1.3m～1.4mの深さで基盤層を確認した。遺構は、1T・2Tの調査区から小穴を8基検出したが、調査区内から遺物の出土は確認できず、小穴の時期及び性格は不明である。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内にて埋蔵文化財が確認されたが、今回の開発計画において、遺構が確認された深さまで掘削が及ばないことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから工事立会による対応とする。



図63 調査区位置図



写真103 1T調査状況



写真104 2T調査状況

第23項 御所内遺跡(1次調査)

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 南相馬市鹿島区横手字御所内
3. 調査期間 平成31年2月7日～2月8日
4. 調査対象面積 419m²
5. 調査面積 16m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 調査では、開発予定地内に

2m×8mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約1.4mの深さで黄褐色土の基盤層を確認した。過去に行われた表面調査にて、縄文土器の散布が広い範囲で確認されていたことから、縄文時代の竪穴住居跡等の集落の一部が検出することを想定していたが、調査区内からは遺構・遺物は確認されなかった。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応とする。



図64 御所内遺跡位置図

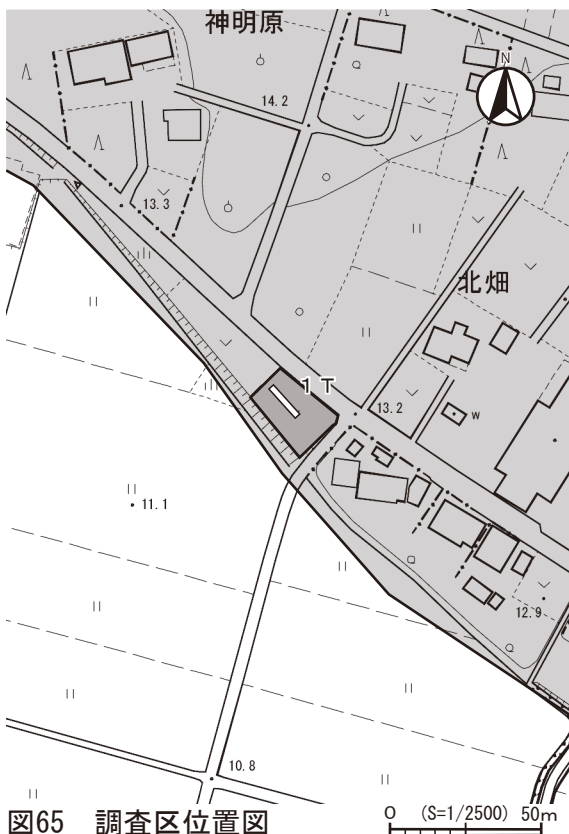


図65 調査区位置図



写真 105 調査前状況



写真 106 1 T 調査状況

第24項 永渡横穴墓群(1次調査)

1. 調査原因 道路改良工事
2. 調査地点 南相馬市鹿島区南柚木字
八久々沢・永渡字東永渡
3. 調査期間 平成31年2月13日～2月25日
令和元年5月15日～5月31日
4. 調査対象面積 913.0㎡
5. 調査面積 53.1㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩

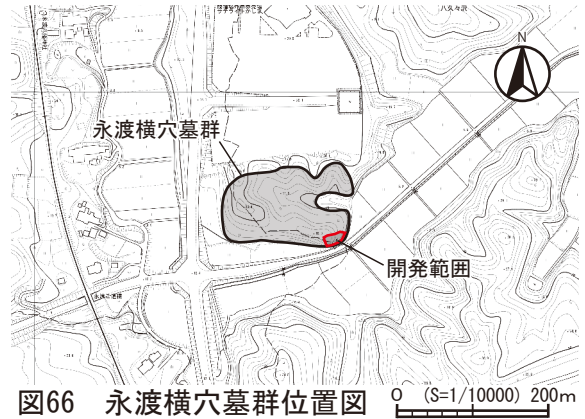


図66 永渡横穴墓群位置図

7. 調査成果 今回の調査は、道路の拡幅を目的とした工事計画において、該当する遺跡である「永渡横穴墓群」への影響が免れないため、調査を実施した。試掘調査以前に行われた表面調査では、過去の開発による削平を受けた南向き斜面にて、奥壁のみが残存する横穴墓(5号横穴墓)1基が確認された。開発範囲の北部に所在する北東向きの谷(谷①)では、開発範囲外ではあるが、横穴墓の可能性のある落ち込みが1箇所確認されている。試掘調査では、開発範囲に該当する谷①の北西向き斜面に幅1mの調査区を8本設定し、横穴墓の羨道部分の検出を目的とし、南向き斜面では、開発範囲の東端と西端に所在する

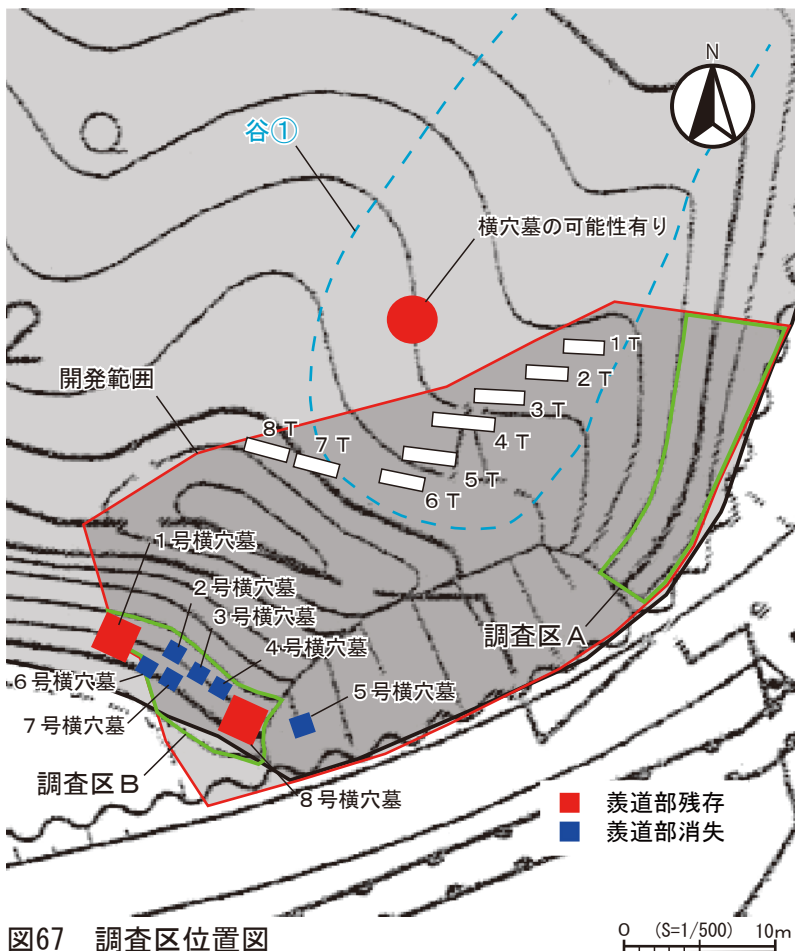


図67 調査区位置図

る表土に覆われた箇所の掘削を行い、横穴墓の検出を目的に調査を行った。

調査の結果、谷①の調査区(1～8 T)では、現地表面から約0.6m～1.4mの深さで基盤層である黄褐色土層を確認したが横穴墓の羨道と考えられる遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。

南向きの斜面は、過去の造成により大きく削平されたことで垂直に近い急傾斜となっている。掘削を行ったのは、南向き斜面の調査区Aと調査区Bであり、この2箇所は丘陵上面から流れた土が堆積していた。そ

のため、表土の下に横穴墓が検出することが想定されることから、全面的に表土の掘削を行った。調査区Aでは、表土を掘削した段階で岩盤層を検出したが、横穴墓は確認されなかった。調査区Bでは、付近で確認された横穴墓（5号横穴墓）が地表面から約3mの高さにあり、未確認の横穴墓が同じ標高で検出することが想定されるため、同じ標高のラインを中心に掘削を行った。掘削の結果、1～4・6～8号の7基の横穴墓が検出された。

調査区Bの西端で検出した1号横穴墓は、羨道部が検出されたが玄門のやや手前までしか残存しておらず、羨道から玄室にかけてほとんどが埋没している。確認できた羨道の幅は約2.7mを測り、玄門手前の両側の側壁に門の痕跡が確認できる。

2～4・6・7号横穴墓は、1号横穴墓の東側で確認された。確認された5基の横穴墓は、上段と下段の2段に分かれる形で造営されており、2～4号の3基が上段、6・7号の2基が下段にて並列する。検出した段階で、2～4・7号横穴墓は玄室の奥壁と床面の一部のみが残存している状態であり、羨道や玄門は確認されなかった。6号横穴墓は保存状態が良く、天井部分は残存するが2～4・7号横穴墓と同様に羨道や玄門は確認されなかった。6号については、2～4・7号と比較して残存率が良いため、遺構内部の詳細な調査は行わず現状保存とした。

調査区Bの東端で検出された8号横穴墓は、羨道部が検出されたが1号横穴墓と同様に玄門のやや手前までしか残存しておらず、羨道は天井付近まで埋没していた。

8. 調査所見 調査の結果、開発範囲内において8基の横穴墓群が確認された。今回の調査により、「永渡横穴墓群」の現状を知るとともに横穴墓の形態を明らかにすることができた。

今回横穴墓群が確認された箇所については事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



写真 107 調査区全景



写真 108 1 T 調査状況



写真 109 4 T 調査状況



写真 110 7 T 調査状況



写真 111 横穴墓群調査状況



写真 112 横穴墓群調査状況



写真 113 横穴墓群調査状況



写真 114 1号横穴墓検出状況



写真 115 2号横穴墓調査状況



写真 116 3号横穴墓調査状況



写真 117 4号横穴墓調査状況



写真 118 5号横穴墓調査状況



写真 119 6号横穴墓調査状況



写真 120 7号横穴墓調査状況



写真 121 8号横穴墓調査状況



写真 122 8号横穴墓玄門検出状況

第25項 北明内遺跡(3次調査)

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 南相馬市原町区石神字
北明内・信田沢字尼ヶ折
3. 調査期間 平成31年3月1日
～令和元年5月7日
4. 調査対象面積 65,487m²
5. 調査面積 491.7m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩



図68 北明内遺跡位置図

7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発範囲が広大であるため、調査可能な箇所、調査が必要な箇所を事前に行った表面調査にて確認し、A～D区の4地区の調査範囲を設定した。調査では、範囲内に調査区を129箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。また、A区より南側の開発範囲に関しては、過去に行われた表面調査により遺構が確認されなかったとして「土砂採取可能範囲」としていることから、調査区の設定は行わなかった。A区は、東から北西に向かって伸びる谷(谷①)の北向き斜面である木炭窯跡の検出が想定されたため、斜面に調査区を23箇所設定し、木炭窯跡等の検出を目的に調査を行った。

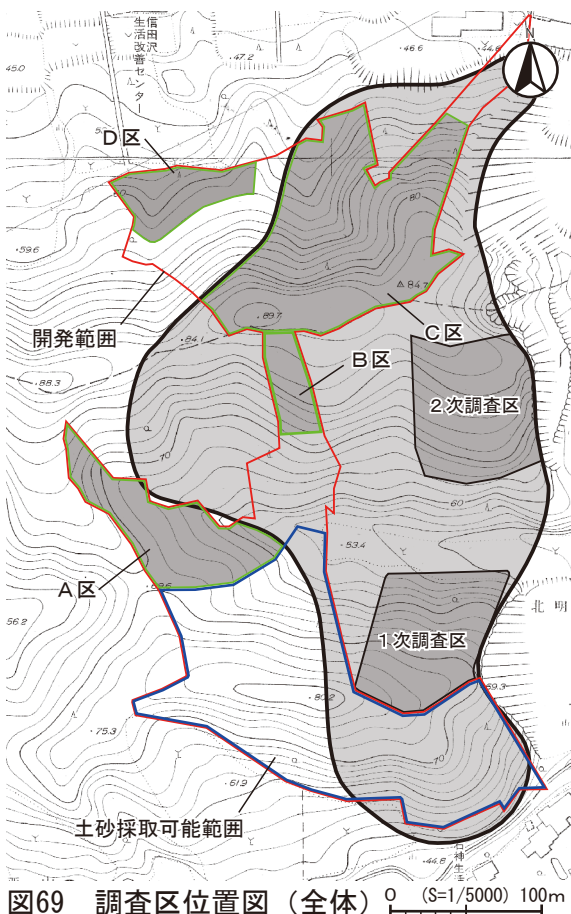


図69 調査区位置図(全体)

調査の結果、現地表面から約0.4m～1.2mの深さで基盤層である黄褐色土層を検出した。検出した遺構は、3Tでは隅丸長形状の木炭焼成土坑を1基、18Tでは調査区の北端にて炭化物を多量に含んだ黒色土を検出した。18Tの黒色土は木炭窯跡の作業場と考えられる。また、調査範囲外であったがA区の西端付近に位置する谷の頂部にて、木炭窯跡と考えられる楕円状の窪地が数箇所確認されている。谷の頂部に複数の木炭窯跡と考えられる落ち込みが確認されたことや18T以外の調査区から木炭窯跡が確認されなかったことから、谷の頂部周辺に木炭窯を集中して造成していたと推測される。

B区は、A区と谷を挟んだ向かい側の南向き斜面に所在する。また、開発範囲外であるがB区の東側と西側では、製鉄に関連した廃滓場や木炭窯跡が多数確認されており、B区でも廃滓場もしくは木炭窯跡の検出が想定さ

れた。

調査区は、範囲内に20箇所設定し、製鉄関連遺構の検出を目的に調査を行った。また、B区の南にある調査区を設定していない箇所については、土砂崩れにより地形が大きく変動しているため、調査区の設定は行わなかった。調査の結果、現地表面から約0.8m～1.2mの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層

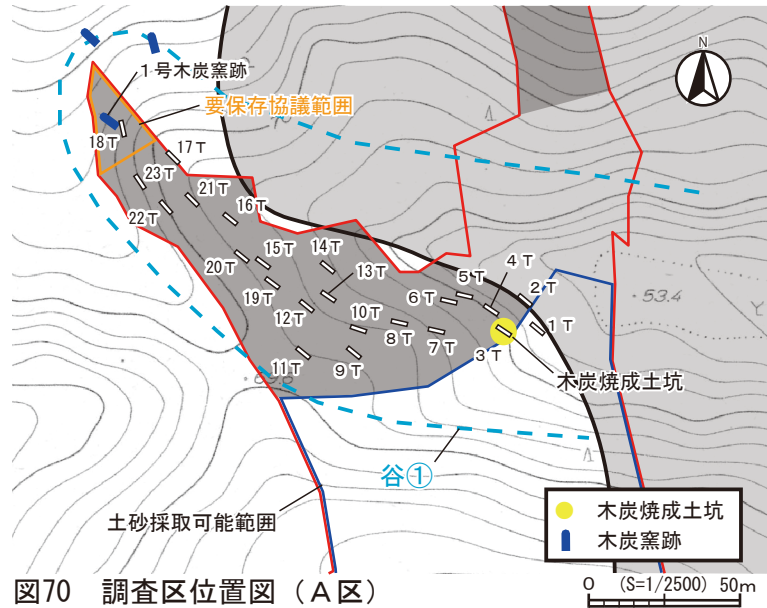


図70 調査区位置図 (A区)

検出した。43Tでは、約40cm×80cmの楕円形を呈する土坑1基を表土直下から検出した。検出した段階で、土坑の内部及び周辺から焼土が確認されなかった。住居跡に付随する遺構の可能性を考え、調査区の拡張を行ったところ、拡張した箇所から鉄滓が出土した。鉄滓の特徴から、製鉄炉で鉄を精製した際にできるものと判断されたため、鉄滓が出土した箇所は廃滓場の一部であり、検出した土坑も含めて製鉄炉跡に関連する遺構の可能性が

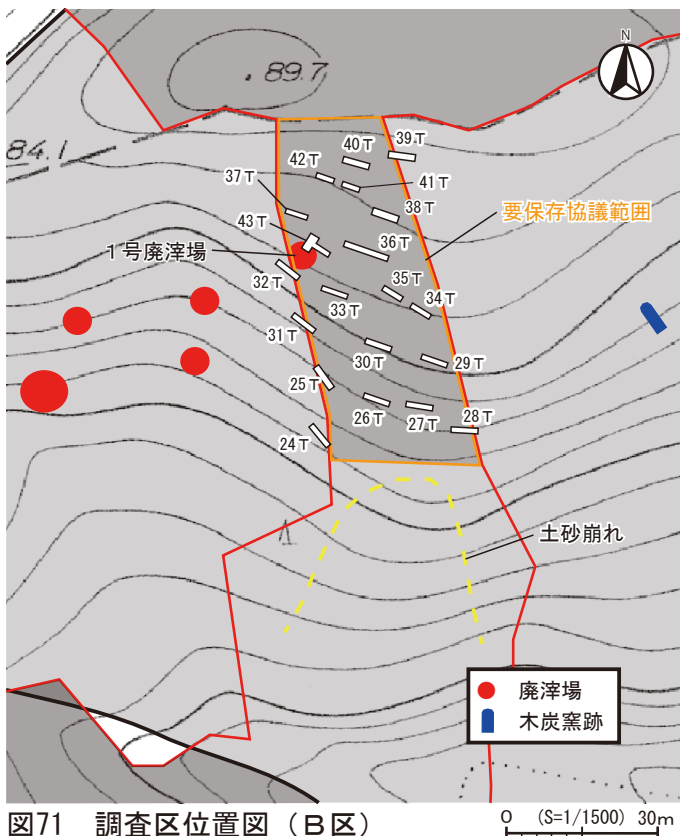


図71 調査区位置図 (B区)

範囲が狭小であることから短期間で操業を終えていたと推測される。この他の調査区からは、遺構・遺物は確認されなかった。今回の調査で、廃滓場1箇所が確認されたことにより、南向き斜面において全面的に製鉄関連の遺跡が所在することが明らかになった。

C区は、B区の北側、尾根頂部の平坦面から北向き斜面に所在する。頂部には、広い平坦部を有し、北向き斜面の中央には規模の大きい谷(谷②)が所在する。平坦部では竪穴住居跡、北向き斜面では木炭窯跡の検出が想定されたため、範囲内に調査区を57箇所設定し、調査を行った。

平坦部では、現地表面から約50cm～70cmの深さで基盤層と考えられる褐色土層を検出した。竪穴住居跡の検出を想定していたが、いずれの調査区からも遺構及び遺物は確認されなかった。北向き斜面では、現地表面から約0.4m～1.4mの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層を検出した。54Tでは、多量の炭化物と少量の焼土を含む黒色土を検出した。調査区の斜面上方に楕円状の窪地が確認できる

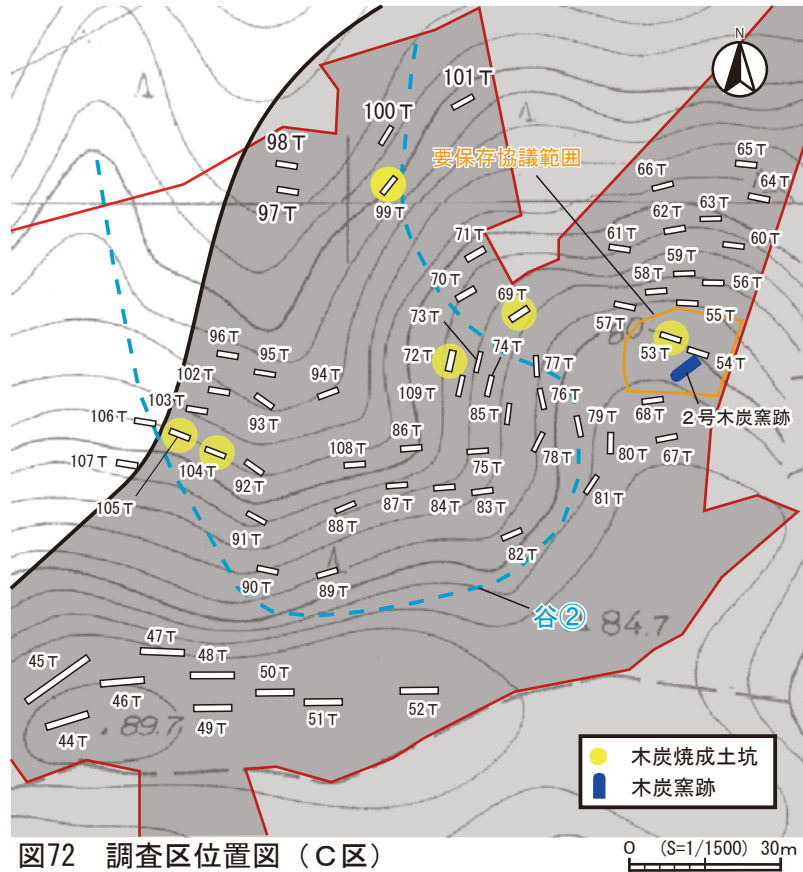


図72 調査区位置図 (C 区)

ことや黒色土の含有物から木炭窯跡の可能性が高いと推測される。53、69、72、99、104、105Tでは木炭焼成土坑が検出している。検出した位置から、集中して検出されることはなく、広い範囲に分散して確認されている。また、A区と同様に谷の頂部付近から木炭窯跡が検出されると想定していたが、頂部付近の調査区からは木炭窯跡は確認されなかった。

D区は、C区の北西に位置する北向き斜面である。北向きの小規模な2つの谷(谷③、④)が東西に並列しており、木炭窯跡の検出が想定されるため、範囲内に調査区を20箇所設定し、調査を行った。調査の結果、現地表面から約20cm～90cmの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層を検出した。111Tでは、木炭窯跡の崩落と考えられる落ち込みが確認されており、落ち込み内部の堆積土からは炭化物と焼土ブロックが出土している。112～114Tでは、炭化物を多く含んだ黒色土を検出した。黒色土は112～114Tにかけた範囲に分布しており、木炭窯からのかき出しが堆積した可能性が高い。また、114Tからは幅約1.2mの落ち込みを検出しており、炭化物と焼土粒を含むことから木炭窯跡が崩落した痕跡の可能性が考えられる。121Tでは、現地表面から約20cmの深さで大型の焼土ブロックを検出した。検出箇所を精査した結果、焼土ブロックの下層に炭化物と小型の焼土ブロックを含む黒褐色土が確認できることから木炭窯跡の天井が崩落した痕跡と考えられる。また、121Tの斜面下方に設定した122Tからは、121Tで確認された木炭窯跡に付随する作業場の検出が想定されたが、作業場は確認できず、流出により消失したと推測する。D区にて複数の木炭窯跡が確認されたが、他の調査範囲で確認された木炭窯跡と比較すると検出し

た調査区の標高差が大きく異なる点があげられる。時期が異なるのか地形的な問題があったのか、詳細は不明であるが、今後調査を行う上で留意していく点であると考えられる。

8. 調査所見 調査結果から設定したA～D区の調査範囲内から製鉄に関連する埋蔵文化財が確認された。今回の調査では、広範囲にわたり「北明内遺跡」の調査を行うとともに、遺跡内における製鉄関連遺構の分布状況を明らかにすることができた。

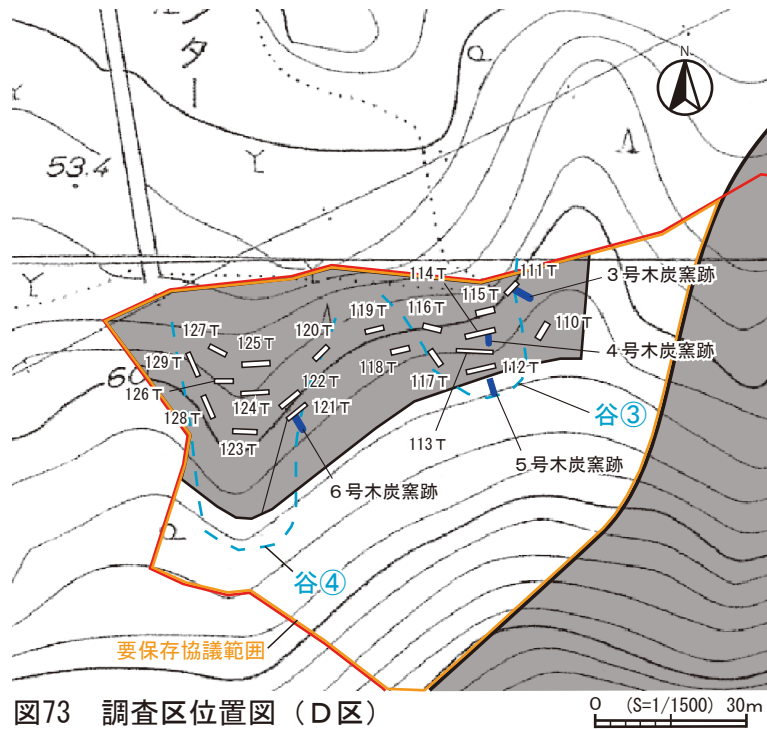


図73 調査区位置図 (D区)

今回埋蔵文化財が確認された箇所において、開発行為を行う場合には事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



写真 123 3 T 調査状況



写真 124 3 T 木炭焼成土坑検出状況



写真 125 18 T 調査状況



写真 126 18 T 1 号木炭窯跡検出状況



写真 127 43 T 調査状況



写真 128 43 T 1 号廃滓場・土坑検出状況



写真 129 54 T 調査状況



写真 130 54 T 2 号木炭窯跡検出状況



写真 131 113 T 調査状況



写真 132 113 T 4号木炭窯跡検出状況



写真 133 114 T 調査状況



写真 134 114 T 3・4号木炭窯跡検出状況



写真 135 3号木炭窯跡検出状況



写真 136 4号木炭窯跡検出状況



写真 137 121 T 調査状況



写真 138 121 T 6号木炭窯跡検出状況

第26項 大田和広畑遺跡（8次調査）

1. 調査原因 パイプハウス65棟、
園芸用複合施設1棟設置
2. 調査地点 南相馬市小高区
飯崎字南原地内
3. 調査期間 平成30年3月4日
～平成30年3月13日

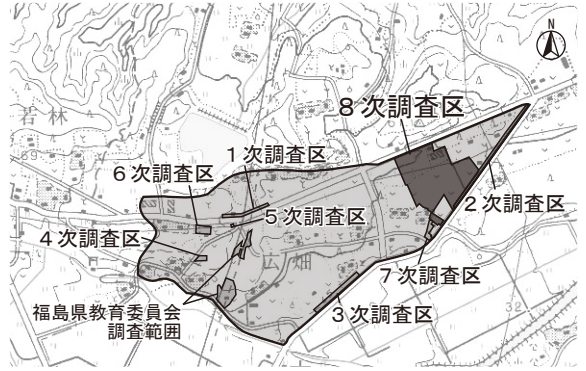


図74 大田和広畑遺跡位置図 (S=1/25000) 500m

4. 調査対象面積 38,432.9㎡
5. 調査面積 700㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発予定地内に、幅2m×長さ10mの調査区を35箇所に設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。各調査区ともに現地表面から40cm～1.35mの深さで黄褐色土の基盤層が確認された。基盤層に達するまでの堆積土から遺構、遺物は確認されなかった。
8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しない。このことから改めて保存協議を行う必要はないが、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。

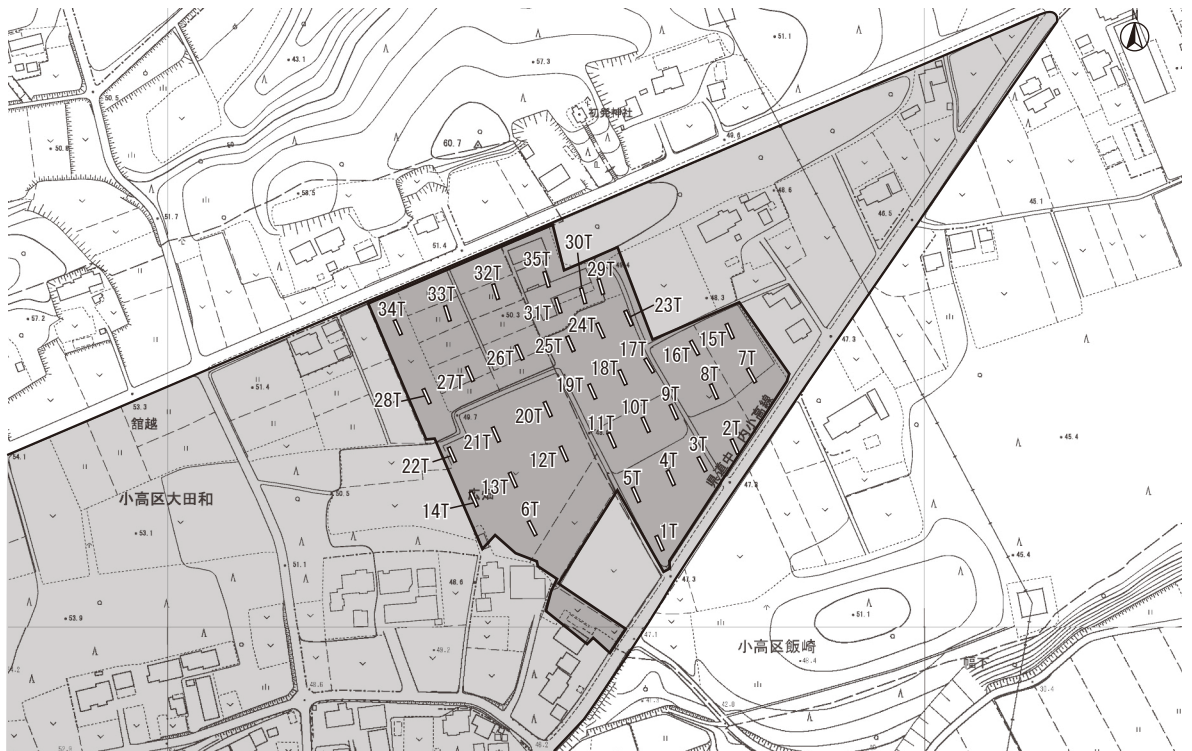


図75 調査区位置図

0 (S=1/5000) 100m



写真 139 調査前状況



写真 140 重機作業状況



写真 141 2 T 調査状況



写真 142 11 T 調査状況



写真 143 13 T 調査状況



写真 144 29 T 調査状況



写真 145 30 T 調査状況



写真 146 35 T 調査状況

第27項 巢掛場遺跡（4次調査）

1. 調査原因 賃貸事業所建設
2. 調査地点 南相馬市原町区
萱浜字巢掛場地内
3. 調査期間 平成30年3月20日
～平成30年3月22日
4. 調査対象面積 4,479m²
5. 調査面積 80m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江



図 76 巢掛場遺跡位置図

0 (S=1/25000) 500m

7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発予定地内に、幅2m×長さ10mの調査区を4箇所を設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。各調査区ともに現地表面から55cm～95cmの深さで黄褐色土の基盤層が確認された。基盤層に達するまでの堆積土から遺構、遺物は確認されなかった。
8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しない。このことから改めて保存協議を行う必要はないが、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。

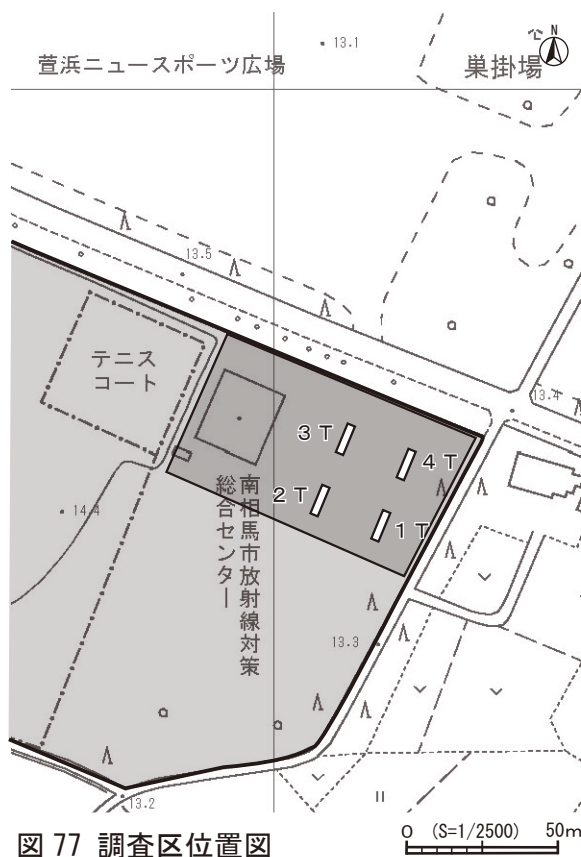


図 77 調査区位置図

0 (S=1/2500) 50m



写真 147 1 T 調査状況



写真 148 2 T 調査状況

第28項 大悲山遺跡（1次調査）

1. 調査原因 農業用倉庫、車庫建設
2. 調査地点 南相馬市小高区
泉沢字前田地内
3. 調査期間 平成30年3月18日
4. 調査対象面積 72.6㎡
5. 調査面積 4㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江

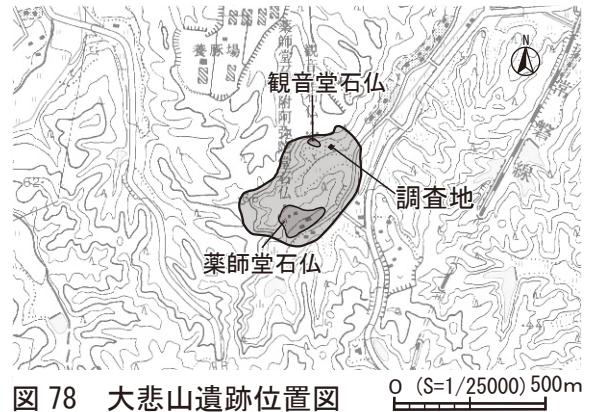


図 78 大悲山遺跡位置図

7. 調査成果 今回の試掘調査区は、大悲山遺跡の包蔵地内に位置し、近隣には国指定史跡である薬師堂石仏や観音堂石仏が位置する。特に観音堂石仏とは隣接しており、石仏の東側平場に位置している。調査では、開発予定地内に幅1m×長さ2mの調査区を2箇所を設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。各調査区ともに現地表面から35cmの深さで凝灰質砂岩の基盤層が確認された。基盤層に達するまでの堆積土から遺構、遺物は確認されなかった。
8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しない。このことから改めて保存協議を行う必要はないが、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。

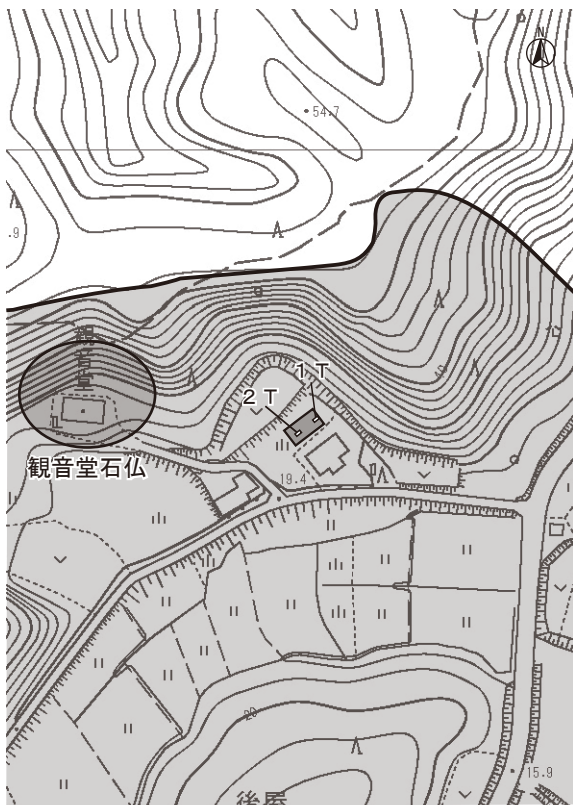


図 79 調査区位置図



写真 149 1 T 調査状況



写真 150 2 T 土層断面

第29項 大井花輪遺跡（2次調査）

1. 調査原因 太陽光発電施設建設
2. 調査地点 南相馬市小高区
大井字花輪地内
3. 調査期間 平成31年3月22日
4. 調査対象面積 410m²
5. 調査面積 20m²
6. 調査担当 主査 荒 淑人
7. 調査成果 これまでに、大井花輪遺跡では1回の試掘調査が実施されているが、遺跡の具体的な内容については明らかとなっていない。

今回、実施した2次調査は太陽光発電施設建設に伴う狭小な範囲における試掘調査であった。周囲には土師器・須恵器等の破片が散布しており、埋蔵文化財が確認される可能性が高いと示唆された。

試掘調査は、対象区域内に幅1m×長さ10mの調査区を2箇所を配して、埋蔵文化財の確認作業を行った。

調査の結果、表土に土器片が散布していた割に、出土遺物は少なく、土師器の小片が数点出土した程度であった。1 Tでは、現地表面から約70cmの地点で基盤層となる黄色ローム層に達した。このローム層は上面の風化が著しく、基盤層の残りは非常に不良であった。基盤層の上層には、L IIとした暗褐色土の耕作土が約50cmの厚さで堆積し、その上位には現在の表土となる碎石や建物基礎を含む層が確認された。

1 Tでは調査区東半部分で、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒を確認した。竪穴住居跡は遺構上端から床面までの深さは約10cmを計測し、床面には明瞭な貼床が施され、部分的に踏み締まりによる硬化部分が確認された。また調査区の北壁部分には炉と思われる焼土が集中した部分が確認されている。調査した範囲ではこの竪穴住居に伴う土器の出土は確認されなかったが、炉跡を伴う構造であることから、古墳時代中期前半以前の竪穴住居と考えると問題ない。

8. 調査所見 今回の試掘調査地点では、現地表面から深さ約70cmの深さで埋蔵文化財を確認した。確認した埋蔵文化財の状態と、今回の太陽光発電施設設置に伴う工事施工方法を比較すると、工事による埋蔵文化財への影響は最小限に届けられることが明らかであることから、工事施工に際しては慎重工事により実施されることが望ましい。

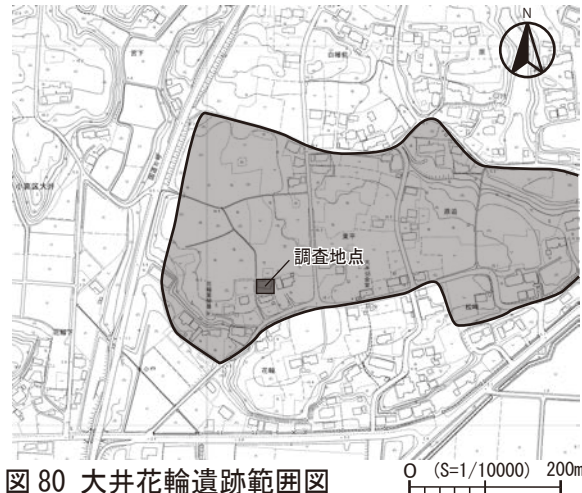


図80 大井花輪遺跡範囲図

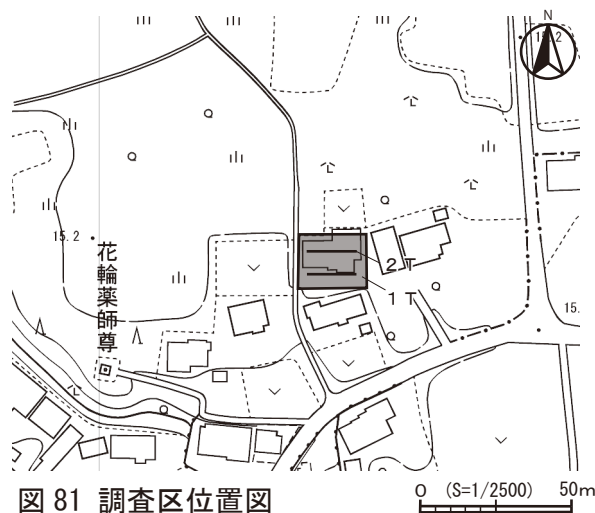


図81 調査区位置図

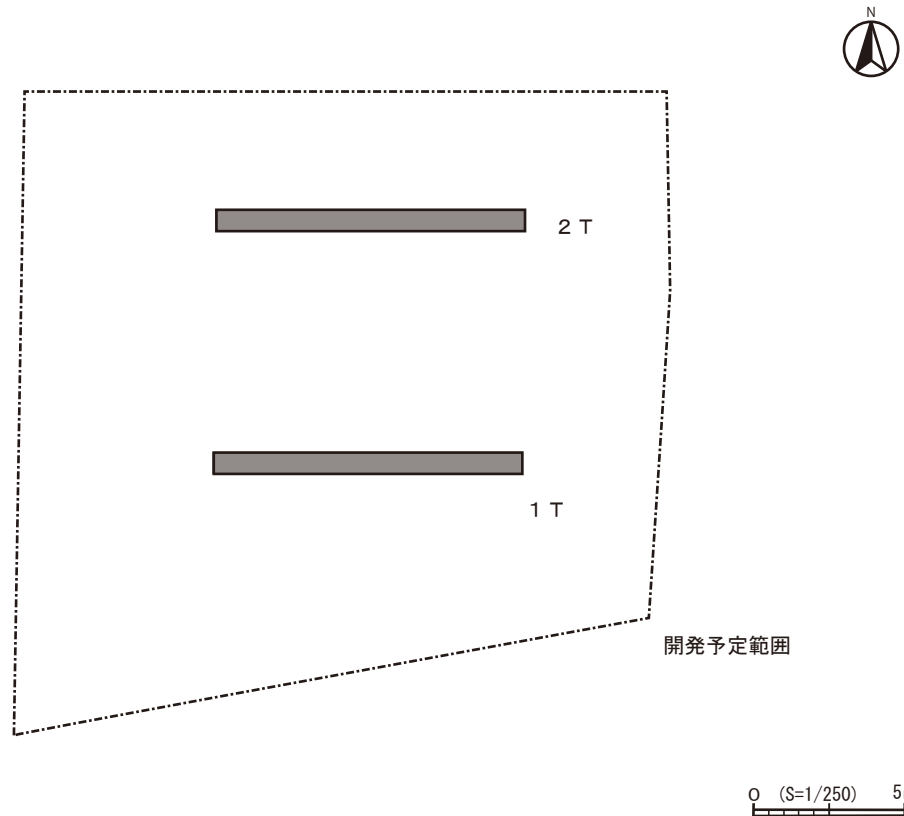


図 82 トレンチ配置図

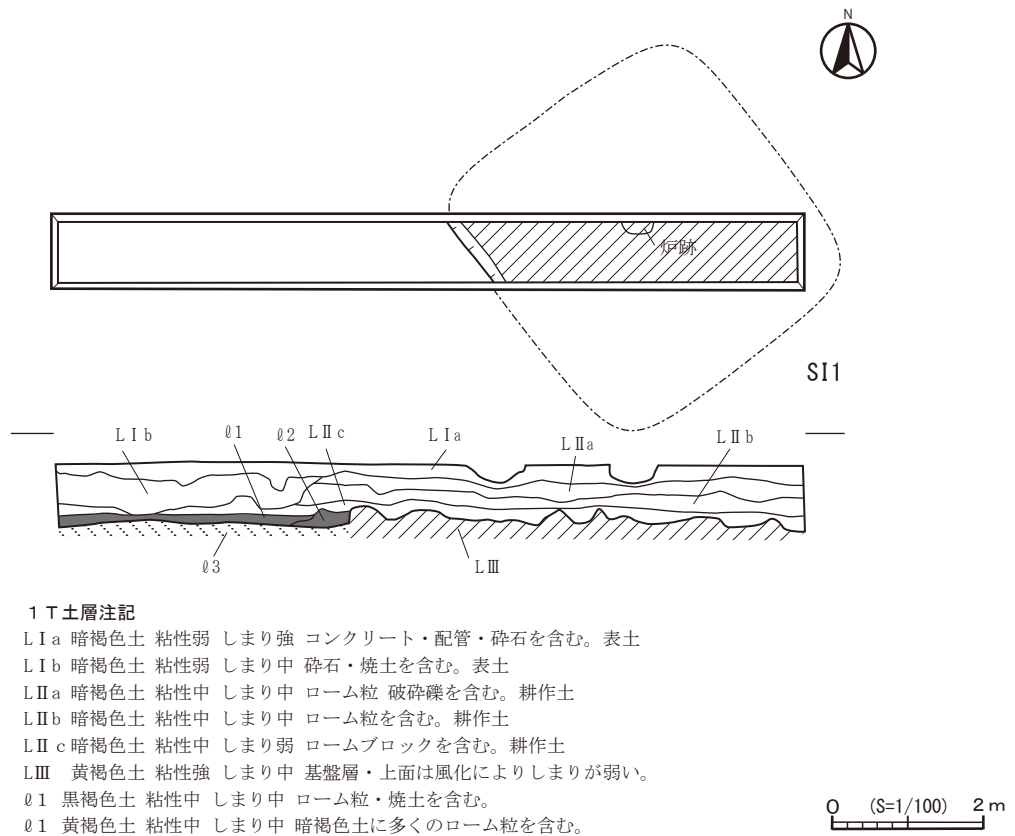


図 83 1 T 平面図・断面図



写真 151 調査着手前



写真 152 重機掘削状況



写真 153 1 T S I 1 全景



写真 154 1 T S I 1 確認状況・土層断面



写真 155 住居立ち上がりと炉跡



写真 156 2 T 全景



写真 157 2 T 土層断面



写真 158 埋め戻し作業終了状況

第30項 松ヶ沢A・松ヶ沢B・向畑遺跡（1次調査）【小木迫地区】

1. 調査原因 太陽光発電施設建設
2. 調査地点 南相馬市小高区小木迫字
向畑・松ヶ沢・五斗蒔
3. 調査期間 平成30年10月30日
～平成30年12月18日
4. 調査対象面積 176,872.1㎡
5. 調査面積 332.4㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 今回の調査は、大規模な太陽光発電設備建設計画により「松ヶ沢A遺跡」「松ヶ沢B遺跡」「向畑遺跡」の3つの製鉄関連の遺跡が開発範囲内に該当する試掘調査となった。調査では、開発範囲と遺跡包蔵地が重複している調査範囲内に調査区を114箇所設定し、廃滓場の範囲確認及びその他の製鉄関連遺構の有無の確認を行った。また、埋蔵文化財包蔵地が該当しない開発範囲については、過去に行われた表面調査において、高低差の大きい急傾斜が地形のほとんどを占めていることや遺構が確認されなかったことから調査区の設定は行わなかった。

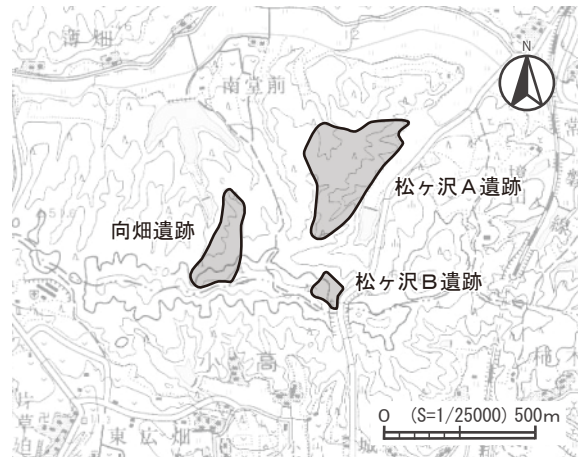


図84 小木迫地区遺跡位置図

【松ヶ沢B遺跡】

松ヶ沢B遺跡は、開発範囲の南東部に位置し、遺跡全体が開発範囲内に該当している。

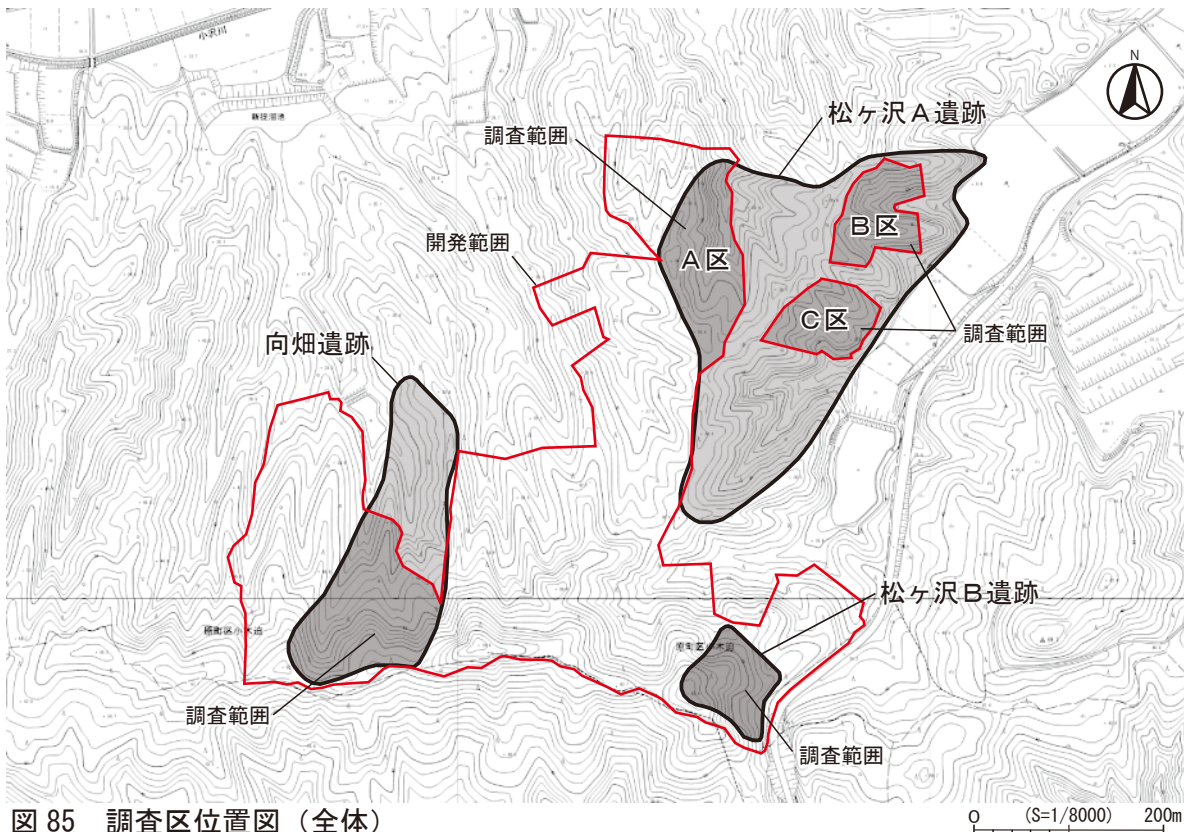


図 85 調査区位置図（全体）

表面調査では、範囲の南部に所在する東向きの谷に廃滓場1箇所（1号廃滓場）、北部の緩斜面にて木炭窯跡と考えられる窪地が確認されている。今回の調査では、廃滓場の範囲確認と木炭窯跡等の製鉄関連遺構の検出を目的に調査区を15箇所設定し、調査を行った。調査の結果、現地表面から約40cm～60cmの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層を検出した。1・14Tでは、多量の鉄滓を検出するとともに、表面調査で確認されていた1号廃滓場の南端を確認した。5・7・8Tでは、炭化物と焼土ブロックを多く含む黒色土が検出しており、斜面上方に楕円状の窪地が確認できることから木炭窯跡と判断

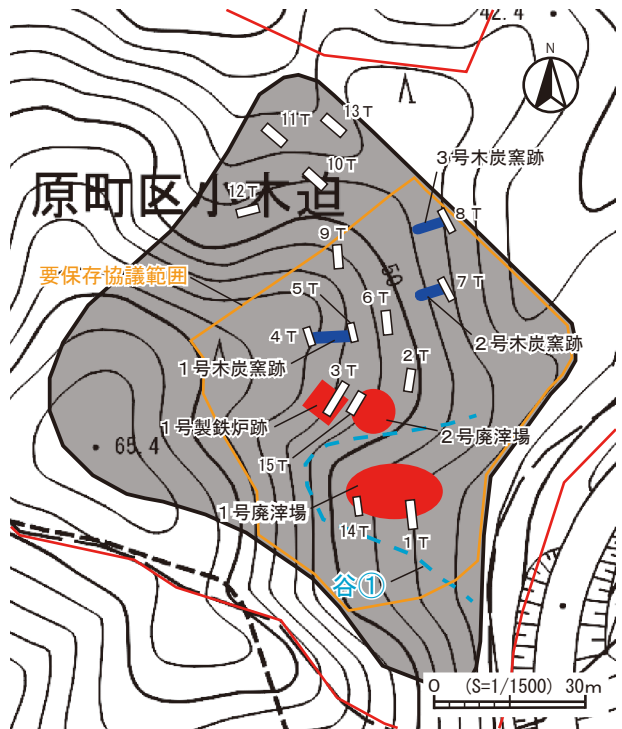


図86 調査区位置図（松ヶ沢B遺跡）

される。3Tでは、製鉄炉跡1基を検出した。検出時は、多量の焼土ブロックが確認できたことから、木炭窯跡の崩落した天井の可能性が考えられたが、遺構の縁に炉壁が確認され、斜面下方に設定した15Tにて新たに廃滓場（2号廃滓場）が確認されたことから製鉄炉跡と判断した。その他の調査区からは、遺構・遺物は確認されなかった。

【向畑遺跡】

向畑遺跡は、開発範囲の西部に位置し、北向き斜面に南北に伸びる規模の大きい谷が2本東西に並列して所在する。調査では、2本の谷（①・②）の頂部付近及び谷の間を通る尾根上で確認された緩斜面に調査区を41箇所設定した。調査の結果、現地表面から約40cm～90cmの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層を検出した。尾根上の緩斜面に設定した25Tでは、長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈する木炭焼成土坑を検出した。緩斜面は広範囲に及ぶことから住居跡の検出が想定されたが、その他の調査区からは遺構・遺物が確認されなかった。

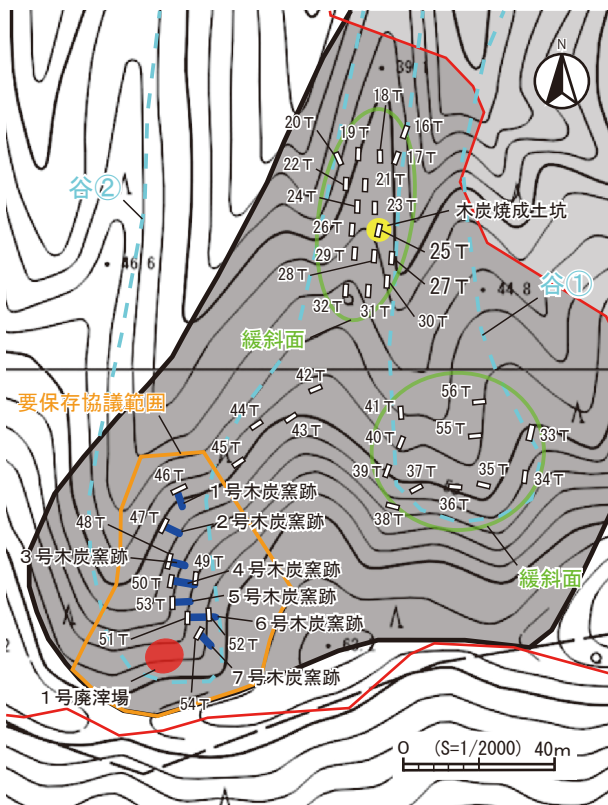


図87 調査区位置図（向畑遺跡）

東部の谷①では、頂部付近に前述した緩斜面が所在する。木炭窯跡の検出を想定したが調査区からは遺構・遺物は確認されなかった。西部の谷②では、谷の頂部に廃滓場1箇所、その西向き斜面に木炭窯跡と考えられる楕円状の窪地が並列する。窪地の周辺に設定した46～48・50・51・53・54Tでは、炭化物・焼土ブロックを含む黒色土を検出した。また、50と51Tの斜面上方に設定した49・52Tでは、木炭窯跡の崩落の可能性がある落ち込みが確認されている。

【松ヶ沢A遺跡(A区)】

松ヶ沢A遺跡は、開発範囲の北部に位置し、遺跡の西端部と東側の谷が開発範囲に該当する。今回の調査では、開発範囲が3箇所に分散しているため、西側の1箇所を「A区」、東側の2箇所を「B区」、「C区」として調査を行った。「A区」の地形は、南北に伸びる尾根の東向き斜面であり、そこに4つの東向きの谷(①・②・③・④)が所在する。表面調査の段階では、1～3号の廃滓場が確認されている。試掘調査では、谷の斜面を中心に調査区を29箇所設定し、廃滓場の範囲及び木炭窯跡等の関連遺構の確認を行った。調査の結果、現地表面から約40cm～80cmの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層を検出した。58・59・74～76・79・80・82・84Tでは、廃滓場の広がりとその末端が検出された。谷④においては、新たに4号廃滓場が確認されている。また、廃滓場の付近に設定していた57・81Tでは、炭化物を含んだ黒色土が検出されており、斜面上方に楕円状の窪地が確認できることから、木炭窯跡の可能性が高いと判断される。

【松ヶ沢A遺跡(B区)】

B区は、遺跡の東向き斜面の北部に設定された開発範囲である。地形は、東向きの規模の大きい2つの谷(①・②)が南北に並列する。東向き斜面の谷は、いずれも頂部から半ばにかけては緩やかな傾斜であるが、半ばから麓にかけてはV字状の急激に深い谷へと変化

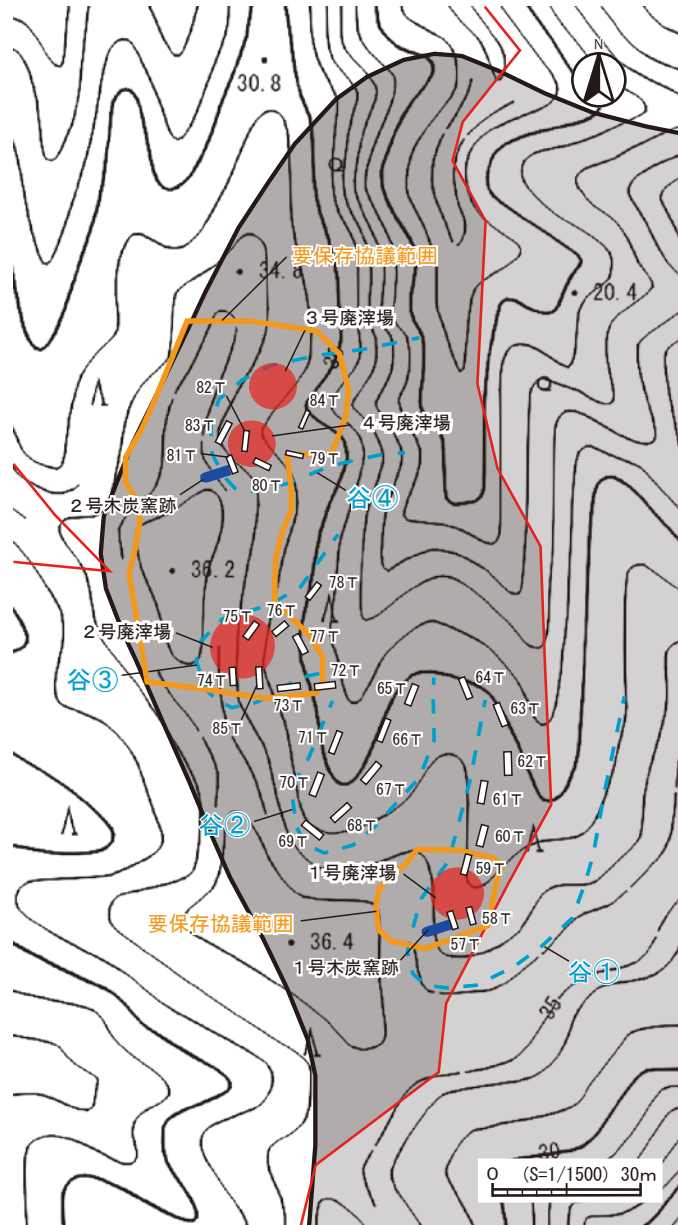


図88 調査区位置図(松ヶ沢A遺跡A区)

する。調査では、谷の斜面に調査区を21箇所設定し、廃滓場の範囲及び関連遺構の確認を行った。調査の結果、現地表面から約40cm～80cmの深さで基盤層と考えられる黄褐色土層を検出した。谷①では、89・90・93Tにて、黒色土の広がりが見出された。黒色土には、多量の炭化物が含まれていることから、木炭窯跡と考えられる。また、90Tの斜面下方では、小規模ながら廃滓場1基（5号廃滓場）が確認された。谷②では、95・97～106Tにて、多量の鉄滓が出土している。周辺の地形や鉄滓の分布状況から、6～12号の7箇所の廃滓場を確認した。廃滓場は谷②の南向き斜面を覆うようにして散布しており、範囲は南北約30m、東西

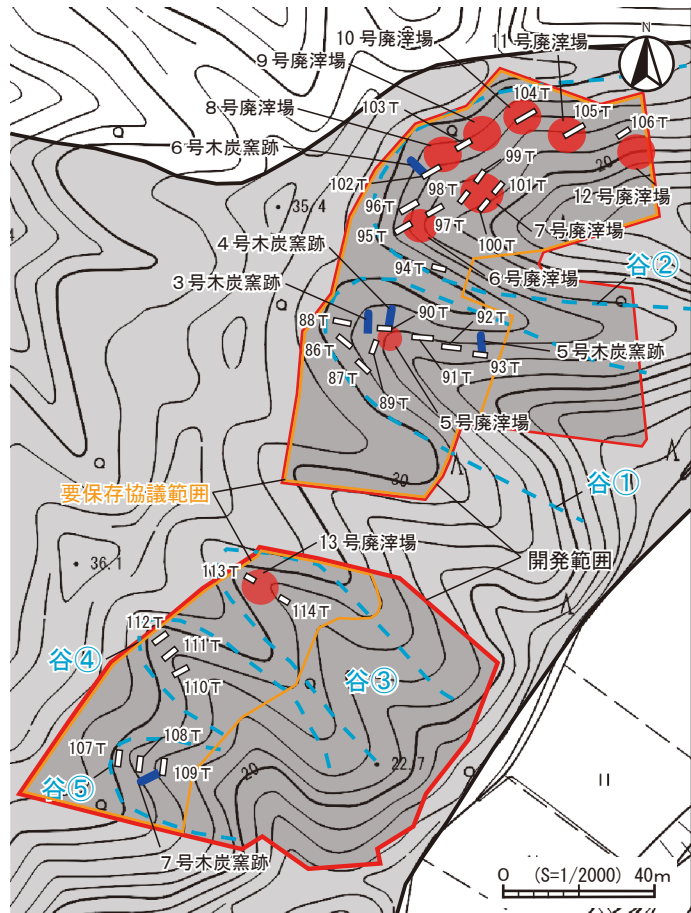


図89 調査区位置図（松ヶ沢A遺跡B・C区）

約90mを測り、全体の面積で表すと約2,700㎡に相当する規模である。また、102Tでは、廃滓場の一部に重複する形で炭化物を含む黒色土を検出しており、谷①と同様に廃滓場の付近で確認されていることから木炭窯跡の可能性が高いと推測される。

【松ヶ沢A遺跡（C区）】

C区は、遺跡の東向き斜面の南部に設定された開発範囲である。地形は、北部よりも谷の幅が狭く、北西に伸びる3つの谷（③・④・⑤）が並列する。調査では、谷の斜面に調査区を8箇所設定し、廃滓場の範囲及び関連遺構の確認を行った。谷③では、113・114Tにて廃滓場（13号廃滓場）を検出した。谷④では、他の谷と同様に廃滓場もしくは木炭窯跡の検出が想定されたが、遺構・遺物は確認されなかった。谷⑤では、109Tにて木炭窯跡と考えられる黒色土の広がりを検出した。

8. 調査所見 調査の結果、調査範囲内にて、製鉄に関連する廃滓場、木炭窯跡が多数確認された。今回行った調査により、遺跡の現状をより明確にするとともに、小高区の製鉄遺跡において、「池ノ沢遺跡」や「東迫遺跡」で見られる製鉄炉の周辺に木炭窯を構築する操業形態を小木埴地区でも確認するに至った。また、今回埋蔵文化財が確認された箇所において、開発行為を行う場合には事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



写真 159 1 T 調査状況



写真 160 1 T 廃滓場検出状況



写真 161 3 T 調査状況



写真 162 3 T 製鉄炉検出状況



写真 163 7 T 調査状況



写真 164 7 T 木炭窯跡検出状況



写真 165 8 T 調査状況



写真 166 8 T 木炭窯跡検出状況



写真 167 47 T 調査状況



写真 168 47 T 木炭窯跡検出状況



写真 169 50 T 調査状況



写真 170 50 T 木炭窯跡検出状況



写真 171 51 T 調査状況



写真 172 51 T 木炭窯跡検出状況



写真 173 52 T 調査状況



写真 174 52 T 木炭窯跡検出状況



写真 175 74 T 調査状況



写真 176 75 T 調査状況



写真 177 80 T 調査状況



写真 178 81 T 調査状況



写真 179 95 T 調査状況



写真 180 102 T 調査状況



写真 181 104 T 調査状況



写真 182 105 T 調査状況

第31項 原町区石神坂下地区

1. 調査原因 太陽光発電施設建設
2. 調査地点 南相馬市原町区石神字坂下
3. 調査期間 平成30年7月24日
4. 調査対象面積 1,206m²
5. 調査面積 10m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 開発予定地内に1m×10m

の調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約1.4mの深さで基盤層である礫層を確認した。基盤層より上層は盛土であり、ローム層等の自然堆積土が確認できないことや周辺の地形の状況から過去の造成により削平されていると考えられる。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかった。このことから改めた発掘調査を行う必要はなく、慎重工事による対応が望ましい。

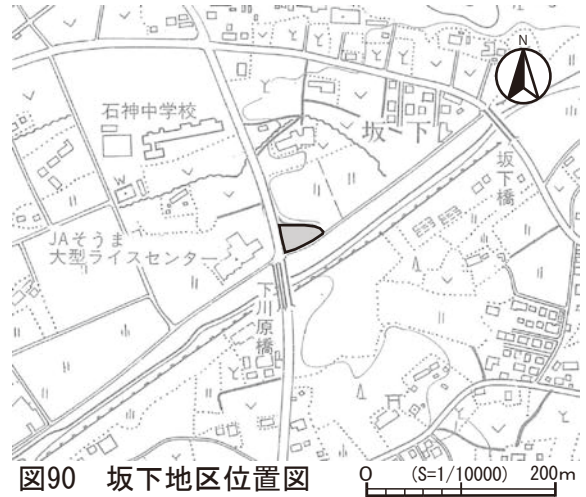


図90 坂下地区位置図

0 (S=1/10000) 200m

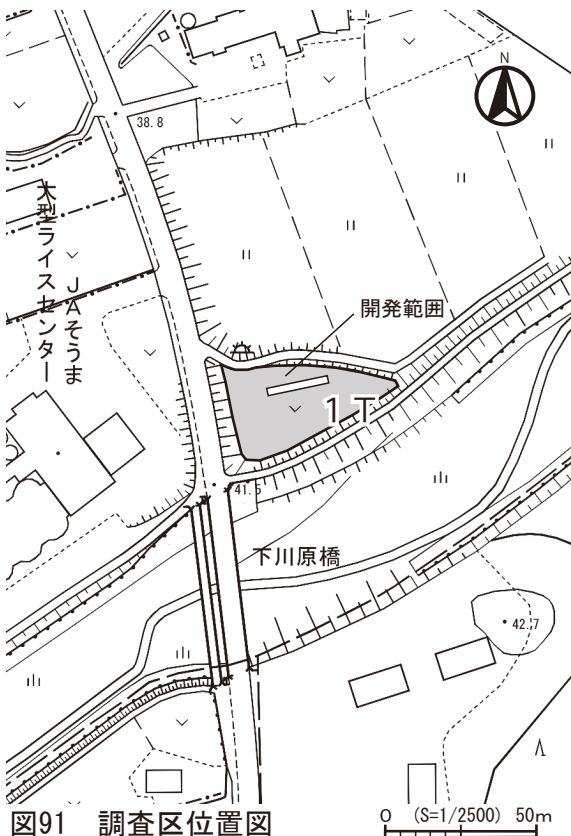


図91 調査区位置図

0 (S=1/2500) 50m



写真 183 調査前状況



写真 184 1 T 調査状況

第32項 上根沢大久保地区（1次調査）

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 南相馬市小高区
上根沢大久保地区
3. 調査期間 平成30年10月5日
～平成30年10月25日
4. 調査対象面積 14,039㎡
5. 調査面積 56㎡
6. 調査担当 主査 林 紘太郎

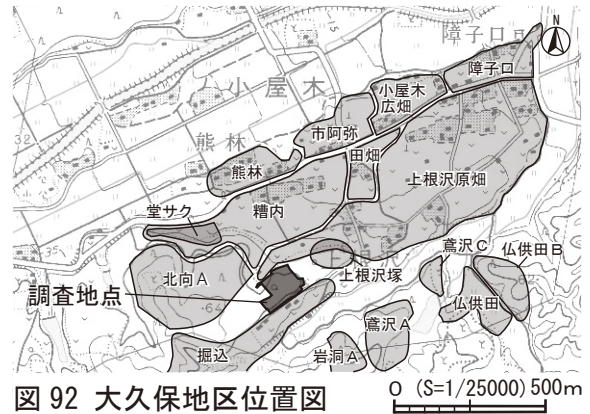


図 92 大久保地区位置図

7. 調査成果 今回の試掘調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地外における開発計画であったが、隣接地に掘込遺跡、北向A遺跡、上根沢原畑遺跡など多くの遺跡が所在していることに加え、これまでの現地踏査で塚状遺構の存在が確認されていたことから、試掘調査を実施した。

開発予定地内に34箇所の調査区を設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。本開発予定地の丘陵平坦面ならびに北西向きに設置したグリッド状調査区（13～32T）では30cm～80cmの深さで基盤層の黄褐色砂質シルトを確認した。基盤層を確認するまでの堆積土からは遺構、遺物ともに確認されなかった。南東向きに設置したグリッド状調査区（1～12T）では、15cm～50cmの深さで基盤層となる黄褐色砂質シルトを確認した。基盤層を確認するまでの堆積土からは遺構、遺物ともに確認されなかった。

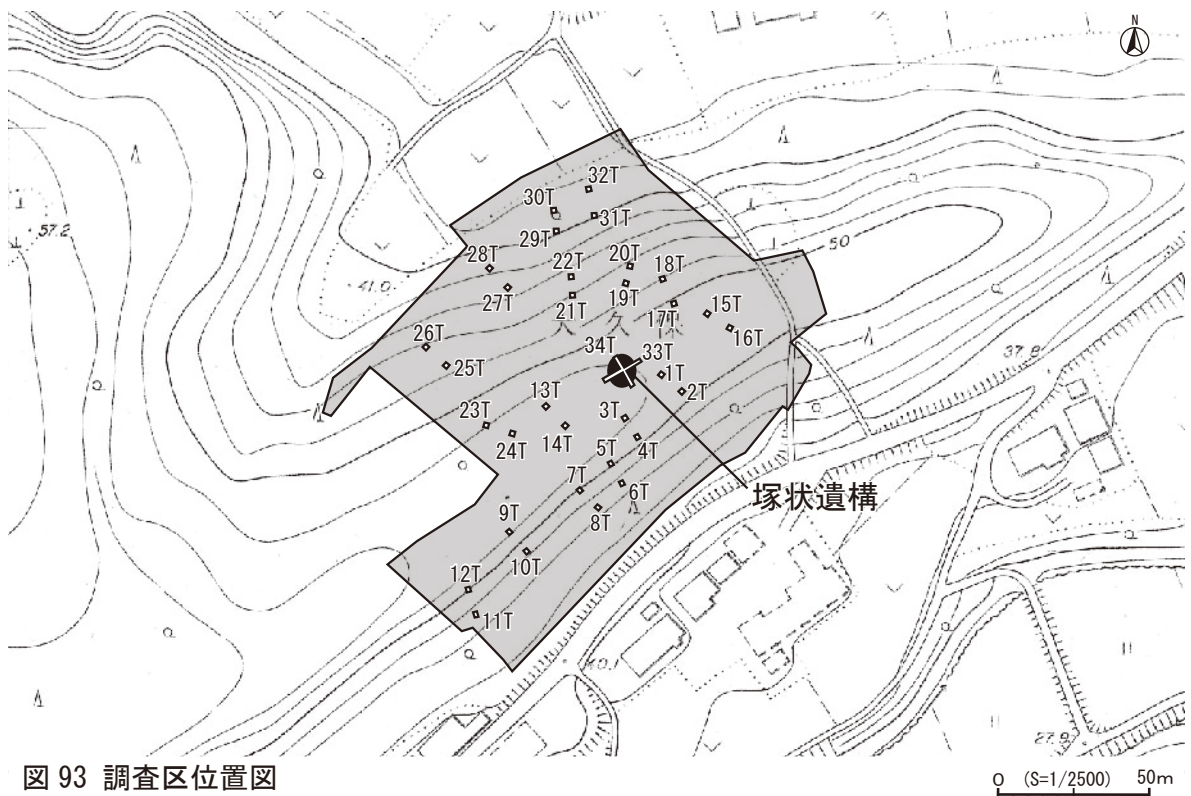
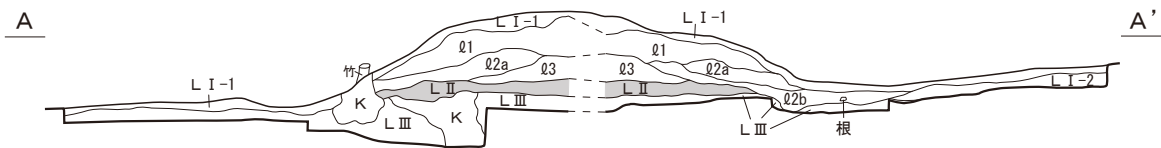


図 93 調査区位置図

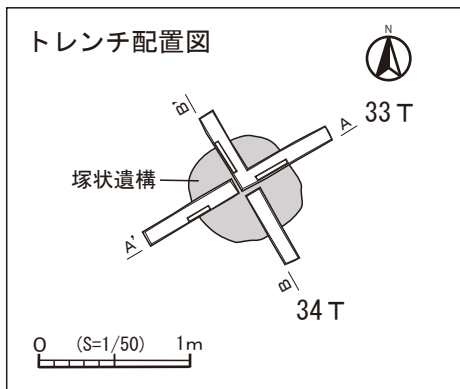
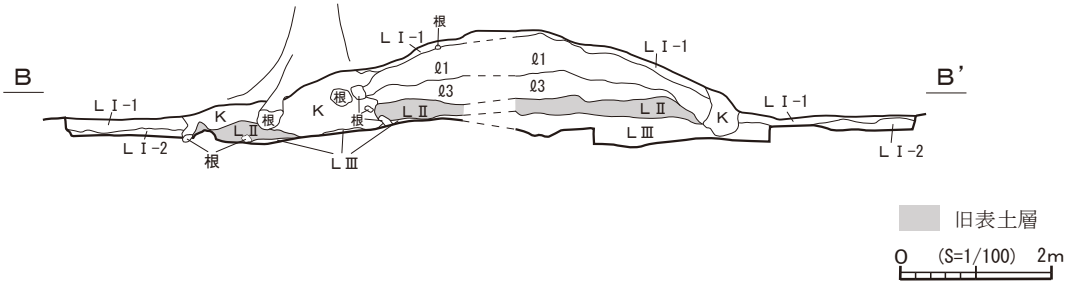
本開発予定地の中央平坦部に位置する塚状遺構（直径 8 m×高さ 1.2 m）に幅 1 m の調査区（33・34 T）を塚状遺構に対して十字状に設置した。堆積土を確認したところ、暗褐色砂質シルト（Q3）中に基盤層（L III）由来のブロック状黄褐色砂質シルト（5 cm～こぶし大）が全体に混在していることから、人為的な積土であることが確認された。塚状遺構の周囲には、周溝は確認されていない。また、この積土からは遺物は確認されなかった。積土の下層には旧表土と考えられる水平に堆積する黒色砂質シルト（L II）が確認された。L II からは縄文土器片が少量確認されたが、L II を除去して基盤層（L III）を確認する過程で縄文時代の遺構は確認されなかった。堆積土の状況と全体の調査結果から、この塚状遺構は人為的な構築と判断できるが、年代及び性格ともに不明であり、改めた詳細な調査は不要と考えられる。

8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認されなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しないと考える。このことから改めた保存協議や発掘調査の必要はないものと判断される。

33 T



34 T



33 T・34 T (A-A'・B-B') 堆積土

- L I-1 表土。
- L I-2 暗褐色（10YR3/3）砂質シルト。縮まりは弱い。積土の崩落土と考える。
- L II 黒褐色（10YR2/3）砂質シルト。縮まりはやや弱い。旧表土と判断。
- L III 黄褐色（10YR5/6）砂質シルト。縮まりはやや強い。基盤層と判断。

塚状遺構 堆積土

- Q1 褐色（10YR4/6）砂質シルト。竹の根によるカクランの影響もあり縮まりは非常に弱い。
- Q2a 褐色（10YR4/6）砂質シルト。縮まりは弱い。
- Q2b にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト。縮まりは弱い。暗褐色土塊（1～3 cm）少量混じる。
- Q3 暗褐色（10YR3/3）砂質シルト。縮まりはやや強い。拳大の黄褐色土塊が全体に混じる。

図 94 塚状遺構土層断面図



写真 185 塚状遺構 調査前状況



写真 186 塚状遺構 人力掘削作業状況



写真 187 33 T 調査状況 (北東)



写真 188 34 T 調査状況 (北西)



写真 189 塚状遺構 土層断面 (南西)



写真 190 16 T 調査状況



写真 191 21 T 調査状況



写真 192 27 T 調査状況

第33項 小高区金谷若林地区

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 南相馬市小高区金谷字若林
3. 調査期間 平成30年10月25日
4. 調査対象面積 243㎡
5. 調査面積 4㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 今回調査は、表面調査の段

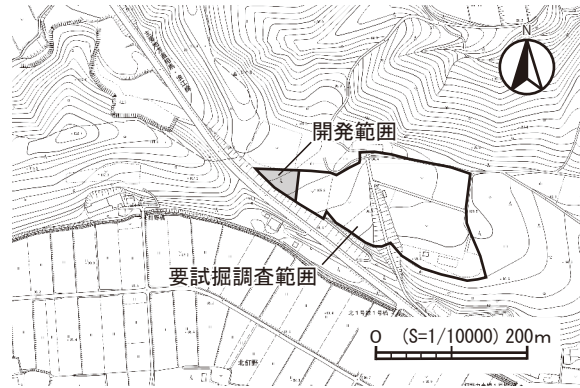


図95 金谷若林地区位置図

階で縄文土器の散布が確認された要試掘調査範囲の西端が開発予定地に該当することから、開発予定地内に1m角の調査区を4箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

調査の結果、現地表面から約10cmの深さで黄褐色土の基盤層を確認した。周辺に縄文土器の散布が確認されていたため集落が広がる可能性が考えられたが、調査区内からは遺構・遺物は確認されなかった。また、周辺の地形と表土直下にて基盤層が確認され、周辺の地形も掘削した形跡が認められることから、人為的な造成が行われたと考えられる。

8. 調査所見 調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応とする。

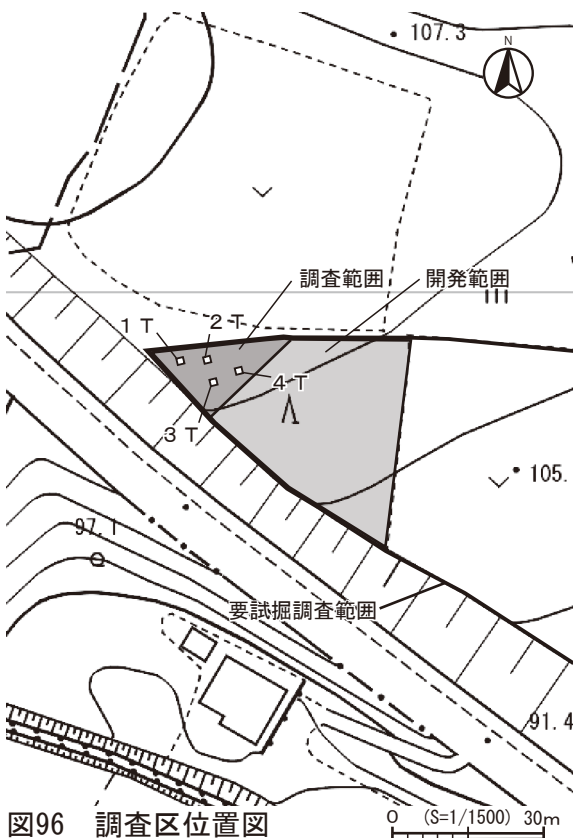


図96 調査区位置図



写真193 調査前状況



写真194 4-T調査状況

第2節 平成29年度試掘調査成果

第1項 小高城跡（4次調査）

1. 調査原因 社務所改築計画策定
2. 調査地点 南相馬市小高区
小高字古城地内
3. 調査期間 平成29年3月13日～
平成29年5月30日
4. 調査対象面積 8,000㎡
5. 調査面積 68.0㎡
6. 調査担当主 査林 紘太郎
埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
7. 調査内容

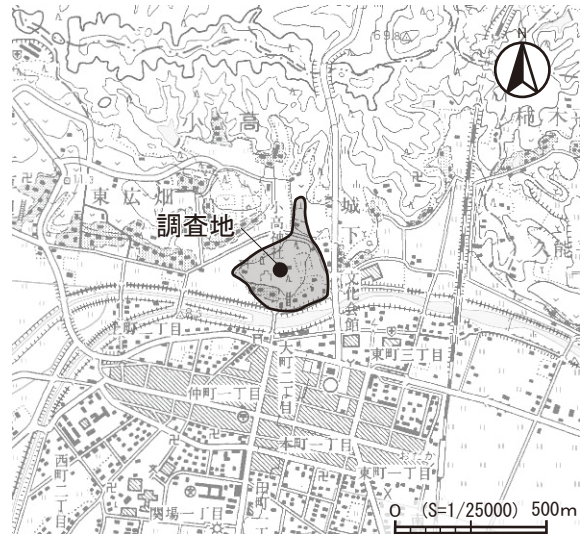


図97 小高城跡位置図

(1) これまでの調査

小高城跡は、元亨3年（1323年）に下総国から下向した相馬氏により、建武3年（1336年）に築かれた居城跡として知られている。本城跡は、相馬氏が中村城（現在の相馬市）に移住するまでの約280年もの間、相馬・双葉地域の統治の本拠地として機能していた。本城跡は、本丸、二ノ丸、土塁、空堀、水堀等により構成されている。現在、本丸の範囲には、相馬小高神社が鎮座しており、国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の野馬懸の舞台として知られている。また、本丸を含む範囲が県指定史跡に登録されている。

発掘調査は、過去3回実施されており、いずれも試掘調査である。調査では、数多くの柱穴が検出されていることに加え、中近世の陶磁器、瓦が出土している。平成22年度に行われた調査は、相馬小高神社の本殿西側において実施されており、絵馬殿西側の遺構と本丸北側の土塁の分布範囲を確認した。調査では、絵馬殿西側に多数の柱跡が検出され、小

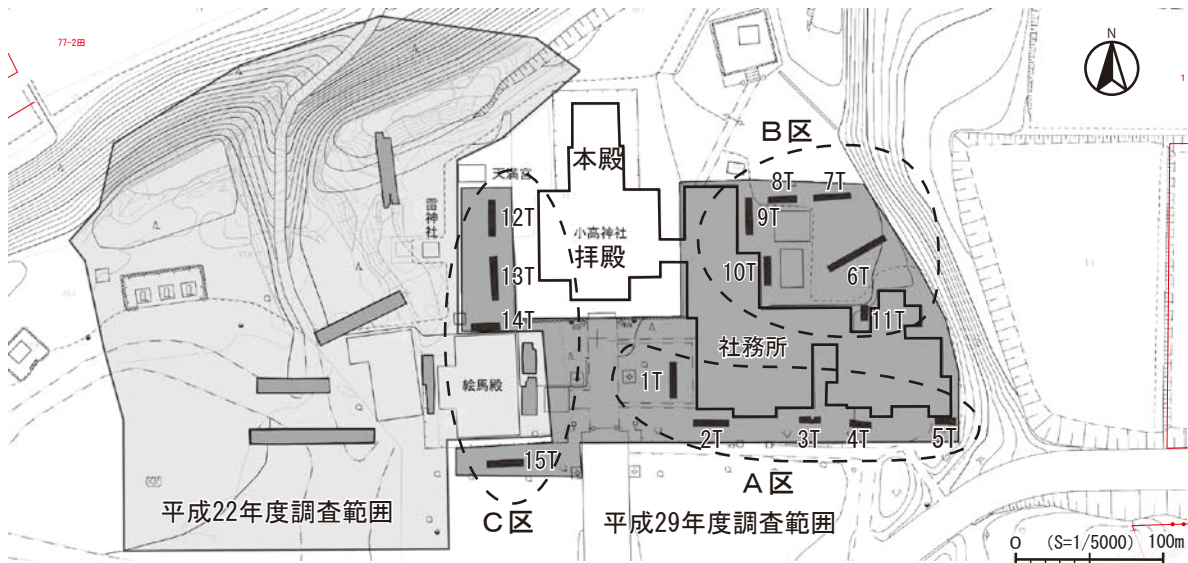


図98 調査区位置図

高城の主要な建物が継続的に配置されていた可能性が指摘されている。また、柱跡や土塁の堆積層からは、まとまった焼土や炭化物が検出されたり、激しく被熱した14世紀後半から15世紀前半の陶磁器等が出土していることから、この時期に建物火災が発生していたことが明らかとなった。出土遺物は、主に13世紀から16世紀までのかわらけや国産陶磁器等が多数見られ、中には舶載陶磁器などの威信財も含まれていた。戦国大名として君臨する相馬氏の居城跡としての由来を強固なものとする成果であった。

（2）今回の調査

今回の調査は、社務所改築計画を策定するにあたり、社務所及び絵馬殿周辺の埋蔵文化財の分布状況を確認するものである。図98は、今回の調査区の配置状況であり、社務所の改築や移転による埋蔵文化財の適切な保存手段を検討するため、既存建物の周囲に調査区を15箇所（1～15T）設定し、社務所南側地区をA地区（1～5T）、社務所東側地区をB区（6～11T）、社殿南西地区をC地区（12～15T）とした。以下、各区の調査結果を記述する。

A地区（1T～5T）

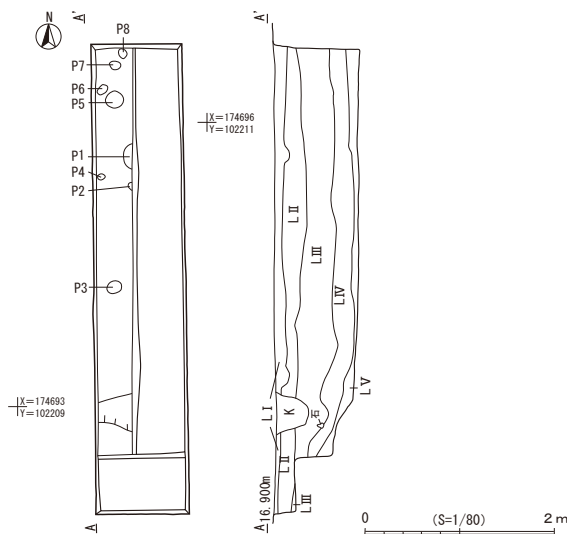
1T（図99・106、写真195・196）

【規模と基本土層】南北方向を長軸とする調査区（5m×1m）である。基本土層は5層に分けられ、LⅠを表土、LⅡ～Ⅳは黄褐色土塊等を含む人為堆積層、LⅤを地山と判断した。人為堆積層のうち、LⅢとLⅣの層境に表土化した痕跡はなく、短期間に埋められたものと考えられる。LⅡは黒褐色粘質シルト層であり、層全体に黄褐色土塊や焼土粒・塊を含む人為的な堆積層である。調査区の底面は、南端から中央付近に向かって、地山が一旦、不自然に落ち込み平坦面に戻る。この地山の落ち込みはLⅢ・Ⅳによって人為的に埋められており、何らかの土木作業の痕跡である可能性が高い。

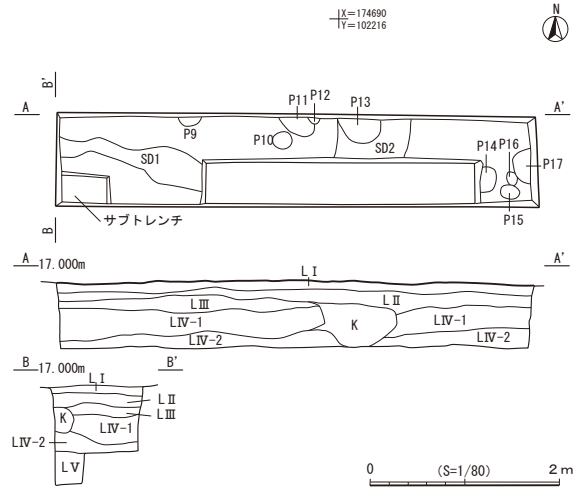
【遺構・遺物】遺構は、LⅥ上面よりピットを8基確認したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。遺物は、LⅠ、LⅣから出土した。LⅠは近代以降の整地層であり、コンクリート材による瓦や礫が多く出土しているが、16世紀代に位置づけられるかわらけ（図106-1）や、瓷器系の甕片（図106-2）も混入していた。LⅣからは在地産の播鉢体部片（図106-3）、角形火鉢の口縁部片（図106-4）が出土している。いずれも表面に燻された痕跡が観察できるものの、後に被熱したためか、外面の燻の痕跡は殆ど消失していた。年代は15世紀から16世紀と考えられる。他の遺物が確認されていないことから、LⅣの堆積時期の上限を示すものであろう。

2T（図99・106、写真197）

【規模と基本土層】東西方向を長軸とする調査区（5m×1m）である。基本土層は5層に大別でき、LⅠを表土、LⅡ～Ⅳを人為堆積層、LⅤは地山である。LⅢは、暗褐色を呈し、面的な広がりをもつことから、表土として機能した可能性がある。



- 1 T (A-A') 堆積層**
- L I-1 表土。上位に砂利、下位に山砂が堆積している。
 - L II 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。黄褐色土や焼土の土塊(1-3cm)、炭化物を含む。人為堆積層と判断した。
 - L III にぶい黄褐色(10YR6/4)粘質シルト。層全体的に黄褐色や黒褐色の土塊(1-3cm)や炭化物を含む。人為堆積層と判断した。
 - L IV にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト。層全体的に黄褐色や灰白色の土塊(3-5cm)を含む。人為堆積層と判断した。
 - L V 明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト。地山。上面から遺構を確認。



- 2 T (A-A') 堆積層**
- L I 表土。砂利敷き
 - L II にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト。縮りが非常に強い。層全体に褐色や灰白の土塊を含む。人為堆積層と判断した。
 - L III 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。縮り有。褐色土塊、炭化物を含む。層厚が薄く、面的に広がることから一時期表土化した層と判断した。
 - L IV-1 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト。縮り有。褐色や灰白色の土塊を多く含む。人為堆積層と判断した。
 - L IV-2 にぶい黄褐色(10YR6/3)粘質シルト。縮り有。黄褐色土の粒や塊を多く含む。人為堆積層と判断した。
 - L V 明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト。縮り有。遺構確認面。地山。

図 99 1・2 T 平面図・断面図

【遺構・遺物】遺構は、L V 上面より、溝跡2条(SD1・2)、ピット9基(P9-17)を確認した。各ピットとも柱痕跡は確認できなかった。遺物は、L II~IVより土師器や火鉢、瓦片が出土しているが、いずれも細片のため、図示することができなかった。

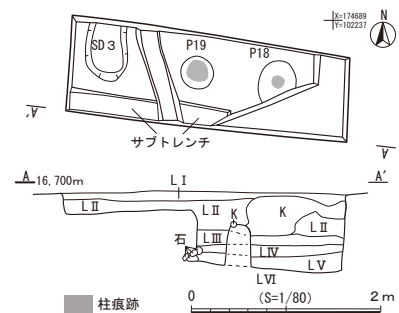
その中でも、L IVから出土した丸瓦片(図106-5)は、比較的残部が多くあり、凹面の布目痕や外面の燻を観察することができた遺物である。年代は破片資料であるが、中世末~江戸初期と判断したい。

遺構から出土した遺物は、P14の覆土から瓦質の脚付香炉(図106-6)を確認した。器面は燻されているが、表面は被熱により激しく損傷していた。年代は、15世紀から16世紀に位置づけられる。

4 T (図100、写真199・200)

【規模と基本土層】東西方向に長軸を持つ調査区(3m×1m)である。基本土層は5層に大別でき、L Iを表土、L II~Vまでが人為堆積層、L VIを地山であった。人為堆積層のうち、L IIIのみ浅黄褐色の均質な粒子の層であった。埋土を選別した可能性が考えられよう。

【遺構・遺物】L II 上面から溝跡1条(SD3)、L III 上面より柱痕跡を持つ柱穴2基(P18・19)を確認した。各遺構とも遺物は出土していない。L Vより土師器片



- 4 T (A-A') 堆積層**
- L I 表土。
 - L II 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。縮り有。黄褐色・にぶい黄褐色の土塊(2-3cm)が層全体に分布。人為堆積層と判断。
 - L III 浅黄褐色(10YR8/3)粘質シルト。縮り有。含有物が少なく均質な層。人為堆積層と判断。
 - L IV にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト。縮り有。黄褐色土塊(2-3cm)を含む。人為堆積層と判断。
 - L V 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。縮り有。黄褐色土塊(1-2cm)と炭化物を含む。人為堆積層と判断。
 - L VI 黄褐色(10YR5/6)粘質シルト。地山。

図 100 4 T 平面図・断面図

が出土したが、細片のため器種、年代は不明である。

3 T・5 T（写真198・201）

【規模】 3 Tと5 T（共に3 m×1 m）は東西方向に長軸を持つ調査区である。表土を除去したところ、社務所建設時の配管工事等の攪乱を確認したため、写真掲載のみに留める。

A地区まとめ

A地区の調査の成果によって、表土の下には人為堆積層が面的に広がっており、整地を実施した痕跡として判断できよう。地山の人為的な掘削も見られ、整地前に何らかの土木事業が行われた可能性も指摘できる。また、人為堆積層は、複数層あり、時間幅を有して堆積した様相も見られることから、整地は、複数回行われていたことを推定できよう。これらの層の年代であるが、人為堆積層から出土した遺物より、15世紀から16世紀を上限とする時期に求められよう。

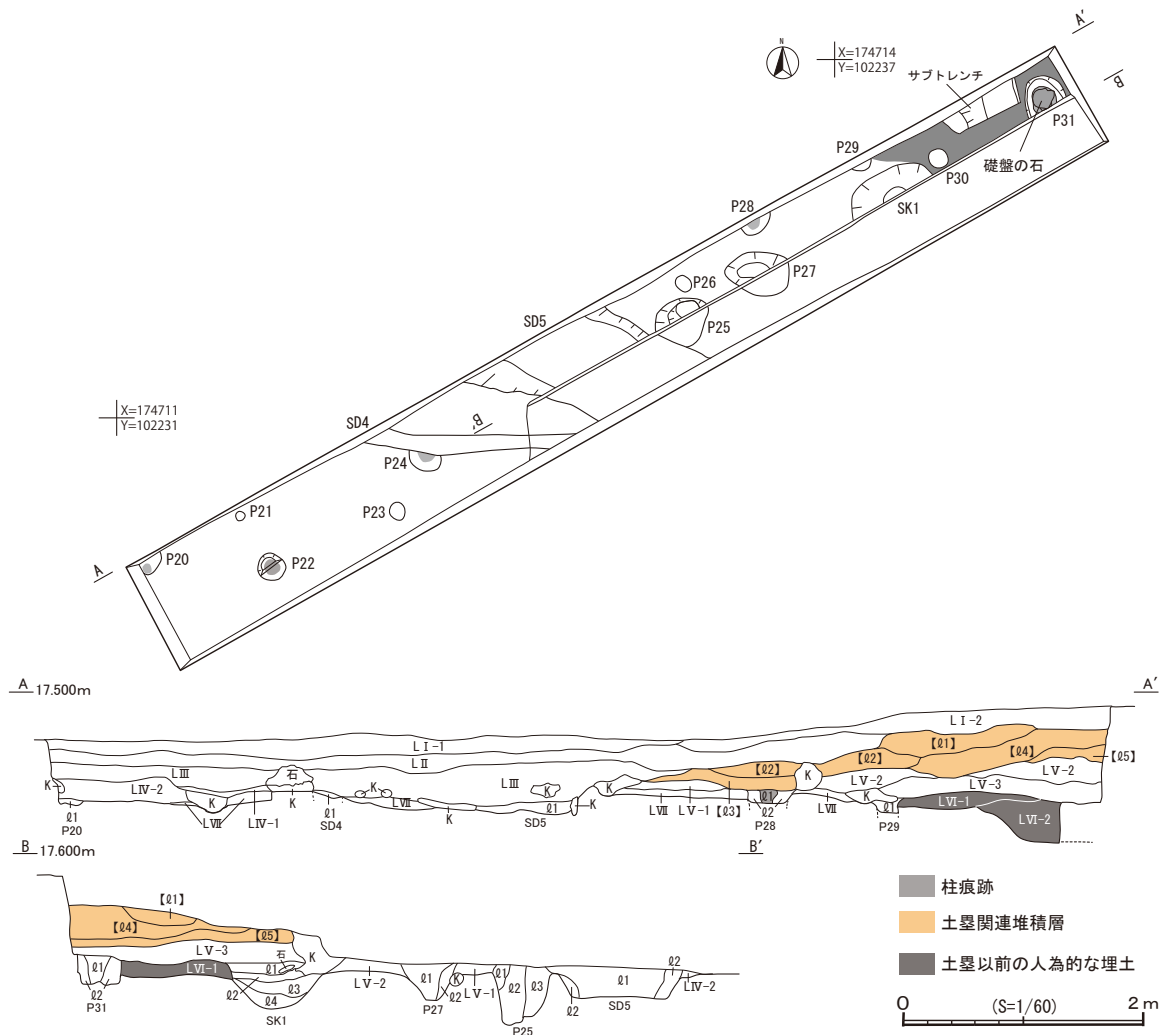
B地区（6 T～11 T）

6 T（図101・106、写真203～206）

【規模と基本土層】 北東方向に長軸を持つ調査区（9 m×1 m）である。本調査区の東端付近には、本丸を取り囲む土塁が築造されていた推定範囲である。本調査区はその存在を確認する目的も含め設定したものである。基本土層は7層に大別した。L Iは表土、L II・IIIは瓦礫を含む近年の人為堆積層、L IVは黄褐色土塊や焼土、炭化物を含む層であり、人為堆積層と判断した。L Vは、土塁築造される以前の旧表土層である。L VIは、調査区東端に確認した、L V堆積以前の人為堆積層である。ただし、本層の確認範囲は非常に狭小であることから、何らかの遺構の堆積層の可能性もあろう。L VIIは地山と判断した。

【遺構】 土塁に関連する堆積層はL I-2、L IIを除去したところで確認された。堆積層は5層からなる。φ1～3は締りが弱く、東側から流れ込む状況が確認できた。黄褐色や灰白色の土粒も多く含み、土塁の積土が崩れて堆積した層として判断した。また、堆積層の状況から、φ4の上部は削平を受けていることから、本来は現標高より高い土塁が築かれていたことが想定できよう。

調査区内の遺構確認面は3面存在する。L V上面よりピット2基（P25・27）、溝跡2条（SD4・5）、L VI上面より土坑1基（SK1）、ピット3基（P29-31）、L VII上面よりピット7基（P20-24・26・28）が確認された。L V上面より確認した溝跡のうち、SD5は土塁と並走するように確認されており、土塁との関連性が伺える。覆土からは、土師器の細片や椀型の鉄滓が出土しているが、遺構の年代や性格を示すものはなかった。また、同層上面に確認されたP25・27は、柱を抜き取った痕跡を断面により見ることができたため、柱穴と判断した。L VI上面に確認されたSK1は4層からなり、レンズ状の堆積状況を示す。堆積層は、非常に強く締まっており、やや潰れた褐色土塊及び白色粘土塊を観察することができることから、人為的に押し固められた版築の痕跡であると判断した。この場所に柱等を据えていた可能性が指摘できよう。同層上面に確認されたP29・30は、柱痕跡を有す



6 T (A-A' B-B') 堆積層

- L I-1 表土。拳大の礫が多数検出し、ガラス片等が出土。
- L I-2 表土。陶磁器片・ガラス片等が出土。
- L II にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト。明黄褐色土塊(1cm)を含む。礫や陶器片を確認。
- L III 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。層全体から近年の建築資材が出土。
- L IV-1 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト。縮り有。黄褐色土塊(2cm)を含む。
- L IV-2 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト。縮り有。焼土粒や炭化物を含む。
- L V-1 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。焼土粒、炭化物(2cm)、黄褐色土塊(1-2cm)を含む。土壘築造以前の表土と判断。
- L V-2 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。縮り有。炭化物、焼土、黄褐色土粒を含む。土壘築造以前の表土と判断。
- L V-3 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト。縮り有。炭化物や焼土の粒を含む。
- L VI-1 褐色(10YR4/6)粘質シルト。縮り有。褐灰色土・黄橙色土塊(3cm)を含む。人為堆積層と判断。
- L VI-2 褐色(10YR4/6)粘質シルト。縮り有。L VI-1と同様の塊を多く含む。人為堆積層と判断。
- L VII 黄褐色(10YR5/6)粘質シルト。地山。

6 T (A-A' B-B')-土壘関連堆積層 (【】付き)

- 01 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。縮り有。礫が多い。積土の崩壊土層。
- 02 黄褐色(10YR5/6)粘質シルト。縮り有。黄褐色土粒を含む。積土の崩壊層。
- 03 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。縮り有。灰白色土・炭化物の粒を含む。土壘積土の崩壊層。
- 04 明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト。強い縮り有。黄褐色土・白色粘土塊(1-3cm)を多く含む。積土と判断。
- 05 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト。強い縮り有。焼土粒や炭化物粒を含む。

6 T (A-A')-P20堆積層

- 01 褐色(10YR4/4)粘質シルト。黄褐色土塊(3cm)を含む。

6 T (A-A')-P28堆積層

- 01 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。炭化物や黄褐色土塊(1cm)を含む。
- 02 明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト。黒褐色土塊(2cm)を含む。

6 T (A-A')-P29堆積層

- 01 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト。土壘以前の遺構。

6 T (A-A')-SD4堆積層

- 01 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。

6 T (A-A' B-B')-SD5堆積層

- 01 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。縮り有。
- 02 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト。縮り無。

6 T (B-B')-P25堆積層

- 01 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。縮り有。褐色土塊(1cm)を含む。
- 02 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト。縮り有。褐色土塊(1cm)を含む。
- 03 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。縮り有。褐色土塊(1cm)を含む。

6 T (B-B')-P27堆積層

- 01 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。縮り有。褐色土塊(1-3cm)を含む。
- 02 褐色(10YR4/4)粘質シルト。縮り有。黄褐色土塊(2cm)を含む。

6 T (B-B')-P31堆積層

- 01 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。縮り有。褐色土粒、炭化物粒を含む。
- 02 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。縮り有。褐色土塊(2cm)を含む。

6 T (B-B')-SK1堆積層

- 01 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。強い縮り有。褐色土塊(2cm)を含む。
- 02 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト。強い縮り有。白色粘土塊(1-2cm)を含む。
- 03 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。強い縮り有。炭化物(1cm)を含む。
- 04 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。強い縮り有。褐色土塊(3cm)を含む。

図 101 6 T 平面図・断面図

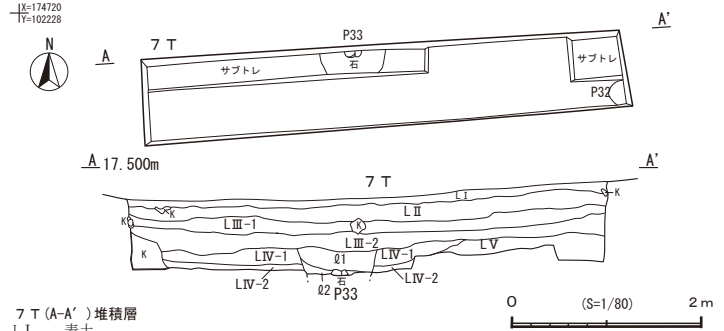
る柱穴であった。P31には、底面に柱の礎盤として利用した石が据えられていた。L VII 上面で確認した、P22・24・28にも柱痕跡を確認した。

【遺物】遺物は、L I からは出土しているが、ほとんどが細片であった。その中でも図106-7～10は図化し得た資料である。図106-7はかわらけの底部片である。回転糸切痕を有する。年代は12世紀前半～13世紀代に求められる。図106-8は瓷器系の壺肩部片である。外面に自然釉が見られるが、後世の被熱によって釉が滅失している。胎土から渥美産と推測される。年代は12世紀から13世紀に位置づけられる。

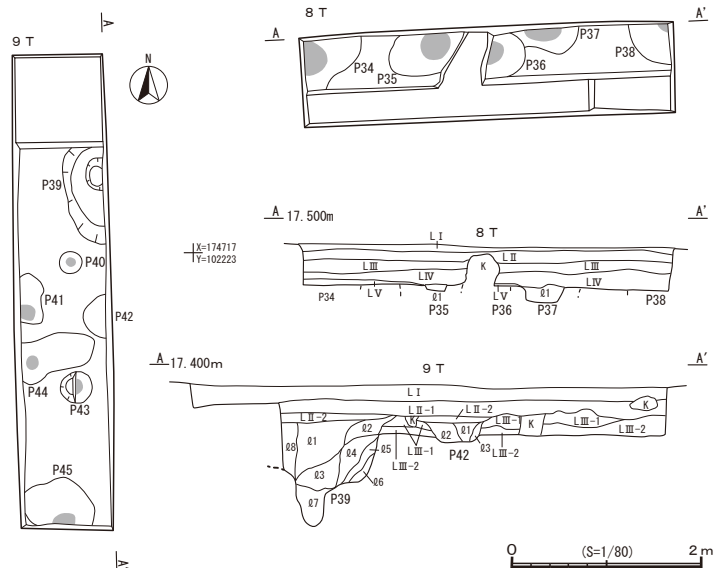
図106-9は瓦質土器の香炉体部片である。内面に細かい当具痕を残す。当初、燻による外面の加工がされていたと考えられるが、後世の被熱により滅失している。在地産と考えられ、15世紀から16世紀の所産のものであろう。図106-10は在地産の平瓦片である。年代の根拠は乏しいが、中世末～江戸初期に位置づけられるものであろう。

7 T (図102・106、写真207)

【規模と基本土層】東西方向に長軸を持つ調査区(5.2m



- 7 T (A-A') 堆積層
 L I 表土。
 L II 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。締りはやや強い。黄褐色土塊(1cm)を少量含む。
 L III-1 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト。締りは弱い。多く含む灰白色土塊(1-3cm)は土塁積土の崩壊土であり、焼土・炭化物が含まれる。人為堆積層と判断した。
 L III-2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト。締りは弱い。炭化物粒、浅黄褐色土・明黄褐色土塊(1cm程度)は土塁積土の崩壊土と考えられる。自然堆積層と判断した。
 L IV-1 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。締りがやや強い。黄褐色土塊(3cm)を多く含むことから土塁積土の流入層と判断した。
 L IV-2 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。締りがやや強い。黄褐色土塊(1-3cm)、炭化物粒、焼土粒を含む。土塁積土の崩壊土が含まれる層である。
 L V-1 黄褐色(10YR5/8)粘質シルト。締りが強い。地山と判断。
 7 T (A-A')-P33堆積層
 01 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。締りが強い。灰白色土粒と黄褐色土塊を少量含む。炭化物は多く含む。
 02 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。締りが強い。黄褐色土塊(1cm)、灰白色土・炭化物・焼土の粒を多く含む。



- 8 T (A-A') 堆積層
 L I 表土。
 L II 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。近現代の陶器片が出土する堆積層。
 L III 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。締りはやや強い。黄褐色土塊が多く、灰白色土粒や炭化物粒を少量含む。土塊が観察されないことから、自然堆積層と判断した。
 L IV 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト。締りが強く、黄褐色土・焼土の塊(1cm)、炭化物粒を少量含む。人為堆積層と判断した。
 L V 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。締りが強く、黄褐色土塊(1cm)が多く、炭化物粒を少量含む。上面より遺構を確認した。人為堆積層と判断。
 8 T (A-A')-P35堆積層
 01 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。締りはやや強い。にぶい黄褐色土塊(1-3cm)、炭化物を少量含む。
 8 T (A-A')-P37堆積層
 01 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。締りは強い。層上部に黄褐色・灰白色土塊(3cm)を少量含む。
 9 T (A-A') 堆積層
 L I 砂利による表土。
 L II-1 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。締りはやや強い。炭化物粒、赤褐色土塊を少量含む。
 L II-2 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。締りはやや強い。炭化物粒、赤褐色土塊(1cm)が多い。
 L III-1 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。締りは強い。褐色土塊(1cm)を多く含む。炭化物粒、赤褐色土塊(1cm)を少量含むことから人為的な堆積層と判断した。また、本層上面より遺構を確認した。
 L III-2 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。締りは強い。褐色土塊(1cm)を多く含むことからL III-1と同様に人為堆積層として判断した。
 9 T (A-A')-P39堆積層 ※01～07は柱を抜き取り後の人為堆積層。08は柱を立てる際の埋土と判断。
 01 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。締りは強い。明黄褐色土塊(1-5cm)を非常に多く含む。焼土塊や炭化物(1cm)を少量含む。
 02 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。締りは強い。にぶい黄褐色土塊・黄褐色土塊(1-2cm)を多く、焼土塊や炭化物(1cm)も少量含む。
 03 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。締りは強い。にぶい黄褐色土・黄褐色土塊(2-3cm)を多く含む。
 04 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。締りは強い。明黄褐色土粒、焼土粒を少量含む。
 05 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。締りは強い。焼土粒、炭化物を少量含む。
 06 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。締りは強い。炭化物を少量含む。
 07 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。締りは強い。黄褐色土塊(1-5cm)を多量、黄褐色土粒、焼土粒を少量含む。
 08 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。締りは非常に強い。焼土塊(1cm)を少量含む。堆積状況より柱を据えた時の埋土と判断。
 9 T (A-A')-P42堆積層
 01 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。締りは強い。浅黄褐色土塊(2cm)、灰白色土粒、焼土粒、炭化物粒が少量含まれる。人為堆積層と判断。
 02 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。締りは強い。黄褐色土塊(3cm)を多く含む。人為堆積層と判断。
 03 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。締りは強い。焼土塊(1cm)を含む。人為堆積層と判断。

図102 7・8・9 T 平面図・断面図

×1 m) である。基本土層は5層に大別した。L I は表土、L II・III は人為堆積層であり、L IV は自然堆積層、L V は地山と判断した。L II・III は、層中に観察した含有物を土塁の積土と考えられ、土塁を崩し、整地した痕跡と判断した。L IV は土塁の積土が崩壊し、自然に流れ込んだ層と判断した。L V は地山である。

【遺構・遺物】L IV 上面よりピット1基 (P33) を確認した。遺物は、P33から出土した、陶器片図106-11が確認されている。この陶器片は、折縁深皿の体部下位の破片であり、内外面に灰釉が観察され、内面の一部が剥落していた。産地は瀬戸地域に求められ、年代は14世紀から15世紀の所産と考えられる。図106-11以外の遺物としては、土師器や瓦質土器の破片が出土しているが、細片のため図示することができなかった。

8 T (図102、写真208)

【規模と基本土層】東西方向に長軸を持つ調査区 (4 m × 1 m) である。基本土層は5層に大別した。L I は表土である。L II は、近現代の陶磁器片が多数出土する層であり、近年の人為堆積層である。L III は粒状の含有物を多く含む層であり、L II が堆積する以前まで、地表面であった可能性が高い。L IV・V は、黄褐色の粒子や土塊を含むことから、人為堆積層と判断した。

【遺構・遺物】L V 上面からは、不整形であるものの、おおよそ30～40cmの柱痕跡を有するピットが5基 (P34-38) 確認された。遺物は、L I・II から出土しているが、既述のとおりに近現代の陶磁器片のみであった。

9 T (図102・107、写真209・210)

【規模と基本土層】南北方向に長軸を持つ調査区 (5 m × 1 m) である。基本土層は3層に大別でき、L I は表土、L II は赤褐色土の粒を含む層である。同層の下位には同色の土塊を多く観察した。L III は褐色土塊を含む層であり、人為堆積層と判断した。

【遺構・遺物】遺構は、L III 上面からピット7基 (P39-45) を確認した。そのうち、柱痕跡を確認したピットはP40-41・43-45であった。P39・43については、遺構の詳細を確認するため、半裁し、遺構の断面形状と堆積層の様相を確認した。P39は遺構確認面から底面まで1.1mを測り、掘り方は径1.1mを超える。底部径は20cmであった。堆積層は、全層黒褐色土であり、含有物の違いにより8層に分層した。ℓ1～7は、柱を抜き取った後に穴を埋め戻した土と考えられる。ℓ8は、ほぼ垂直にℓ1との分層線を引くことができる。この状況から、ℓ8は柱を据える際、柱回りを固めるために埋めた土であろう。遺物は、ℓ7から図107-17の短頸壺の口縁部片を確認した。内外面に被熱の痕跡が認められる。年代は17世紀の所産のものと考えられる。P43は径30cm、遺構確認面から底面までを35cm測る。底面は平坦であった。遺物は出土していない。

P39以外で確認された遺物は、図107-12～16であり、L I～III より確認されている。L I からは、灰釉陶器の折縁深皿底部片 (12)、L II-1からは、直縁大皿の体部片 (14)

が出土した。いずれも産地は瀬戸地方に求められ、14世紀から15世紀の年代が与えられるものである。(13)は瓦質土器の甕口縁部片、(15)は丸瓦片、(16)は瓷器系の甕肩部片である。いずれも在地産である。年代は中世とした。

10 T (図103、写真211・212)

【規模と基本土層】南北方向に長軸を持つ調査区(4m×1m)である。基本土層は4層に大別した。L Iは表土、L IIは黄褐色土塊を多く含む層であり、L IIIは焼土塊や黄褐色土粒を含む層であった。L IIとL IIIは、堆積層中の土塊の含有状況から人為堆積層と判断した。L IVは地山である。この調査区では、南側の地山が一段高くなっていた。L IIIは、この段差を埋めるように堆積しており、段により発生していた高低差を解消するために埋めた地業の痕跡と考えられる。

【遺構・遺物】遺構は、L III上面L IV上面において19基のピット(P46～64)を検出した。そのうち、P46は、8・9 Tでも確認した。直径1m程度の掘方をもつ遺構と想定され、中央付近には柱痕跡が検出されている。P48も同様であり、柱を抜き取った後、埋め戻した痕跡と考えられる。その他のピットは柱痕跡を確認することができなかった。遺物はL IとL IIIから瓦質土器を確認したが、細片のため図示できなかった。

11 T (図103・107、写真213・214)

【規模と基本土層】南北方向に長軸を持つ調査区(2m×1m)である。基本土層は4層に

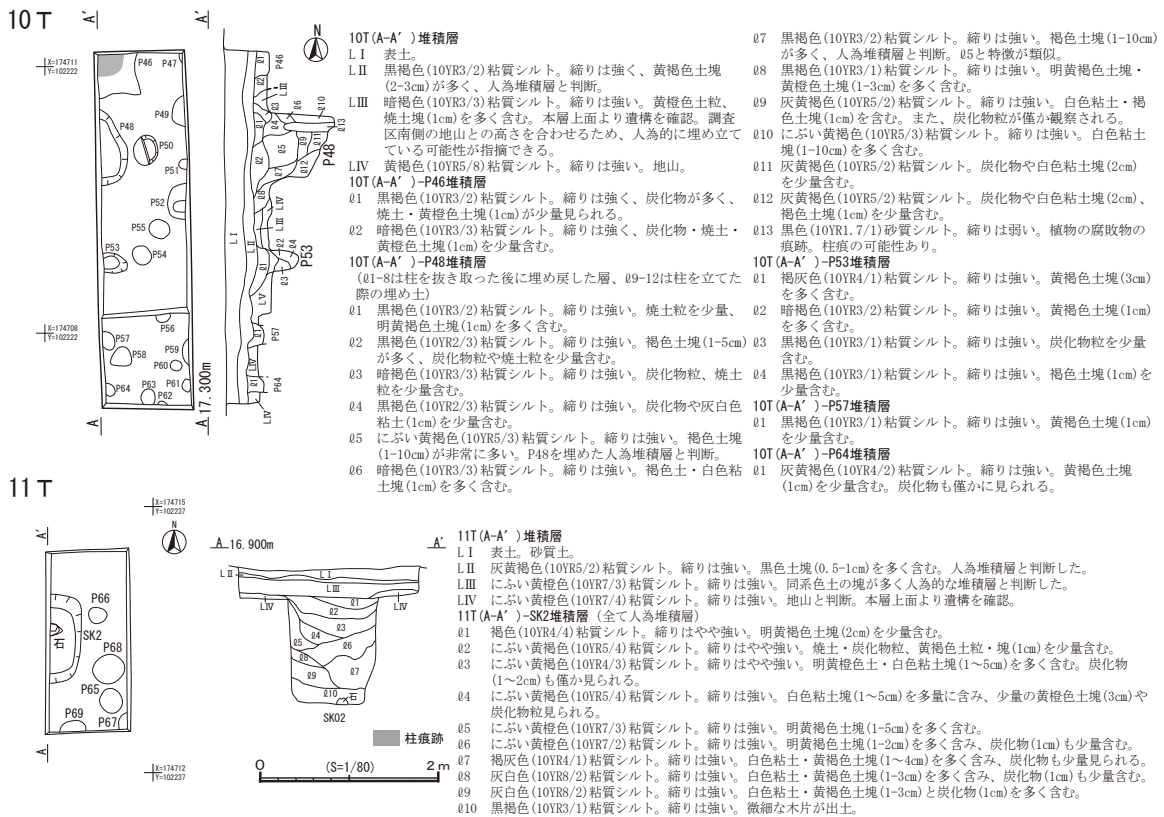


図103 10・11 T平面図・断面図

大別した。L Iは表土、L II・IIIは粘性の強いシルト層である。両層とも黒色土塊や褐色土塊を含むことから人為堆積層と判断した。L IVは、黄橙色の粘質シルトからなる地山である。

【遺構・遺物】LIV上面から土坑1基(SK2)、ピット5基(P65-69)を確認した。SK2の堆積層は10層からなる。01～9は、土塊や炭化物を含む人為堆積層と判断した。010は黒色土を呈し、非常に粘りが強いシルトであった。本層を掘削時には湧水も確認され、底面直上には木片が多数残存していた。底面の形状は平坦であった。遺物は010から出土しており、手づくねのかわらけ(図107-18)、瓷器系の片口鉢片(図107-19)、甕胴部片(図107-20)が出土した。年代はいずれも13世紀から14世紀に当たる。底面直上の層からの出土していることから、SK2は、出土遺物に近い年代の遺構である可能性が高い。その他、L IIIから瓷器系甕片や瓦質土器片が出土しているが、細片のため図示することができなかった。

B地区のまとめ

本区の調査成果としては、6Tの調査により、土塁が確実に存在することを明らかにした。また、土塁築造以前に穿たれた礎盤を有する柱穴(P31)により、土塁築造以前に建物等が存在した可能性が高まった。土塁とやや距離を置く空間(8-10T)には、直径1m前後の掘方を有する柱穴と小規模のピットが確認された。このことにより、社務所東側においても、数多くの建物等の建設が、複数回行われていた可能性が指摘できる。さらに、表土以下には、人為的な堆積層の広がりを確認しており、それらの層は複数の整地面を構築している可能性がある。これらの整地面を構成している堆積層や遺構からの出土遺物より、整地面の年代は、おおよそ13世紀～16世紀までに実施されたものであることが分かった。

C地区(12T～15T)

12T(図104・108、写真215)

【規模と基本土層】南北方向に長軸を持つ調査区(5m×1m)である。基本土層は3層に大別でき、L Iは表土、L IIは締りの強い土塊を多く含む人為堆積層、L IIIは褐色粘質シルトからなる地山である。

【遺構・遺物】遺構は、L III上面から溝跡1条(SD7※SD6は欠番)、ピット5基(P70～74)を確認した。SD7

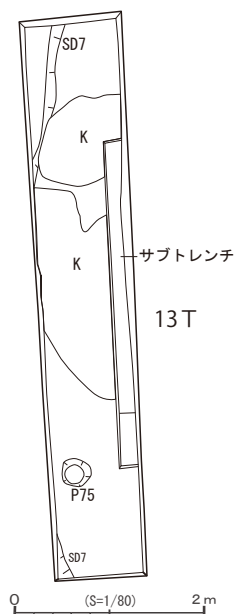
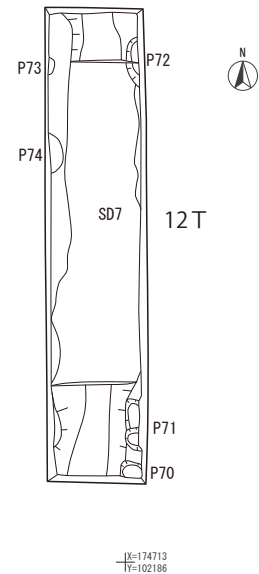


図104 12・13T平面図

は、調査区内を南北方向に延びており、幅は0.7～1 mを測る。SD 7の堆積層を確認するために、調査区の南北壁に沿ってサブトレンチを設定した。堆積層は両壁断面において、レンズ状の堆積状況を呈しており、本遺構の埋没は自然堆積によるものと考えられる。北壁に設置したサブトレンチからは、SD 7底面付近において、2点の土師器坏片（図108-21・22）が出土した。2点とも外面にヘラケズリを施した後、口縁部をヨコナデによる調整を行っていた。内面はミガキ調整の後、黒色処理が施されていた。これらの特徴から、年代は8世紀前半に位置づけられる。5基のピットのうち、P70-72はSD 7より新しいことが新旧関係より明らかとなった。いずれのピットも柱痕跡は確認されていない。P70の覆土からは、表面に燻した痕跡が残る平瓦片（図108-24）が出土している。また、L IIから、瓷器系の壺片（図108-23）が出土している。

13 T（図104・108・109、写真216）

【規模と基本土層】南北方向に長軸を持つ調査区（6 m×1 m）である。基本土層は3層に大別でき、L Iは表土、L IIは明黄褐色の粘質シルトからなる地山である。また、調査区の北半分は倒木痕や後世の攪乱により破壊されていた。

【遺構・遺物】遺構は、L III上面より検出しており、12 Tで確認した溝跡（SD 7）が調査区の南北端付近で確認できた。ピットは、調査区の中央からやや南側に1基（P75）確認したが、柱痕跡は確認できなかったが、遺構底面付近の覆土より、かわらけが3点（図108-29・30・31）出土した。（29）は外面が燻されており黒色化していた。ロクロにより成形されており、底部には回転糸切痕を残す。（30）もロクロにより成形されており、底部には回転糸切痕を残している。（31）は手づくねのかわらけである。残部は口縁部のみであり、外面は被熱により黒色を呈する。これら3点のかわらけの年代は、14世紀から15世紀の所産のものと考えられる。また、L Iからは、灰釉陶器の折縁深皿底部片（図108-25）、ロクロ成形によるかわらけの底部片（図108-26）を確認した。いずれも14世紀から15世紀の年代が与えられよう。また、内外面に燻により黒色処理された丸瓦片（図108-27・28）も出土している。

14 T（図105・109、写真217）

【規模と基本土層】東西方向に長軸を持つ調査区（4 m×1 m）である。基本土層を4層に大別でき、L Iを表土とし、L II・IIIは黄褐色土塊や炭化物を含む人為的な堆積層と判断した。L IVは地山である。

【遺構・遺物】遺構は、L III上面よりピット10基（P76～84・87）を確認した。ピットのうち柱痕跡を有する遺構は5基（P77・78・81・83・

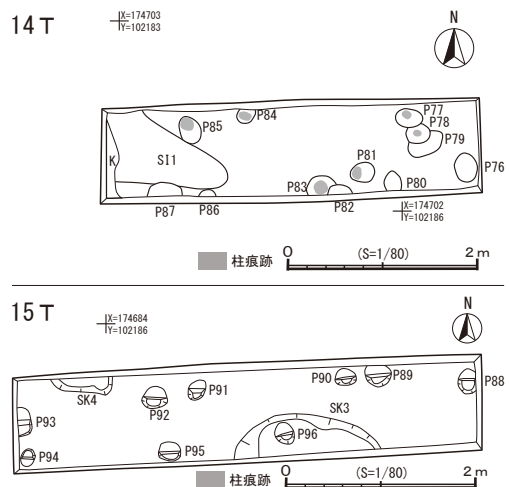


図 105 14・15 T 平面図

84) である。LⅣ上面からは竪穴住居跡1軒(SⅠ1)、ピット2基(P85・86)を確認した。SⅠ1周辺からは焼土粒が多量に分布している状況を観察したことより、カマド煙道部付近の可能性が高い。SⅠ1の検出面からは土師器坏1点(図109-33)、土師器甕片1点(図109-34)が出土している。形体の特徴より、土師器の年代は8世紀前半に求めらよう。その他の遺物として、LⅡ-1から火鉢の口縁部片(図109-32)が出土している。この口縁部を真上から観察すると、「S」字状の曲線の一部を描いていることが分かる。これは輪花状の口縁部の一片であり、奈良地域で生産された奈良火鉢特有の形状を示している。年代は13世紀から14世紀にあたる。

15T(図105、写真218)

【規模と基本土層】東西方向に長軸を持つ調査区(5m×1m)である。基本土層は3層に大別できる。LⅠは表土、LⅡは焼土粒、炭化物、黄橙色土塊を含む堆積層であり、人為的な堆積によるものと考えられる。LⅠとLⅡは近現代の陶磁器片や瓦礫を多く含む層であった。LⅢは地山であり、浅黄橙色の粘質シルトからなる。

【遺構・遺物】確認した遺構は、LⅡ上面より土坑1基(SK3)、LⅢ上面より土坑1基(SK4)、ピット8基(P88～95)、SK3の底面よりピット1基(P96)であった。遺物は、既述した陶磁器片や瓦礫以外は出土していない。

C区のみとめ

本区の調査により、各調査区とも地表面から地山までの深さが浅く、近現代より古い整地層の痕跡が少なかった。遺構は、絵馬殿周辺において数多くのピットを確認しており、柱を持つ建物が存在する可能性が高い。また、平成22年度調査と同様に、8世紀代の竪穴住居跡(SⅠ1)の一部を確認したことから、絵馬殿から西側には8世紀代の集落が存在すると考えられる。社殿の西側を南北に走る溝跡(SⅡ7)は、8世紀前半の土師器片が出土しているものの、その他の遺物は出土しておらず、既述した集落の関連遺構の可能性も残す遺構として捉えておく。

8. 調査所見

試掘調査の範囲となった社務所周辺は、過去の調査歴は無く、埋蔵文化財の分布状況は不明であった。そのため、今回の調査によって、その一端を垣間見ることができたことは、今後、小高城跡の本丸に存在したと想定される建物やその他施設の配置や構造を解き明かす上で、大きな成果となった。

具体的な成果としては、まず、本丸東側を巡る土塁の存在を明確にしたことである。6Tの調査により、土塁の積土を確認したことにより、土塁が確実に存在していた根拠を示すことができた。加えて、土塁を築造する以前に、礎盤を使用した柱を必要とする建物等が存在していたことも確認することができた。また、社務所東側に区域については、大小様々な大きさの柱穴が、6T～11Tにおいて複数確認されており、複数回に渡る建物の建

設が行われていた可能性を指摘することができよう。その内、P39の覆土には17世紀代の陶器片が、遺構を埋め戻した土層より出土しており、この遺構に設置されていた柱が17世紀代まで機能していた可能性が指摘できる。

次に複数面確認された整地層である。A区とB区においては、人為堆積層として判断した層が複数存在している。断片的ではあるが、これらの層は面的な広がりをもっている可能性があり、整地事業の結果であると判断した。出土遺物により年代も凡そ把握することができ、中世から近世初頭にかけて、最低でも2回の大規模な整地事業が行われていると推察することができる。

このように、本丸東端の区域においては、土塁や建物等の建設とともに整地による地盤改良が盛んに実施されていたことが明らかとなり、本丸東端のエリアにおける土地利用の一端を垣間見ることができた成果となった。遺構覆土や人為堆積層中からの出土遺物の年代からも、南北朝期から戦国期を示すことから、相馬氏が、本地に居城を築いた以後に実施された地業の痕跡であると推察することは難しくない。

また、絵馬殿周辺に展開するピット群は、平成22年度に確認されたピット群とは距離を置くものの、当区域においても建物等の建設を行った痕跡である。今後、当区域におけるピット群の平面的な分布状況の把握が求められよう。

さらには、8世紀代の集落の実態も僅かに確認したところであり、今後の詳細な調査が必要とされる。

以上のように、今回の調査で調査対象となった社務所周辺は、広範囲において小高城跡の詳細な姿を現在に伝える、非常に保存状態のよい埋蔵文化財が存在することが明らかとなった。今後この調査成果に基づき史跡の保護を図る必要がある。

※ 発掘調査で出土した遺物については、公益財団法人福島県文化振興財団の飯村均氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げます。



写真 195 1 T 調査状況



写真 196 1 T 土層断面詳細



写真 197 2 T 調査状況



写真 198 3 T 調査状況



写真 199 4 T 調査状況



写真 200 4 T 土層断面



写真 201 5 T 調査状況



写真 202 調査地近景



写真 203 6 T 調査状況



写真 204 6 T 土塁積土土層断面



写真 205 6 T 土塁下遺構検出状況



写真 206 6 T P31 礎盤検出状況



写真 207 7 T 調査状況



写真 208 8 T 調査状況



写真 209 9 T 調査状況

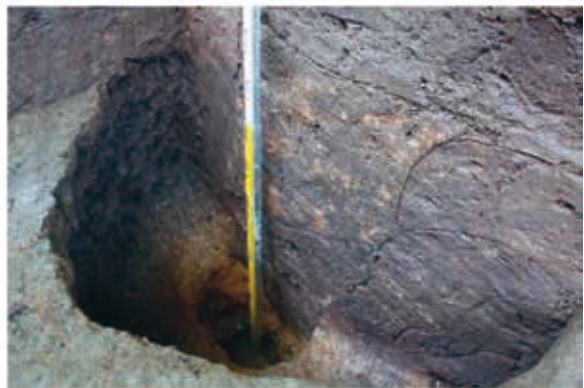


写真 210 9 T P39 土層断面



写真 211 10T 調査状況



写真 212 10T P48 土層断面



写真 213 11T 調査状況



写真 214 11T SK2 土層断面



写真 215 12T 調査状況



写真 216 13T 調査状況



写真 217 14T 調査状況



写真 218 15T 調査状況

第1項 小高城跡（4次調査）



図 106 小高城跡 4 次調査出土遺物 (1)

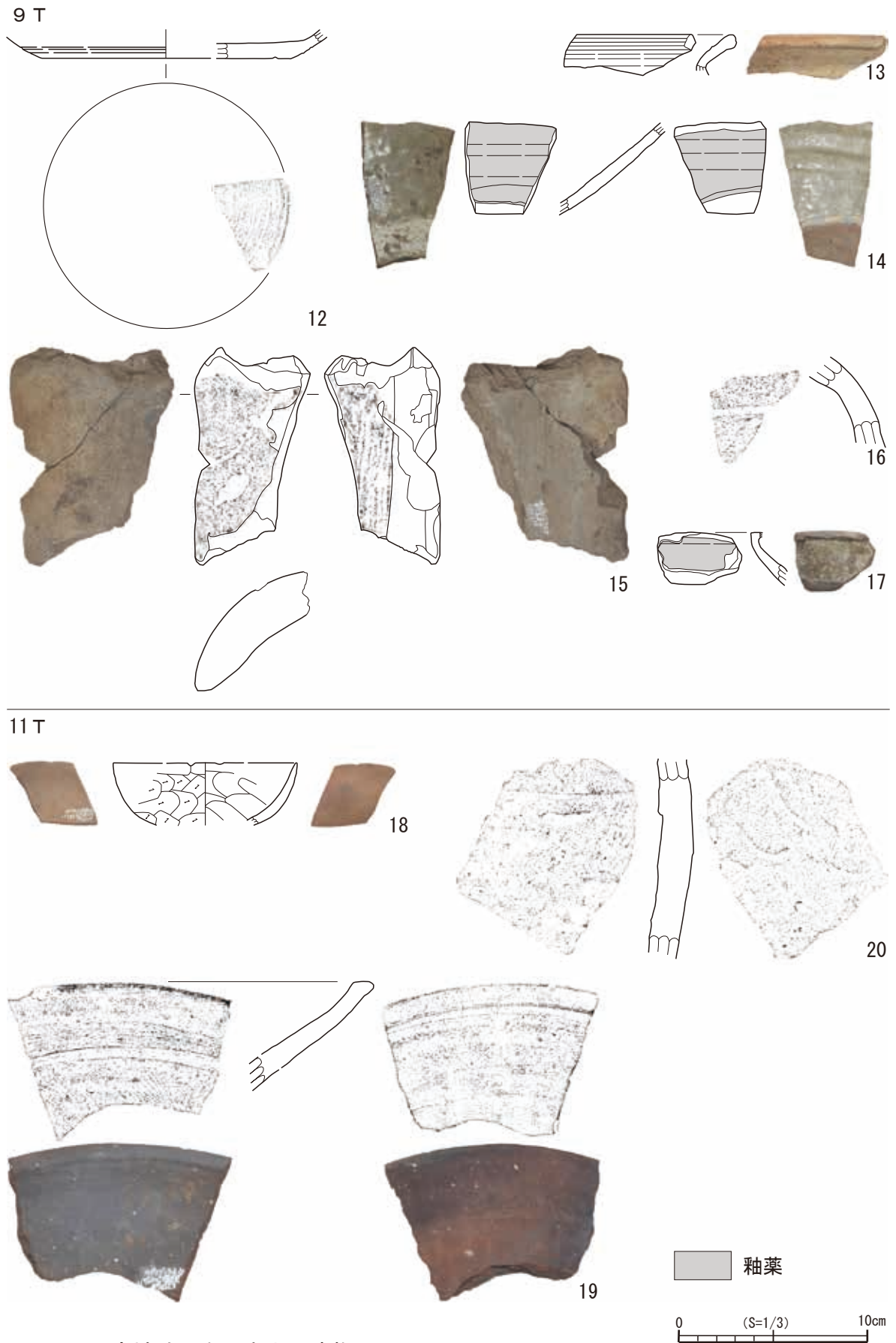
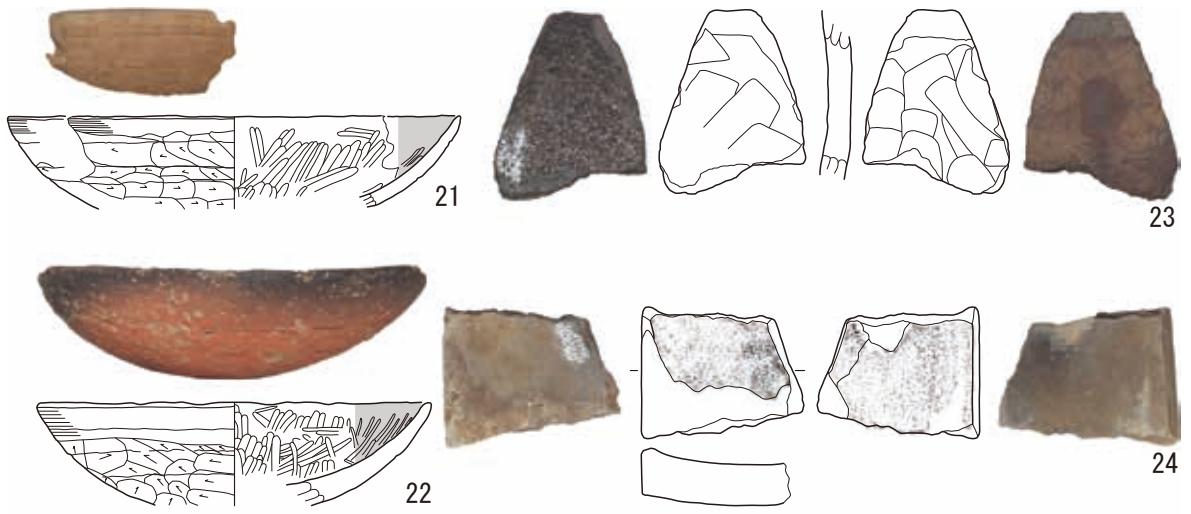
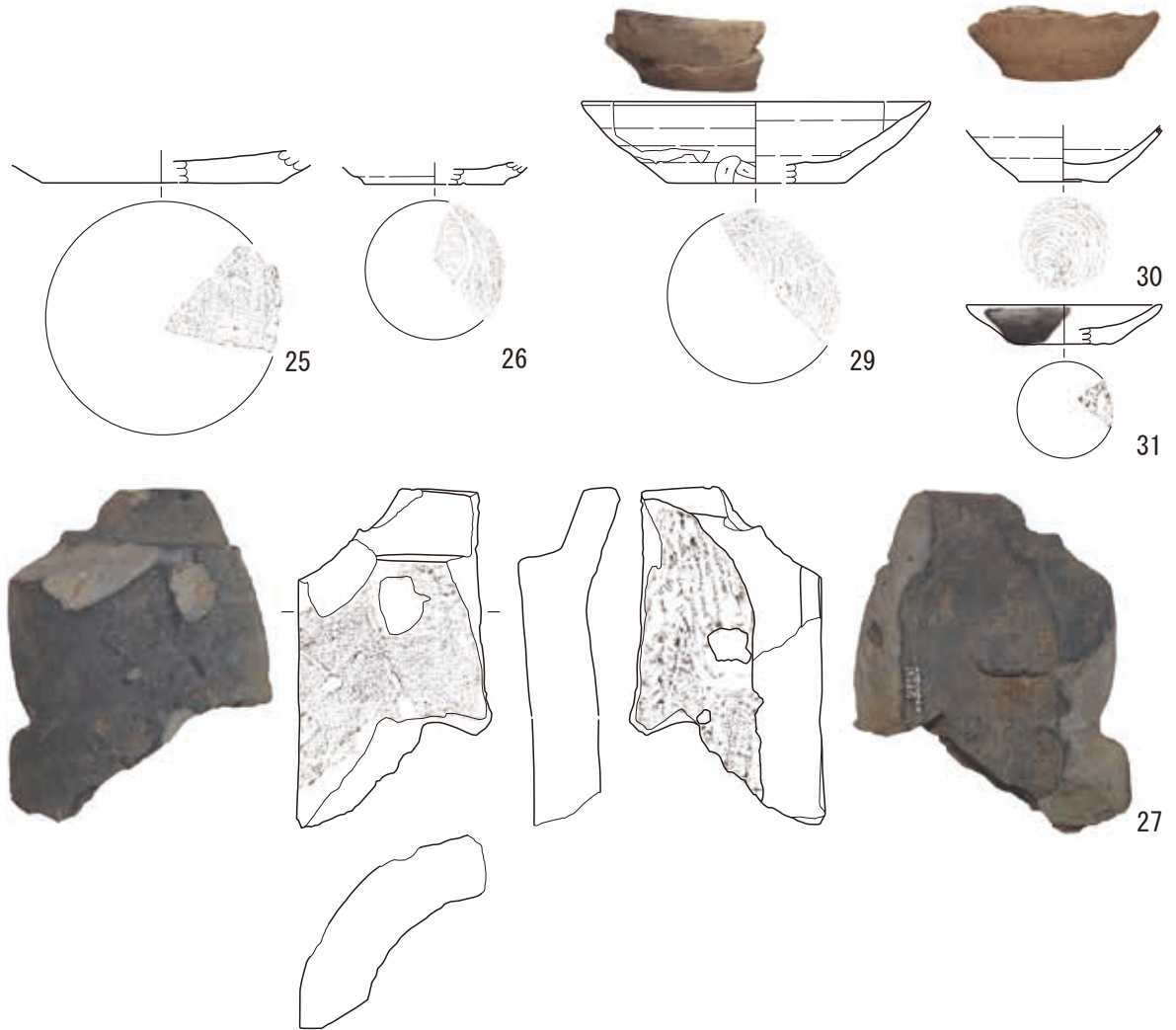


図 107 小高城跡 4 次調査出土遺物 (2)

12T

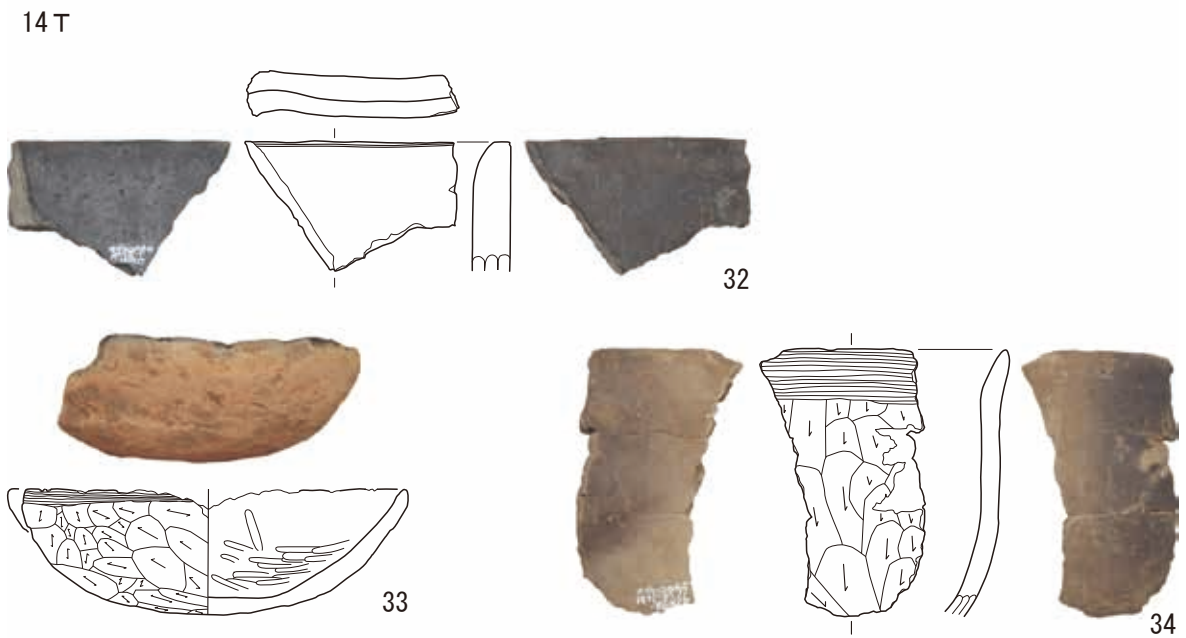
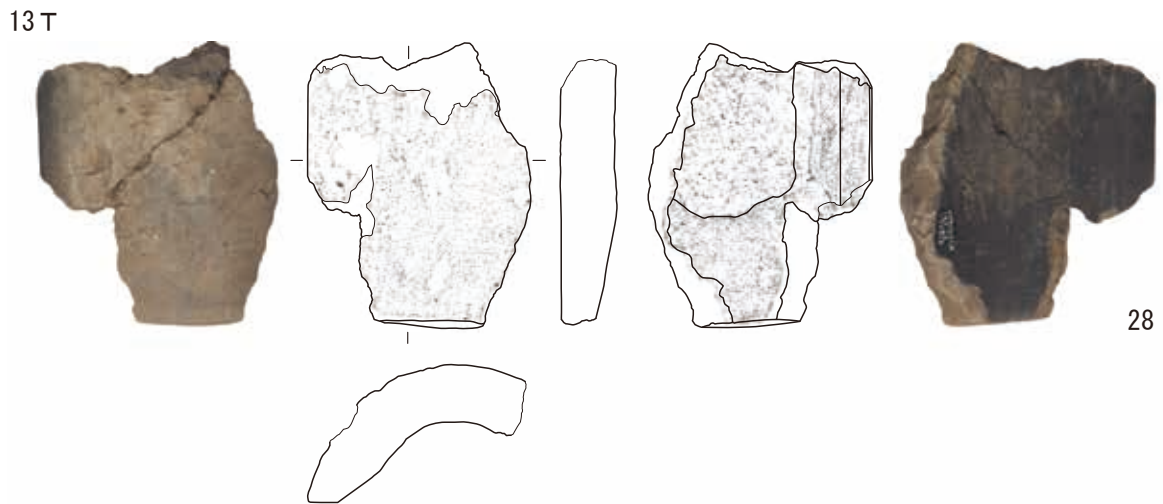


13T



0 (S=1/3) 10cm

図 108 小高城跡 4 次調査出土遺物 (3)



表採

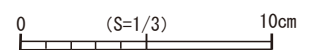
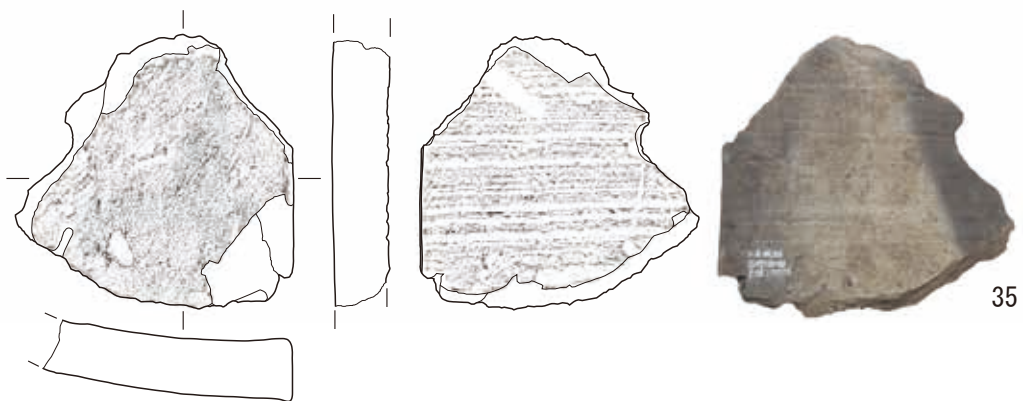


図 109 小高城跡 4 次調査出土遺物 (4)

第1項 小高城跡（4次調査）

図版番号	出土遺構・層	器種	残存部位	産地	年代	特徴
図106-1	1 TL I	かわらけ	口縁-底部	在地	16世紀	ロクロ成形、回転糸切、丁寧な作り。
図106-2	1 TL I	瓷器系 甕	体部片	在地	中世	
図106-3	1 TLIV	瓦質土器 播鉢	体部上位片	在地	15-16 c	燻加工が被熱により滅失。
図106-4	1 TLIV下位	瓦質土器 角形火鉢	口縁部片	在地	15-16 c	
図106-5	2 TLIV	丸瓦		在地	中世	凹面に布目痕が見られる。側面に面取による整形痕が見られる。外面は燻加工があったが被熱により滅失。
図106-6	2 T P14堆積土	瓦質土器 三足付香炉	体部-底部	在地	15-16 c	被熱し、表面は状態が悪い。
図106-7	6 TL I-1	かわらけ	底部片	在地	12 c 前-13 c	
図106-8	6 TL I-1	瓷器系 壺	肩部片	渥美系	12-13 c	被熱している。自然釉が見られる。
図106-9	6 TL I-1	瓦質土器 香炉	体部片	在地	15-16 c	燻加工が被熱により滅失。
図106-10	6 TL I-1	平瓦	側面-中央部	在地	中世	外面に沈線あり。離れ砂の痕跡有。
図106-11	7 T P3302	灰釉陶器 折縁深皿	体部下位片	瀬戸	14-15 c	内面に釉葉の痕跡あり。
図107-12	9 TL I	灰釉陶器 折縁深皿	底部片	瀬戸	14-15 c	
図107-13	9 TL I	瓦質土器 甕	口縁部片	在地	中世	燻が被熱により損失。口唇部に沈線が巡っている。
図107-14	9 TL II-2	灰釉陶器 直縁大皿	体部片	瀬戸	14-15 c	
図107-15	9 TL II-2	丸瓦	瓦当接続部分	在地	中世	
図107-16	9 TL III	瓷器系 甕	肩部片	常滑	中世	内面横方向に沈線が見られる。
図107-17	9 T P3907	灰釉陶器 短頸壺	口縁-頸部片	在地	17 c	被熱している。外面に釉葉が一部残る。
図107-18	11T SK02010	かわらけ	口縁-体部	在地	13-14 c	手づくね、外面ナデ整形、内面ヘラナデ調整、金雲母が胎土に見られる。
図107-19	11T SK02010	瓷器系 片口鉢	口縁部片	在地	13 c 前	口縁突端に突出する形状は在地でみられる。外面にタタキ目が見られる、口縁下位に沈線が見られる。
図107-20	11T SK02010	瓷器系 甕	体部片	在地	13-14 c	
図108-21	12T SD7堆積土	土師器 坏	口縁-体部片	在地	国分寺下層式 (8世紀前半)	非ロクロ成形、内黒（ミガキ）、被熱による内面黒色が一部損失。輪積痕あり。
図108-22	12T SD7堆積土	土師器 坏	口縁-体部片	在地	国分寺下層式 (8世紀前半)	非ロクロ成形、内黒（ミガキ）、被熱による内面黒色が一部損失。輪積痕あり。
図108-23	12 TL II	瓷器系 壺	体部片	在地	中世	
図108-24	12 T P70堆積土	平瓦	側面部片	在地	中世	燻加工あり。外面に離れ砂の痕跡あり。
図108-25	13 TL II	灰釉陶器 折縁深皿	底部片	瀬戸	14-15 c	
図108-26	13 TL II	かわらけ	底部片	在地	中世	ロクロ成形、回転糸切、内面に被熱痕。
図108-27	13 TL II	丸瓦	玉縁部-体部片	在地	中世	内外面とも燻加工あり、玉縁部がら体部にかけて、布目を引きずった痕跡あり、側面部を面取り加工済み。
図109-28	13 TL II	丸瓦	側面部-狭端面部	在地	中世	内外面とも燻加工がされているが、外面のみ燻加工が被熱により滅失している。凹面はヘラナデ調整されているが、布目痕は消し切れていない。側面部は面取り加工済み。
図108-29	13 T P75覆土	かわらけ	口縁部-底部	在地	14-15 c	内面に炭・煤が残る。燻加工は被熱により消失。ロクロ成形、回転糸切。
図108-30	13 T P75覆土	かわらけ	体部-底部	在地	14-15 c	褐灰色で硬質。底径が3.6cmであり、体部はハの字状に直線的に立ち上がる。
図108-31	13 T P75覆土	かわらけ	口縁部片	在地	14-15 c	被熱により内外面とも状態が悪い。
図109-32	14 TL II-1	奈良火鉢	口縁部片	奈良?	13-14 c	花形口縁の一部。内外面に燻加工があり。口唇部は面取りされている。
図109-33	14 T SI1検出面	坏	口縁部-底部	在地	国分寺下層式 (8世紀前半)	丸底、外面ヘラケズリ、内面ミガキ黒色処理。
図109-34	14 T SI1検出面	甕	口縁-体部	在地	国分寺下層式 (8世紀前半)	体部縦方向のヘラケズリ後、口縁部ココナデ、内面ナデ調整。
図109-35	本丸西側斜面表探	平瓦	側面片	在地	16世紀末	凸面にコビキB。内面はヘラケズリ後、ナデ調整、側面はヘラにより面取痕あり。

表4 小高城跡4次調査出土遺物観察表

表4 小高城跡4次調査出土遺物観察表

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみそうましないいせきはつくつちょうさほうこくしょ13
書名	南相馬市内遺跡発掘調査報告書13
副書名	平成29・30・令和元年度試掘調査報告
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第33集
編著者名	荒淑人・濱須 脩・小椋 紗貴江
編集機関	南相馬市教育委員会文化財課
所在地	〒975-0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70番地
発行年月日	西暦2019年（令和元年）10月31日

所収遺跡	所在地	コ ー ド 市 町 村 遺 跡 番 号	北 緯 東 経	調 査 期 間 上 下 段 着 完	面 積 (㎡)	調 査 原 因
植松 B 遺跡 2 次 調 査	南相馬市原町区 上北高平字植松	212500151	37° 39' 35" 140° 57' 39"	20180410 20180413	240.0	工場建設
桜井 D 遺跡 1 7 次 調 査	南相馬市原町区 上渋佐字原田	212500175	37° 38' 19" 140° 59' 43"	20180416 20180422	40.0	戸建住宅建設
八幡林 遺跡 18 次 調 査	南相馬市鹿島区 寺内字八幡林	212500041	37° 41' 48" 140° 57' 09"	20170426	39.0	個人住宅建設
八郎内 遺跡 8 次 調 査	南相馬市鹿島区 西町三丁目	212500657	37° 42' 43" 140° 57' 30"	20180427	40.0	集合住宅建設
大田和広畑遺跡 6 次 調 査	南相馬市小高区 金谷字北原	212500472	37° 32' 56" 140° 56' 30"	20180501 20180502	50.0	太陽光発電施設建設
桜井 C 遺跡 5 次 調 査	南相馬市原町区 上渋佐字原田	212500177	37° 38' 22" 140° 59' 40"	20180507 20180511	60.0	集合住宅建設
八幡林 遺跡 19 次 調 査	南相馬市鹿島区 寺内字八幡林	212500041	37° 41' 49" 140° 57' 20"	20180515 20180605	100.0	個人住宅建設
池ノ沢 遺跡 2 次 調 査	南相馬市小高区 神山字池ノ沢	212500628	37° 31' 26" 140° 58' 12"	20180619 20180622	150.0	土砂採取事業
大田和広畑遺跡 7 次 調 査	南相馬市小高区 大田和字広畑	212500472	37° 32' 56" 140° 57' 03"	20180621	10.0	太陽光発電施設建設
白幡前 遺跡 1 次 調 査	南相馬市小高区 大井字上山畑	212500633	37° 34' 19" 141° 00' 27"	20180621	4.0	太陽光発電施設建設
高見町 B 遺跡 6 次 調 査	南相馬市原町区 高見町一丁目	212500346	37° 38' 23" 140° 59' 19"	20180710	40.0	集合住宅建設
高松 C 遺跡 2 次 調 査	南相馬市原町区 上北高平字高松	212500338	37° 39' 48" 140° 57' 05"	20180719	12.0	個人住宅建設
片草南原遺跡 3 次 調 査	南相馬市小高区 片草字北原	212500454	37° 34' 41" 140° 58' 07"	20180810	2.0	個人住宅建設
鯖沢 遺跡 1 次 調 査	南相馬市小高区 神山字鯖沢	212500545	37° 31' 56" 140° 56' 42"	20180830 20180904	31.0	土砂採取事業
入竜田 C 遺跡 1 次 調 査	南相馬市原町区 深野字入竜田	212500700	37° 40' 48" 140° 55' 52"	20180911 20181016	199.5	土砂採取事業

所収遺跡	所在地	コ一卜 市町村 遺跡番号	北東 緯 經	調査期間 着 段 完	面積 (m ²)	調査原因
たまきだいらいせき 玉ノ木平C遺跡 1次調査	南相馬市小高区 吉名字白旗平	212500535	37° 33' 16" 140° 59' 02"	20180928	126.0	太陽光発電 施設建設
かみひろはた 上広畑B遺跡 1次調査	南相馬市小高区 小高字上広畑	212500608	37° 34' 21" 140° 58' 59"	20181002	40.0	太陽光発電 施設建設
きよのぶいせき 清信遺跡 1次調査	南相馬市小高区 大井字清信	212600522	37° 34' 14" 141° 00' 38"	20181003	60.0	太陽光発電 施設建設
おはらいせき 小原遺跡 1次調査	南相馬市原町区 下太田字小原	212500187	37° 37' 22" 140° 58' 59"	20181018	23.6	土砂採取事業
みやだいら 宮平遺跡 2次調査	南相馬市原町区 深野字宮平	212500132	37° 40' 19" 140° 55' 47"	20181108	40.0	太陽光発電 施設建設
びくにさわいせき 比丘尼沢B遺跡 2次調査	南相馬市原町区 上北高平字比丘尼沢	212500724	37° 32' 41" 140° 58' 10"	20181214	12.0	土砂採取事業
なわはらいせき 諏訪原遺跡 2次調査	南相馬市小高区 塚原字沼ノ上	212500524	37° 34' 25" 141° 01' 11"	20181217	38.6	太陽光発電 施設建設
ごしやうちいせき 御所内遺跡 1次調査	南相馬市鹿島区 横手字御所内	212500017	37° 43' 02" 140° 57' 14"	20190207 20190208	16.0	個人住宅建設
ながわたりよこあなぼぐん 永渡横穴墓群 1次調査	南相馬市鹿島区 南柚木字八久々沢	212500011	37° 43' 40" 140° 57' 19"	20190213 20190531	21.1	市道改良工事
きたみやうちいせき 北明内遺跡 3次調査	南相馬市原町区 石神字北明内	212500699	37° 32' 41" 140° 58' 10"	20190301	491.7	土砂採取事業
おおたわひろはた 大田和広畑遺跡 8次調査	南相馬市小高区 大田和字広畑	212500472	37° 33' 01" 140° 57' 04"	20190304 20190315	700.0	園芸団地 造成工事
なかけばいせき 巢掛場遺跡 4次調査	南相馬市原町区 萱浜字巢掛場	212500348	37° 38' 00" 140° 59' 42"	20190320 20190322	80.0	事務所建設
だいはらいせき 大悲山遺跡 1次調査	南相馬市小高区 泉沢字後屋	212500624	37° 32' 37" 140° 59' 02"	20190318	4.0	農業倉庫 建設
おおいはなわいせき 大井花輪遺跡 2次調査	南相馬市小高区 大井字花輪	212500491	37° 34' 06" 141° 00' 20"	20190322	20.0	太陽光発電 施設建設
まつがさわいせき 松ヶ沢A遺跡 1次調査	南相馬市原町区 小木迫字松ヶ沢	212500694	37° 34' 43" 140° 59' 33"	20181030 20181218	175.1	太陽光発電 施設建設
まつがさわいせき 松ヶ沢B遺跡 1次調査	南相馬市原町区 小木迫字松ヶ沢	212500695	37° 34' 30" 140° 59' 27"	20181030 20181218	49.8	太陽光発電 施設建設
むかい 向畑遺跡 1次調査	南相馬市原町区 小木迫字松ヶ沢	212500693	37° 34' 34" 140° 59' 05"	20181030 20181218	107.5	太陽光発電 施設建設
はらまちくいしがみ 原町区石神 坂下地区	南相馬市原町区 石神字坂下	—	37° 38' 26" 140° 56' 09"	20180724	10.0	太陽光発電 施設建設
おだかくわねざわ 小高区上根沢 おおくぼちく 大久保地区	南相馬市小高区 上根沢字大久保	—	37° 32' 32" 140° 57' 50"	20181005 20181025	56.0	土砂採取事業
おだかくかなや 小高区金谷 わかばやし 若林地地区	南相馬市小高区 金谷字若林	—	37° 33' 13" 140° 55' 46"	20181025	4.0	土砂採取事業 搬入路敷設

所収遺跡	所在地	コ一ド市町村遺跡番号	北東緯経	調査期間 上下段： 着完	面積 (m ²)	調査原因
おだかじょうあつちようさ 小高城跡 4次調査	南相馬市小高区 小高字古城	212500460	37° 34' 07" 140° 59' 24"	20180313 20180530	68.0	社務所改築 計画策定

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植松B遺跡 2次調査	散布地、集落跡	縄文・奈良～平安	なし	なし	
桜井D遺跡 17次調査	散布地、集落跡	縄文～平安	竪穴住居跡、溝跡	土師器、須恵器	
八幡林遺跡 18次調査	散布地、集落跡	縄文～古墳	古墳(周溝)	なし	
八郎内遺跡 8次調査	散布地	古墳～平安	なし	なし	
大田和広畑遺跡 6次調査	散布地、集落跡	縄文・奈良～平安	なし	なし	
桜井C遺跡 5次調査	散布地、集落跡	古墳	竪穴住居跡	土師器	
八幡林遺跡 19次調査	散布地、集落跡	縄文～古墳	竪穴住居跡	土師器	
池ノ沢遺跡 2次調査	製鉄跡	古墳～平安	木炭焼成土坑	なし	
大田和広畑遺跡 7次調査	散布地、集落跡	縄文・奈良～平安	なし	なし	
白幡前遺跡 1次調査	散布地	縄文・古墳	土坑	なし	
高見町B遺跡 6次調査	散布地	縄文～平安	なし	土師器	
高松C遺跡 2次調査	散布地	縄文・奈良～平安	なし	なし	
片草南原遺跡 3次調査	散布地	縄文～平安	なし	なし	
鯖沢遺跡 1次調査	製鉄跡	奈良～平安	なし	なし	
入竜田C遺跡 1次調査	製鉄跡	平安	竪穴住居跡、木炭焼成土坑	土師器	
玉ノ木平C遺跡 1次調査	散布地	縄文～弥生・奈良～平安	溝跡	なし	
上広畑B遺跡 1次調査	散布地	古墳～平安	なし	なし	
清信遺跡 1次調査	散布地	弥生～平安	竪穴住居跡、溝跡、小穴	土師器	
小原遺跡 1次調査	散布地	弥生	なし	なし	
宮平遺跡 2次調査	散布地	縄文～弥生	なし	なし	
比丘尼沢B遺跡 2次調査	製鉄跡	奈良～平安	なし	なし	
諏訪原遺跡 2次調査	散布地	縄文～平安	小穴	なし	
御所内遺跡 1次調査	散布地	縄文	なし	なし	
永渡横穴墓 1次調査	横穴墓	古墳	横穴墓	なし	
北明内遺跡 3次調査	製鉄跡	平安	木炭窯跡、木炭焼成土坑、廃滓場	鉄滓	

所 収 遺 跡	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
大田和広畑遺跡 8次調査	散布地、集落跡	縄文・奈良～平安	なし	なし	
巢掛場遺跡 4次調査	散布地	縄文～弥生・奈良～中世	なし	なし	
大悲山遺跡 1次調査	散布地、寺社跡	平安	なし	なし	
大井花輪遺跡 2次調査	散布地	縄文～近世	竪穴住居跡	土師器	
松ヶ沢A遺跡 1次調査	製鉄跡	平安	廃滓場、木炭窯跡	鉄滓	
松ヶ沢B遺跡 1次調査	製鉄跡	平安	廃滓場、製鉄炉跡、木炭窯	鉄滓	
向畑遺跡 1次調査	製鉄跡	平安	廃滓場、木炭窯跡	鉄滓	
原町区石神 坂下地区	—	—	なし	なし	
小高区上根沢 大久保地区	塚状遺構	—	なし	なし	
小高区金谷 若林地地区	—	—	なし	なし	
小高城跡 4次調査	集落跡、城館跡	奈良～近世	竪穴住居跡、柱穴、土塁	土師器、瓦、陶磁器	県指定史跡

印刷 2019年10月31日
発行 2019年10月31日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第33集
南相馬市内遺跡発掘調査報告書13
—平成29・30・令和元年度試掘調査—

編集 南相馬市教育委員会 文化財課
発行 南相馬市教育委員会
〒975 - 0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70番地

印刷 有限会社 愛原印刷所
〒975 - 0003 福島県南相馬市原町区栄町一丁目8番地
